
超次元ゲイム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

らい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

【Zコード】

N6621W

【作者名】

らい

【あらすじ】

どこにでも居るような一人の青年、沖中宏樹。そんな彼に降りかかる「レでもかと言つくらいのテンプレな不幸。でもやつぱりテンプレだけあって転生することができることとなつた。彼が転生先に選んだのは「超次元ゲームネプテューヌmk2」。さて、彼はこの世界でどのように生きていいくのか。

現在は原作序章にてマジック・ザ・ハード、ジャッジ・ザ・ハードと戦闘中。

プロローグと物語の誕生能力の咀嚼也（前書き）

ひとつあえず、書を始めてみました。

プロローグと物語の転生時能力のお品書き

「さて、Jリーカーは一体どうなんだろう」「うう、そつ言つて、俺は辺りを見渡してみる。

見渡しては見たが、何もない白い空間が広がつてゐるだけだった。何か思ひつきそうなんだが、心がそれを拒否している。

まあ、いい。ちょっと思い出してみるか。

俺こと沖中宏樹は、久しぶりに取つた有給休暇を利用し、秋葉原に来ていた。

ぶつちやけ、今日から数日間休みをもらつたので、そのとき行かせるゲームを探しに来たのだ。

まだまだ未消化のゲームもあるが、それはそれ。それに、ウォレット残額も少なくなってきたし、買っておこうかと。で、JR改札から出てソフマップに向かおうとして、小さこの女子が道路に飛び出すのを見て。

……そこで記憶が終わっている。

「……あ、そういうことか

俺は、結論にぶち当たつた。

何のJリーカーではない。女の子を助けようとして……自分が身代わりになつた、といつたことだつた。

『そういうことじやよ』

どこからともなく、そんな声が聞こえてきた。

その声はさらに続ける。

『しかも、その少女は元々助かる予定だつたのだがな』

「……え、」

声の主によると、少女は元々奇跡的に助かる「予定」だつたらしい。だが、俺が介入したことにより、「確実」に助かつた。

その代わり、何も被害を受けるはずのなかつた俺が、「死亡」ということになつてしまつたとのこと。

そのため、被害者「〇」のはずの事故が被害者「一」となつてしまつたらしい。

そうなつてしまつたため、原因追求をしたところ、ある記述を発見した。

それは、俺の名前の今日以降の予定がすべて黒く塗りつぶされている書類だつたらしい。

しかも、それをやつたのはこの頃の主の孫だったそうな。

『本当に申し訳ない。なんと言つて詫びればよいか…………』

声の主の声のトーンは少し下がり、色々と言葉を選んで話しているようだつた。

「まあ、いいじゃないですか。あの子は助かつたんでしょう?」

『つむ、まあそれはそななんじやが』

「で、俺は元の世界には生き返れない、と」

『そういうことじや。話が早くて助かる』

「つてことは、転生は可能?」

『ああ、もちろん。つこぐに迷惑を掛けた詫びに、能力の付加もできるが』

転生キタ

（。 。 ）

「で、どんな世界でも可能? アニメも? ゲームも?」

『その辺はまかせる。抜かりはない』

じゃあ、「ほくのかんがえたさいきよつのやうび」でも実行をせてもらいましょうか。

「じゃあ、世界は『超次元ゲームネオテューヌmk2』の世界で」

『ちょっとみて、あのトンデモ世界か?』

「ええ、あのトンチキ（褒め言葉）な世界です」「で、能力は？」

『えとですね、武装神姫の武装が欲しいです。で、…………ってことやりたいんですが、可能ですか？』

『それくらいはお安い御用じゃ』

「じゃ、それに追加で。全能力は女神たちの擬人化状態と同等、かつ……した場合は女神化した時と同じくらいの力量で」「まあ、それもどうにかなるな』

「んじやあとは、今言ったのがレベル1の状態で、レベルがカансストしたら女神より強くなるとかは可能？」

『……もちろん可能じゃが、凶悪じゃな』

「いや、じゃないと面白くありませんからね」「他には何かないか？」

「んじや、原作開始の4年前からスタートで」

『ん、そんなことか？そんなことは簡単だが、どうするんじや？』

「もちろん、4女神と顔見知りになつておく。それだけだよ」「わかった。名前はどうする？』

「今までいいけど……『ケース』で」

『『ケース』じゃな。』

「あ、あと『イストワール』には怪しまれないようにして欲しい」

『それは基本じゃの。おぬしのことは書かれてこないと聞いておこう。あとはないか？』

「女神や、女神候補生と友好な関係を築きたいな」

『あいわかった（魅力MAXな）』

『さて、と。これで設定は終わった。あとはおぬしが世界に行くだけじゃ』

「ありがとな、神様」

『おや、わしは一度も「神」とは言つてないつもりじゃったが』

『いや、こんなことできるのは神様だけだろ？』

『では、おぬしの次の人生に幸のあらん』ことを
「サンキュー、神様」

そう言って、彼の姿が薄くなり始めた。
転生が開始されたのだ。

さて、ここから彼の姿が完全に消えてからが彼の第一の人生の開始となる。
わしは、それをゆっくりと眺めさせてもらひつかの。

プロローグと物語の誕生時能力のお品書き（後書き）

さて、始まつてしまひました。

すでに、自分の中のプロジェクトと違うんですけど……（汗
最低でも週1更新くらいにはしたいと思います。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ということです、主人公の設定です。

オリジナルキャラ設定

キャラクター名

ケイズ

武装

近接攻撃

M4ライトセイバー

近接戦闘時にはこの武装をよく使用する。

いわゆるライトセイバー。

双剣モードでよく使われる。

M8ライトセイバー

M4ライトセイバーの強化版

だが、出力が上がったためかエネルギー切れが早い。
そのため、あまり使われない。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバー2振りを柄の部分で連結した武装。
M4ライトセイバーで攻撃時にこの形にすることが多い。

遠隔武装

アルヴォPDW11

いわゆるオート小銃。

あまり威力は高くないが、命中率が高いため愛用。

LC5レーザーライフル

いわゆるレーザー砲。

エネルギーチャージに時間がかかるため、使用頻度

はない。

が、出力は現段階ではピカイチ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

ということで、オリ主君の武装紹介でした。

まあ、見る人が見れば分かるとおり、あんばるmkuの武装です。
ちょっとまだ隠し玉がありますが、それはまたいずれ。

ということで、次回予告。

超次元ゲームネプテューヌの世界に降り立ったケイス。
さて、彼はどこに降り立つたんでしょうかね。

（指定してなかつたしね）

次回、第1話「やっぱりはじめは紫でしょ」をお楽しみに。
…って、楽しみにしててくれる人がいるんだろうか…

第1話 はじまりはスライムとともに（前書き）

サブタイトルが前回の次回予告と違つ?
仕様です。

さて、ケイスはゼロの大陸に行くことになったのやう。

第1話 はじまりはスライヌとともに

さて、ここはどこだらう。

そういえば、転生先の指定をしてなかつたな。

そう言つて、ケイスは辺りを見渡す。

近くには木々が生い茂り、草の匂いまでする。

(ここは、プラネットユースカリーンボックスか)

俺はそう推理する。

ラステイションであればこのよつな場所はないだらうし、ルウイー
であれば雪に覆われているため、除外。

後もうひとつ、決定付けるものがあればな。

そう思いながら、辺りの草に体を預け寝転がつた。
空は青く広がり、平和そのものだ。

(そういえば、まだ原作の4年前だしな。まだ女神が健在だから平
和なんだろう)

そう思い寝ようとしたが、そつは問屋が卸してくれないようだつた。

「スラー！」

スライヌだった。

まじうことなきスライヌだった。

「なんだ、スライヌかよ。ビツせならダイコンダーとか馬鹿くらい
連れて来いよ」

そう言われ腹が立つたのか、スライヌはケイスに攻撃を開始した。

……まあ、ちくちくアタック程度だったが。

ああ、めんどくせえ。

放つておくか。そのうち飽きてどうか行くだろ。

そう思いながら、もう一度寝ようとしていた。

s.i.d.e ???:?

ああ、もつお姉ちゃんどこに行っちゃったんだろ。

いーすんさんは「別にいいですよ、いつものことですから」「って言つてたけど、やっぱり見つけてお仕事をしてもらわないとね。そつ思い、お姉ちゃんがいつも暇をつぶしている森に来てみた。

「お姉ちゃん、どこにいるのー？」

返事がない。

ここにじやなかつたのかな？

そつ思つたときだった。

「スラッシュ、スラッシュ、スラッシュ」

あれはスライヌの鳴き声。

しかも、何か攻撃しているっぽい！

私は鳴き声のする方へ駆け出した。

そして、そこで見たのは、倒れている人に攻撃しているスライヌだった。

「こひーっ、やめなさい」

そう言って私はスライヌの方に駆け出した。

そんな私に気づいたのか、スライヌは一目散に逃げていった。

s.i.d.e ????.? END

「大丈夫、ですか？」

スライヌのちくちくアタックが止みどこかへ逃げて行つたあと、そんな声が聞こえてきた。

……この「ほつちゃん」ボイスは……ネプギアか。そんなことを考えていると、

「あの、どこか怪我されているんですか？」

そう言つて心配そうに顔を近づけてきた。

近い、近い。

「いや、「じめん」「めん。寝てた」

ズルツと口れる音がする。

「さすがに煩いなあと思つてたんだが、追つ払つてくれたんだ。ありがと」

にこりと笑いながら、そういう風にお礼を述べる。

「い、いえ。でも本当に大丈夫なんですか？」

やつぱり心配そうに聞いてくる。うーん、やつぱり優等生だなあ。

「大丈夫大丈夫。ほら、ね」

そう言つてスライヌが攻撃していた部分を見せる。
ちょっとほつれはしているが影響はない。

「さて」と

そう言つて立ち上がり、ネプギアのほうを見る。

「冒険家、ケイスといいます。今回はありませんでした」

そう言つて、右手を差し出す。

その手を取つて、彼女はこいつ言つた。

「私はネプギアといいます。お力になれて何よりです

“えりあらかりともなく、笑いあつた。

「やつじえぱケイスさん、どうしてあんなど」
「…」

森の中を歩きながらネプギアが聞いてくる。

「いや、お恥ずかしながら路銀が足きてね。何か稼ごうと思つたん
だけど協会もギルドも分からなくて、あそこでフテ寝してた」
大嘘である。

「あ、そりなんですか。ギルドはちよつと分かれさせんやで、協会
になら」
「案内できますよ？」

ちつとも疑おうとしない。ええ娘や。

「ほんと? 助かるよ」

そう言つて、両手を握つて感謝の意を表した。

心なしかネプギアの頬が染まつていたが、気のせいだらう。

「それじゃ、協会に」
「案内します。ついてきていただけます?」

そう言つて、ネプギアは森の出口に向かつて歩き始めた。

俺はその後をついていくことにした。

俺の冒険はここから始まる。
さて、これからどうなるのか……。

…… S A V E

第1話　はじまりはスライヌとともに（後書き）

ネプギアに協会まで連れてきてもらったケイス。
ここで衝撃の事実が…？

次回、「協会にて（仮）」

「スライヌにいじめられてた人を保護してきましたー」「ちょっと待てい」

第2話 協会へGO（前書き）

ネプギアに救われた（？）ケイス。
彼は、仕事を求めて協会に向かっていた。

第2話 協会へGO

s i d e ネプギア

ケイスさん、ちゃんとついてきてるかな？

そう思い、私は後ろを振り向く。

ちょっと離れてはいるけど、ちゃんとついてきてるみたいだ。

でも、何かちょっと寂しい。

私はそこで立ち止まって後ろを振り返り、ケイスさんが追いつくのを待った。

s i d e ネプギア END

ネプギアちゃんが立ち止まって、こっちを見ていた。

どうしたんだろう。

「どうした？ 何か忘れ物でもあった？」

俺はそう問い合わせたが、返ってきたのは思ってもみない言葉だった。

「何か、話しながら行きませんか？」

s i d e ネプギア

あ、唐突過ぎたかな。

何か、ケイスさんが困ってる様に見えた。

ありえない言葉を聞いたかのような顔をしてる。

そんなに変かな、お話をしたいっていうのは。

それとも、私なんかとお話をしたくないってことなのかな……。

s i d e ネプギア END

「うわ。ネプギアちゃんが何か泣きそうになつてゐる（汗）。
さすがに、そんな表情を見せられて「ヤダ」と答えられるほど俺も
鬼じゃない。

「いいよ。どんな話をしようか」

そう答えると、ネプギアの表情がぱあっと笑顔になつた。
うん、やっぱり女の子は笑顔のほうがいいや。

「ケイスさんつて冒険者つて言つてしましましたよね。でも、そんな軽装
で冒険しているんですか？」

ああ、『』もつとも。

武器のひとつも持つてないからな。

「まあ、ね。それに武器とかは、よつと
と言つて、武器を召還するようにイメージする。
すると、両手に質量が発生する。

「『』の通り、いつでも出せるからね」

そう言いながら召還した武器を霧散させる。

そしてネプギアちゃんのほつを見ると、田をキラキラさせていた。

「『』いのです。武器を召還できる人、はじめて会いました」

そのあとも、どうこう風にやつてこのかとか、他にどんな武器があるのかとか、色々と聞かれた。

まあ、悪い気はしないし、知つておいてもらつたほつが動きやすい
つてのもあつたから、全部見せたけどね。今のところ呼べる武装は。

「へえ。畠窓間から呼び出すイメージ、ですか」
難しそうですね、と苦笑いしながら尋ねてくる。

こつちも実際どんな風になつているかわからないから、有耶無耶に
したが。

突っ込まれると回答に困るしな。

そんなこんなで、協会についた。

「へえ、ゲームでは外観は表示されてなかつたけど、こんな感じだつたんだ。」

普通の教会と同じような感じで、違つといふといえれば、十字架がないくらいか。

「いーすんさん、ただいまー」

ネプギアちゃんはそう言いながら入つていつた。

「おいおい、俺に女神候補生つてこと言つてないのにいいのかよ。

「あ、ネプギアさん、お帰りなさい。あら? わかりの方はどう様ですか?」

そう言いながら声の主は俺のほうを見る。

「あ。いーすんさんだ。ちつこいのう。

「えつとね、お姉ちゃんを探してたときに、スライヌにいじめられてたから助けたんですよー」

「いや、ネプギアちゃん。確かに事実かもしれないけど、それはあんまりじや……。」

「プラネテユースの教祖、イストワール様ですね。私は旅の冒険家、ケイスと申します。お見知りおきを」

「一応、はじめだからね。このくらいやつておかないと」

「自己紹介、ありがとうございます。私のことはご存知のようですが、一応。教祖を務めております、イストワールと申します。そして、本日は協会に何の御用でしょうか?」

「いきなり眼光が鋭くなる。まあ、女神候補生にくつついて来る人間なんてそうそういないし、怪しそぎるわな。

「すいません、路銀が足きてしまいなか職があれば、と思いまして。そのときに、そちらのネプギアさんと知り合つたんですよ」

「そう言つと、いーすんさんはネプギアちゃんのほうを向き、事実かを確認していくよつだつた。」

まあ、金がないのは事実だし、何かの討伐とかないかなーとか思つていたし。

「本当に心苦しいのですが、紹介できるのもがないのですよ
ま、そりだらうねえ。

「ギルドを紹介しますが、行つてみますか?」

「おお、それでもいいや。

そう思つていると、ネプギアちゃんがいーすんさんに何か話して
いた。

side ネプギア

「いーすんさん、私も一緒にギルドに行つてみてもいいですか?」
ケイスさんがどんな戦い方をするのかが気になつていた私は、いー
すんさんにそう聞いてみた。

「ダメです。ネプギアさん、貴方は女神候補生なんですよ?何かが
あつてからでは遅いんです」

いーすんさんはそう言つて、了承してくれなかつた。うー、ケチ。
「じゃあ、私が女神候補生だつてことを打ち明けて、そのボディー
ガードとしてついてつもらつて言つのはどうでしよう?」

私もそんなに簡単には退かない。だつて、お姉ちゃんやアイエフさ
ん、コンパさん以外の戦い方つて見たことがないから。

「それじゃ、彼にアイエフさんと模擬戦をやってもらいましょう。
それで、彼が勝てたらその通りにしてもいい、ということにでもし
ましようか」

やたつ。これで、ケイスさんと一緒に行動できる、かも。

side イストワール

ネプギアさんにも困ったものです。

彼女が信じているようですから、いい人なのでしょうが。
それでも、多分アイエフさんには勝てないでしょうから、この案件
は杞憂ですね。

さて、それじゃアイエフさんを呼びましょうか。

side イストワール END

「できれば早くギルドに紹介して欲しいんだけど」「

俺はそうネプギアちゃんといーすんさんに話しかける。

「ちょっとだけ待つてください。ちょっとテストのよつなことをし
てもらおうと思いまして」

そういうて、いーすんさんは連絡を取り始めた。
で、ネプギアちゃんは、と。いうと。

「すいません、ケイスさん。私がケイスさんと一緒にギルドに行っ
てみたい、って言つたらこんなことになっちゃつて」

まあ、そうだろうなあ。原作でもギョウカイ墓場から帰ってきたと
きに初めてギルドに行く、って描写になつてたし。

ん? もしかして、ちょっとした原作ブレイクか? これは。

「で、何でそんなことになつてるの?」

まあ、多分女神候補生だからってことだけなんだらうけど。

「あ、はい。それは、私がプラネテュース(ここ)の女神候補生だ
から、みたいです」

「あー、やっぱり。

「で、ボディーガード的な位置なのね、俺が」「
はいっ」

ふう、まあいつか。

さて、それじゃ対戦相手を待ちましょつかね。

...SAVE

第2話 協会くGO（後書き）

腕試しをすることになったケース。

その相手はアイエフ。

双剣使い同士、どんな戦いになるのやら。

次回、第3話 「原作キャラとの戦い（仮）」

「へえ、結構強そうじゃない」

「お手柔らかにお願いしますね、アイエフさん」

第3話 少女と双剣と新たな力（前書き）

ひょんなことからアイエフと模擬戦を行うことになったケイス。
彼は勝つことができるのか。

第3話 少女と双剣と新たな力

ここは、プラネテューヌの協会の中庭。俺の前には、戦闘準備万端といった感じでアイエフが軽く体を動かしていた。

「どうか実は、別にこの人と戦わなくてもいいんじゃない？」

side アイエフ

なーんだ。

冒険者、って言つてたからもつとゴシイのを想像してたけど、案外ひ弱そうなのね。

これなら、簡単に勝てそうだわ。でも、何でネプギアはこんなのが気になつてるのかしら。

side アイエフ END

「それでは、はじめてください」

「そう、いーすんさんの声が響いた。」

その次の瞬間、アイエフは先手必勝とばかりに突っ込んできた。こつちは、武器も用意してないつてのに。

「銃よ」

「そう言つと、俺の右手にアルヴォ P D W 1-1 が現れる。それをアイエフに向け、トリガーを引く。ドガガガガッ。」

アイエフは咄嗟にその銃撃を横に跳んで避け、そこからまたこちら

に迫る。

「危ないじゃない！」

「速攻で突っ込んできたアイエフ（あなた）に言われたくない」
そう言いつつ、アルヴォ P D W 1-1を右手から消す。
そして、両手にM4ライトセイバーを出す。

コレで迎え撃つ！

s i d e アイエフ

さつき、何ももってなかつたわよね、彼。
で、いきなり銃を乱射するなんて。
どこから出したのよ、なんて思つてたら剣！？
何の手品よ、全く。

s i d e アイエフ END

「面白い手品ね」

「手品かどうか、すぐに分かるさ」

双剣 vs 双剣

その戦いの火蓋は切つて落とされた。

アイエフの右手が上から切りかかる。
ケイスはそれを左手の剣で受ける。

その瞬間、アイエフは左手を横から屈ぐ。

ケイスはそれに反応し、右手の剣で受け流す。

「なかなか、やるじゃない」

「そちらこそ」

その後も何回も剣戟の応酬が続いたが、双方ともに決定打を『えら
れず数分が過ぎた。

そのとき、一人の戦いに動きがあった。

アイエフが、ケイスから少しだけ間を取ったのだ。

「一気に力タをつけたあげる」
アイエフはそう言つと、俺のほうに突っ込んできた。
(うわっ、マズっ)

そう思つうが、体が思つように動いてくれない。

なんとか両腕を前に持つて行き、防御体制を整える。
「フフッ、どこまで耐えられるかしら。『ソウルズコンビネーション』」

縦横無尽に双剣が振られる。かつ、蹴りも同じように放たれる。
キンッ、キンッ、ギヤギヤギヤッ！
数発もらつてしまつたが、どうにか凌いだ。

「ハア、ハアッ」

自然と息も荒くなつてしまつ。

「随分、やるじゃない」

アイエフは不敵な笑顔を浮かべながらそう言つた。
確かに、防げたのはかなり運がよかつたからだ。

「お褒めに預かり、恐悦至極」

そう言いながら、ライトセイバーを構える。

「じゃ、コレで終わりにしてあげる」

そう言って、アイエフが再び突っ込んできた。
マズい。

そつ思つたときだった。

キィイイイン。

そんな音を立てて、辺りの時間が止まつていた。
だが、その中で動く影が2つある。

ひとつはケイス自身。

もうひとつは、奇妙な足音を立てながら、ケイ스のほうへ近づいてきた。

まるで、ロボットが歩いているかのようだ。

『オヌシが、あの神とやらが言っていた少年でゴザルか？』
俺の目の前まで歩いてきた影がそうつぶやく。

なんか、この言葉遣い、聞いたことがあるんだが。

『どうしたのゴザル？さては、拙者がカッコよくて見惚れていた
でゴザルか？』

間違いない。

『いや、なんでもない。爆炎斬鬼丸』

『おお、拙者の名前を知っているとは。拙者も有名になつたでゴザ
ルなあ。』

いやいや、そうじゃないってば。

『で、どういうことなんだ？』

ちょっと（どころではないが）不思議に思つたため、聞いてみた。

『拙者の力、受け取つて欲しいでゴザル』

？？？あ。もしかして。

「神様から、そう頼まれたつてことか？」

『ウム』

「装備とか技とか？」

『ウム』

「でも、俺機械じゃないから使えないかもしねいけど、大丈夫な
のか？」

『そこは、「おやぐわぐ」とやらで大丈夫だと申しておつたでゴザ
ル』

さ、さいですか。

「ちなみに、他の仲間は？」

『全員違う大陸、と言うのでゴザルか？バラバラになつたでゴザル』

つてことは、全部の大陸を廻れば、全員の力が使えるようになるわ

けか。

「よつしゃ、じや、すぐにやつてくれ」

『承知!』

そう言つと、一斬鬼丸（彼）は光となり俺に吸収されていった。その瞬間、彼の持つ装備、技が知識として俺の中に蓄積された。
く斬鬼丸の技術をすべて覚えた♪

『さて、拙者にできるのはここまで』『ザル』
それを最後に、彼の言葉は聞こえなくなつた。

で、元の時間軸に戻つたんだが。

やつぱりアイエフが突つ込んでくる最中で。
さて、どうしようかと考えながら剣を捌いていた。

「な、何で？さつきは手を抜いていたの？」

そう言われ、気付く。

考え方をしながら、剣を捌いていることに。

（技とかだけじゃなく、こういうのも引き継がれるのか）

「手を抜いていたわけじゃなくて、思い出しただけだ。捌き方を」
そう言いながら、少し後ろに下がる。

（そういえば、一回やつてみたかったんだよね）

そう思いながら、双剣のライトセイバーを消す。

そして、一回り大きなM8ライトセイバーを片方だけ召還する。

「さて、ではこちらから行くぞ」

そして、今度は俺の方からアイエフに突つ込んだ。

アイエフに肉薄したときに、技を放つ。

『虚空……雷撃剣』

剣捌きは左から右へ廻ぐだけ。

ただ、剣速が尋常でないほど早い。

すなわち、「雷撃」のように。

アイエフはどうにか反応はできたが、そのまま吹き飛ばされてしま

つた。

そして木に叩きつけられ、氣を失つてしまつたようだ。

... S A V E

第3話 少女と双剣と新たな力（後書き）

アイエフに勝つたケイス。

そこに、ネプテューヌが現れる。

次回、「第4話 プラネテューヌに血の雨は降つたり降らなかつた
り（仮）」

今回登場してもらひた、爆炎斬鬼丸さんですが、

その昔「POP COM」というパソコン雑誌に掲載されていた漫画
のキャラクターです。

本文にもあつたとおり、他の仲間も登場予定です。

彼らのことについては、そのうち説明しようと思っています。

それでは、また次回。

第4話 ギルドでの騒動（前書き）

辛うじてアイエフとの戦闘で勝利したケイス。
彼には無事、仕事が『えられるのだろうか？

第4話 ギルドでの騒動

ふう、どうにか勝ったか。

というか、斬鬼丸の力がなかつたらヤバかつたな。

そう思いながら、木に叩きつけられたアイエフのほうへ向かった。

side アイエフ

イタタタタ。

まったく、よくもやつてくれたじゃない。

それに、途中まで手を抜いて戦われちゃうし。

ま、それについては、様子見と油断させる意図があったのかもしけないけどね。

そのとき、目の前に影が現れた。

さつき私をここまで吹っ飛ばしたアイツだ。

アイツは

「大丈夫か？」

と言いながら手を差し伸べてきた。

癪に障るけど、しょうがない。

私はその手を取って、引き起こしてもらった。

side アイエフ END

「本当に申し訳なかつた。怪我はないか？」

そう言いながら、俺は頭を下げた。

理由はともあれ、下手をすれば大怪我をさせてしまう可能性があつ

たからだ。

けど、アイエフは「大丈夫よ」の一言で片付けてしまった。
やっぱり強いな、彼女は。

「ケイスさん、本当にすいです。アイエフさんに勝つやうなん
て」

「そうですね。彼女はプラネテュースの有効戦力の一人だと言つて
に」

「ネプギアといーすんさんがそのように言つてきた。

「いやいや、運がよかつたんですよ」

俺はそう答えた。

「それでは約束通り、ギルドに案内しましょうか」

「一すんさんは「では、ついて来てください」といつと、ふよふよ
と浮かびながら中庭を出て行つた。

どうやら、ギルドに案内してくれるようだ。

「あ、私も行きます」

そう言って、ネプギアもついてきた。……本当に気満々だった
のね。

一行がギルドにつくと、中で何かもめているようだった。
どうしたんだろうと思い中の人には声を掛けると、

「ネプテューヌ様が、一番高いクラスの討伐依頼を受けようとして
いたため、みんなでとめていたんですよ」
と返ってきた。

side ネプテューヌ

「だから、そんなの大丈夫だって。わたしが強いのみんな知
つてるでしょ？」

「ですから、先ほどから何度も申し上げている通り、何かがあつてからでは遅いのです」

うー、このわからず屋めー。

そんな時、横から割り込みの声が入った。

「だったら、俺が一緒に行こい」

……誰？

side ネプテューヌ END

思わず口を出してしまったが、この空気をどうすればいいんだ。何か、みんな俺のほうを見てヒソヒソやっている。

「失礼ですが、あなたは？」

「あ、すいません。今日プラネットマニアに来たケイスと申します」

俺は正直にそういう。

「そうですか。では、このギルドに来るのは……」

「ええ、はじめてです。ですが、護衛くらいならできると思いますよ？」

そういうと、ざわざわとなり始めた。

ま、無理もないか。女神の護衛が簡単とか言っちゃったし。

「貴方は護衛を何だと……」

ギルドの人があいつとしたとき、いーすんさんが口を挟んだ。

「大丈夫ですよ、ギルドマスター。彼なら信用できます」

え？？？

「先ほど、彼にはネプギアさんの護衛となる試験を受けていただきました。結果は合格でした」

ちょ、おまつ。

「ちなみに、どのような試験だったのですか？」

そこ、いらんことを聞くな。

「アイエフさんとの戦闘。そして、勝利です」

そう言つと、アレだけざわざわしていたギルドの中がピタッと静かになつた。

「やー、わっ ありがとうね。助かったよー」
ネプテューヌは俺のほうに笑顔を向けてくる。

「あ、自己紹介がまだだつたよね。私はネプテューヌだよ。プラネットューヌの女神をやつてるんだー」

「私はケイスと言います。よろしくお願ひします、ネプテューヌ様」「固い、固いよケイスさん。もつとフランクにやつてもいいってかまわないよ?」

「わかつた。こんな感じでいいですか、ネプテューヌ?」「

「OKだよ」

そんなことをやつてこぬつて、わっせアイロフと戦つたときの話になつた。

「そういうえば、アイちゃんに勝つたんだつて? 強いんだー」「いえいえ、ちゅうじ運がよかつただけですよ」「それでもだよ。私だつて結構苦戦するんだから」「そうなんですか。でも、女神化すれば勝てるんでしょう?」「まあねー。つてあれ? 女神化とか話したつけ??」
やべっ、知識のでしゃべつちまつた。
どうじよ。

「いや、あはは。だつて、わっせ女神様つて言つてたじゃないです
か。でも、俺たちの知つてる女神様とネプテューヌさんの姿が違う
から、変身とかするのかな、つて」

脂汗をだらだらと流しながらじどりひどりに答えた。

「すーじー。あたりだよ。」

……通じちやつたよ、オイ。

「わういえば、ギルドで何の依頼を受けたんですか?」

ちょっと興味があり、聞いてみた。

「いやー、山岳地帯に野良ドラゴンが出たって事だったんでそれ
退治を受けたんだよ」

「オイ、マジヤバいって。それは。
俺、もしかしてそこで死ぬんかな。」

side ネプギア

お姉ちゃんにケイスさんを取られちゃった。
私が一緒にクエストを受けるはずだったのに。
でも、次は一緒にクエストを受けられるよね?」

side ネプギア END

..... S A V E

第4話 ギルドでの騒動（後書き）

ネプテューヌと一緒にクエストを受けたケイス。
そこでは、何が待っているのか。

次回、第5話 初めてのクエスト（仮）

クエストがクエストなんで、おそらくネプが変身すると想います。
うまく書けるか不安ですが。
それでは、また次回。

第5話 はじめてのクヒスト、強力な武装（前書き）

成り行きでネプテューヌと野良ドーラゴンの討伐をする」とになったケイス。

果たして、彼に無事明日は来るのか？

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装

「それじゃー、行つてくるねー」

ネプテューヌはみんなにそう声を掛けていた。

対する俺は、

「ああ、なんでこんなことになつてるんだろ」

そうつづぶやきながら、支度をしていた。

「ま、どうにかなるわよ」

アイエフはそう言つたが、なかなか吹つ切れるものでもない。

つて、待てよ。

そつこえぱこのクエストの報酬を聞いてなかつた。

「なあ、ギルドマスターさん。このクエストの報酬つていかほゞ～。
「えーと、ですね。このくらいです」

そう言いながら一枚の紙を出してきた。

何々？ 成功報酬で100万クレジット？

「よし、ネプテューヌ。早く行くぞ」

そう言つて、支度をする手を早めた。

side ネプテューヌ

うわ。現金だなあ、ケイスさんは。
でも、不思議と嫌な感じはしない。
何でだろ？。

そんなことを思つていると、ネブギアが話しかけてきた。

「お姉ちゃん、無理だけはしないでね？」

心配性だなあ、我が妹ながり。

「大丈夫だよ。そんなに危なくないってば。それに…」

「そう言いながら、ケイスさんのほうを向く。

「今日はケイスさんも一緒にだから。だから、あまり無理はしないよ」

「うん、そうだね」

わたしは、どつちかつて言つとケイスさんが無理をしないかどつかつて方が気にかかるるんだけどね。

side ネプテューヌ END

「じゃ、こつてきまーす」

ネプテューヌがそんな元気な声を出した。

街の方からは、「しつかりねー」とか「怪我しちゃ駄目ですよー」とか、そんな声が聞こえてきた。

ちなみに行き先はハネダマウンテン。

ハネダシティから少し離れたところにある山だ。プラネテューヌからだと、歩いて数時間らしい。

「そういうえば、ケイスさんって得物は何を使つてるの?」

ネプテューヌが歩きながらそんな風に聞いてきた。

「アイエフたちから聞いてないか?剣と銃だよ」

「見せて見せて」

ネプテューヌが目をきらきらさせながら言つてきた。

おそらく、『何もない』といふから取り出す』つて言つのを聞いているんだね!」

やっぱり、ネプギアの姉なんだ。よく似てるよ。

そう思いながら、ほいっとM4ライトセイバーを取り出す。

そして、それをネプテューヌに渡してやつた。

「へえ、軽いし扱いやすいね。わたしにぴったりだ」

「…やらんぞ」

ネプテューヌは「けちー」といにながら返してきた。

「あと、銃のほうだが…」

そう言いながらアルヴォPDW1-1を取り出し、すぐに引き金を引く。

ダダダダダッ。

アルヴォPDW1-1の向き先には数匹のスライヌがあり、全弾命中していた。

「へー、すいにね。そんなことができるんだ」

ネプテューヌはぱぱぱちと手を叩きながらその様を見ていた。

「本当はもうひとつあるんだが、それは後で、な

で。

そういっている間に、目的地に到着。

ちなみに、目の前には数匹のドラゴン。

「ああ、これが今回の討伐対象か」

俺がそう言つと、ネプテューヌは首を横に振りながらこう言つた。

「たぶん、このドラゴンは見張りか何かだよ。本命は後で来るよ、多分」

来てほしくないなあ。

と思つてみると、4匹のドラゴンがこちらに切り込んできた。だが、1匹だけ俺たちの来たほうと逆方向に走つていった。

マジで仲間を呼んでくる気か。

だが、そっちを気にしている余裕もなく、切り込んでいたドラゴンの対処に追われる。

俺はすぐにM4ライトセイバーを2振り取り出し、両手に構えた。

「よし、行くぞ」

そう言い、ドラゴンを迎え撃つ。

「つか、めり」

マジで硬かった。ドラゴンメイルとか、硬いわけだよ。

それでも、何回か斬つていふうちに傷を負わせることができ、倒す

「ことができた。

「そつちはどうだ？」

「い」たちも今終わつたトコだよー」「

どつにか凌いだな、と思いながら地面に座り込んだ。が、やつぱりそれだけでは終わらなかつた。

「ケイスさん、新しいのが来たよ、多分2~3匹」

おおおい、勘弁しろよ。

ドラゴンたちは、やつぱりじゅうに突つ込んできた。

だが、先ほどの戦闘後といふこともあり、おれは少し疲れていた。ネプテューヌもそれは変わらないようだつた。

「ネプテューヌ、ここは変身してどうにか時間を稼いでくれ」

俺はそう言つと、M4ライトセイバーをしまい、チャージの体制に入る。

「わたしひとりで？」

「ああ、凌ぐだけでいい。少ししたら、俺のほうで殲滅する」

「わかつたよ！変身！」

そつ言つと、ネプテューヌは女神化した。

side ネプテューヌ

「さあ、どこからでもかかつてらっしゃい」

私はそつ言つと剣を構えた。

それを警戒してか、ドラゴンたちはそこで立ち止まつてしまつた。

そして、ある方向をいつせいに向く。

そう、ケイスがいる方向だつた。

「それだけは、絶対にさせない」

そう言いながら、私はドラゴンたちを必死で止めていた。止めようとしていた。

でも、一人では限界があり、数匹は段々とケイスに近付いて行つてしまつ。

その数匹に対しても剣を振る。

そうすると今度は他の数匹がケイスに近付いてしまう。

結果的に、全部が近付いてしまつことになつてしまつた。

「駄目っ。ごめん、ケイス」

ドラゴンたちはケイスのすぐそこまで近付いてしまつた。

そんな時だつた。

「サンキュー、ネプテューヌ。どうにかなつたぜ」

そんな声が聞こえてきた。

side ネプテューヌ END

「ネプテューヌ、すぐこっちに来い」

そう言って、ネプテューヌの

手を引っ張り、俺の後ろへ移動させる。

「いいモン見せてやるよ」

そう言って、俺は「C5レーザーライフルを呼び出した。
すでに、チャージも完了させてある。

「行くぜ、ファイヤー!!」

そう言ってトリガーを引く。

辺りが閃光に包まれ、俺たちとドラゴンはその閃光に巻き込まれた。
数秒後、そこに残っていたのは俺とネプテューヌだけだつた。

「ねえ、今何したの?」

ネプテューヌはそう聞いてきた。

「今のは、光の力を溜め込んで、それを爆発させたみたいなもんだ
ま、嘘は言つてない。レーザーも光だからな。

「それが奥の手だつたんだ。そんなのが相手じゃ私でも勝てないわ

よ

「いや、コレはさつきみたいに発射するのに時間がかかっちゃうんだ。だから、誰かと協力しないと難しい、ってわけ」
そう言うと、ネプテューヌは妙に納得していた。
「だから、私をスケープゴートにしたのね」
……あ。

……SAVE

第5話 はじめてのクエスト、強力な武装（後書き）

クエストを無事に終わらせて帰ってきたケイス。

そんな彼に待っていたのは……。

次回、第6話 旅立ち（仮）

ちなみに、羽田山って本当にありますよ、ええ。

まあ、ハネダシティの元ネタの場所ではないですが。

それでは、また次回。

第6話 旅立ち（前書き）

すいません、投稿が遅れました。

野良ドラゴンの討伐を終えたケイス。

その帰り道……。

第6話 旅立ち

「そーいえばセー、ケイスー」
とぼとぼとプラネテュースに歩いている最中、ネプテュースが話しかけてきた。

「何?」

「プラネテュースで働いてみる気、ない?」「
「プラネテュースで働いてみる気、ない?」
はい?

「プラネテュースで働いてみる気つて……。」

「それって、仕官のお誘いですか?」

「あー、そんなに堅つ苦しいことじやないんだけど、大体そんな感じー」「

やつぱりそつか。

「とりあえず、辞退をせてもらいますよ」

そう言つうと、ネプテュースは不思議そうな顔をして「何で?」と尋ねてきた。

「端的に言つうと、今の世界を見て廻りたいから、かな」

「プラネテュースで仕官しても、自由に行動できるよ?」

おいおい、そりや自由すぎやしないか?

「ネプテュースはそう思つていても、周りはそつは思わないよ

そんなフリーダムに行動できるのは、君だけだ。

「でも……。ネブギアも気になつてるみたいだし……」

「そりや、氣のせいだ。それか、アイエフを負かした人間として興味があるつて程度じやないか?」
ま、そんなもんどうなあ。

「それにさ、ちょっと嫌な予感もあるんだよね

「嫌な予感?」

「ああ。何か悪いことが起つたそつな、そんな予感」
1年後に起るからな、アレが。

「そんなことないよー？私たち、女神がいねばゼリがなるよ
だといいんだだけね」

「それにね」

「ん？」

「それに、プラネテユースの女神たちに会つたんだ。他の女神にも
会つてみたくなったんだよね」

ネプテューヌは、「そつかー」と言いながら先を歩いていった。
どうやら、諦めてくれ……

「じゃ、他の女神に紹介するから、それだつたらいいよねー」

……なかつたようだ。

「まあ、紹介してくれるってのならなんかではないけど、自分の足で
いろんなところを歩いても見たいし」

「そつか。でも、他のところを廻つて満足したら、プラネテユース
に来てくれる？」

……なんか、食い下がるなあ。

「そのときに、プラネテユースが一番いいと思ついたらね

「うん、約束だよ？」

「ああ」

プラネテユースに段々と近づいてきた頃。

「そういえば、プラネテユースに帰つたらどうあるの？.
ネプテューヌがふいにそう聞いてきた。

「そういえば、ネプギアと一緒にクエストに行くつて約束してたん
だよなあ」

別に嫌なわけではないが、なにやら気が重い。

「何で落ち込んでるの？」

「いや、ネプギアとのクエストどうつかな、つて
そう言いながら、またため息をつく。

「簡単な、スライヌ退治とかでいいんじゃないの？」

「え？」

それは駄目なんじゃね？

「だって、ネプギアは多分ハイキング気分で行くと思つよ。私の妹だし」

いや、自分を基準にしないでくれ。

つて、ちょっと待て。

「つてことは、このクエストはハイキング気分で受けたのか？」

「ギクッ」

まあ、どうにかなったし別にいいよ、今さい。

「別にいいや。でも、本当にスライヌ退治とかで大丈夫なのか？」

「そうだねー。お弁当持つてー、おやつと水筒を持って行くつてのはいいかもねー」

ふむ、それならその手も考えておいで。

そんなこんなで帰つてきました、プラネテュース。

「おかえり、ケイスさん。それに、お姉ちゃんも」

俺たちを迎えてくれたのはネプギアだった。

「うう、ネブギアがケイスさんに取られちやつた気分……」

何を落ち込んでるんだ？ ネプテューヌは。

「それで、どうだつたの？ ドラゴン退治は」

「あつさり終わつちやつたよ。ケイスさんの一撃で」

「へえー、そうだったんだー……つて、ええー？」

おお、ネブギアが驚いとる。

「え。でも。ケイスさんつて剣と銃しか持つてないですよね？」

「それがねー……」

ネプテューヌがこつちを見てウインクする。

出せつて事か。

「よつと。こんなもんがあつたりする」

そう言って、LCS5レーザーライフルを出す。

「聞いてないですよ、そんな武器

「器」

「話してなかつたしな」

「おお、女神様、ご無事でしたか」

ギルドにつくなり、ギルドマスターがそう話しかけてきた。

「うん、大丈夫だったでしょ？ それじゃ、換金換金！」

そう言うと、ギルドマスターは店員に指示して、報酬を持って来させた。

「これが、今回の報酬、100万クレジットだ」

そう言うと、テーブルの上にドカッと置いた。

うん、確かにそのくらいありそうだ。

「で、二人で山分けか？」

「ううん。独り占めで」

ちょ。聞いてないぞ、そりや。

そう思つていると、ネプテューヌはこっちを振り返り、「ううん」と言った。

「ね、ケイスさんの独り占めでいいよね？」

「いや、やっぱり山分けだ」

二人で協力して討伐したんだ。そうしないと、公平じゃない。

「分かつたよ。じゃ、半分は預からせてもらつ（・・・・・・・・）ね？」

ね？」

で、50万クレジットなんて大金持つてゐるわけには行かないんで、手元に少しだけ残して後は全部銀行に預けた。

「さて、ど。あとは、ネプギアとの約束だけか」

そう言つて、ネプギアのほうを見る。

「え？ 私ですか？ あ……」

思い出したようだ。

そのときネプテューヌがちょっと離れたところから声を掛けた。

「ちょっと、ネプギア。こつちにちょっと来てー」

side ネプギア

うー、お姉ちゃん。なんて間の悪い。

これから、ケイスさんとクエストに行けるかもしぬないっていうのに。

「何？お姉ちゃん」

私は極めて不機嫌そうな顔をしながらそう言った。

「えっとねー、ケイスさんとのクエスト、今回は我慢してくれないかな？」

やつぱり。

「何で？わたし、楽しみにしてたんだよ？」

「わかるわかる。だけどね……」

そう言つと、お姉ちゃんは急に声のトーンを変えてこうしゃつってきた。
「多分、今ケイスさんと一緒にクエストに行つたら、迷惑を掛けちゃうかもしれないよ、ネプギア」

「そんなことないよ！」

「ケイスさんは、すごい強いよ。だから、もうと強くなつてから一緒にクエストに行つてもらつたほうがいいと思うな、私は」
でも、クエストって強くなるために受けるんじゃないのかな？
「だから、約束をするんだよ。再会の」

「再会の？」

「うん、そう。そして、一人前になつたネプギアを見てもらつたほうが、ケイスさんは好きになつてくれるんじゃないのかなー」「え、何でお姉ちゃん……。

「『何で分かるの？』って顔してるね。そりや分かるよ、姉妹だもの」

「お姉ちゃんの言う通りかもしれないね」

ありがとー、と言つてわたしはケイスさんのほうへ向かつた。

「どうしたんだ？」

ネプギアがネプテューヌからやつと開放された。

何を話してたんだろうな。

「あ。えーとね、クエストの件だけど……」

「どうした？ 何か要望があるのか？」

「ひとつ、教えてください。ケイスさんはいろんな国に行つてみた
いんですか？」

ネプテューヌに呼ばれてたのはこれが。

「まあ、それに関しては否定はしない

事実だしな。

「だつたら、他の国全部廻つた後に、またプラネットューヌに来てく
れませんか？」

ネプテューヌめ、何か言つたのか？

「わたしは、今はまだすごい弱いです。それこそ、ケイスさんと一緒に
一緒にクエストに行つたら迷惑を掛けちゃうかもしねない」

「いや、そんなことは……」

「だから、時間をください。ケイスさんに迷惑を掛けないくらいま
で強くなつておきますから」

ネブギアの顔は、真剣そのものだつた。

「わかつた。だつたらさ、俺もその約束を忘れないよつて」

そう言って、俺は一振りの剣を戻した。
うまくいつてくれよ。

「出でよ、『バルムンク』」

一振りの剣が出てきた。そして、術式固定。

「これを、預かっておいてくれ

「これを、わたしに？」

「うん、持つておいて欲しい。そして、それで戦えるようになつて
いてくれるとうれしいな」

「は……はいっ！」

ネプギアは、うれしそうにその剣を両手に抱えていた。

そして時間は2日ほど過ぎたある日。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

おれは2日ほどかけて旅支度をしていた。

何しろ、地図も良く分からないので色々と頭に入れることが多すぎ

るからだ。

「うん。 それじゃ、元気でねー？」

ネプテューヌは、元気に見送ってくれている。

それに、彼女には一つ頼みごとをしておいた。

他の国の女神に、俺が会いに行くといふことを伝えてもらひたいこと

ことだ。

「ネプテューヌ、アレのこと頼んだよ？」

「分かってるよ。みんなに連絡しておくから、安心しておいで」

それが一番心配なんだよ。

「ケイスさん、気をつけてくださいね」

ネプギアは、いつも通りに話しかけてくれた。

「ああ、ありがとう、ネプギア。そっちこそ気をつけろよ？」

「もちろんです。ケイスさんと約束しましたから。強くなるって

そう言いながら、ニコシと笑ってくれた。

「そうだね。それじゃ、剣の手入れも忘れずにね」

「はい、大事に預からせてもらいます！」

そう言いながら、腰に下げている件に目を向ける。

先日預けた『バルムンク』だ。

「それじゃ一人とも、元気でなー！」

そう言って、2人の女神と別れた。

さて、と。どこに行こうか。

やつぱり順番的にはルヴィーかなあ。

新たな国を目指し、俺は歩き始めた

... S A V E

第6話 旅立ち（後書き）

ルウイーを目指して旅をするケイス。そこで、新しい出会いが待っていた。

次回、第7話 新たな出会い（仮）

次回は、講じ出金うんだるうねえ。

まあ、頃当に行かば、

ケース「他にあんのか?」

そりや、ブランドってこともあるかもしねないし、道に迷

トライマ「うー、幾箇せんかねー、ダ

ケイス「そりゃあ、ネプギアに渡した

アレって、出せたのか?」

ライドセイバーの電源が切れたに出す予定だったけど、初めの二セ

それから、元々は渡す予定になかったのだがよ。

ケイス「だったら、どして」

しゃあ、後々の「」とを覚えて、

それでは、また次回。

祝！初感想を頂戴しましたー。

励みになります。ありがとうございます。

と書いた上で。

プラネットコース編が終わったので、

取得した武器や設定をまとめておきます。

【取得した設定】

爆炎斬鬼丸の技、能力、装備。

【装備】

転移の数珠、およびそこにしまわれていた武装の数々

転移の数珠・別次元から武装などを呼び出すためのアイテム。
似たものに、四次元ポケットや王の財宝ゲート・オブ・パレロがある。

転移の数珠での保管場所に、ケイスの武器も存在している。
転移の数珠は、ケイスの首にネックレスとして装備されている。

【技】

虚空雷撃剣

剣をすばやく横に薙ぎ、敵を切り捨てる技。

剣速が速いため、熟練の剣士でも反応ができないことがある。

【能力】

超高速並列思考

簡単に言ってしまえば、やるいと思えば右手と左手で別の相手と同時に戦える程度の能力。

そのため、きちんと「見ていれば」どにどのような攻撃が来るかがすぐに分かる。

3話では、それおかげでアイエフの攻撃を凌いでいた。

敵の察知

ただし、機械系のモンスターに限る

斬鬼丸自身が機械の塊なので、そのセンサー類で検知している。

「ケイス」「で、結局『斬鬼丸』って何者なんだ？」

「えと、前にも書いたと思うけど、ポップコムって雑誌に載つてた『リバーサー』って漫画に出てくる、機械剣士」

「ケイス」「で、何でそれをこの小説に入れようと思つたんだ？」

「カツコイイから。以上」

「ケイス」「おいおい」

「まあ、3割くらい冗談。本当は、1回このネタで書いてみたかっただけ」

「ケイス」「ちょい待て。7割くらい真実じゃねーか」

「まあね。それより、本当はその漫画に出てくるセンカってのとシンコンつてキャラの力を使いたいってのが本当のところ」

「ケイス」「で、出でくるのか？その2人は」

「もちろん。だって、3話で出したでしょ？それぞれの大陸に1人ずつ仲間がいるって」

ケイス「セーにつながるのか。…あれ? そういえばもう一人の仲間つてのは?」

「ああ、ダイクってこう見えないおっさん

ケイス「えー」

「…の姿をした世界最高の魔導師

ケイス「セーの『えー』を返せ」

「ロイツは「ロイツです」とんだよ。魔法に強けりや機械にも強い。んでもって、ある装備品のおかげで魔力の消費がほとんどナシ」
ケイス「ちゅ、おまつ。魔法戦に関しては最強キャラになるじゃねーか」

「そだね。けど、ロイツには弱点があつてな」

ケイス「ほつほつ。で、その弱点とは?」

「女に弱い」

ケイス「……弱点ってこうのか? それ

ケイス「せういえば、前回(6話)の最後に俺、バルムンク出しで、ネプギアにあげただけじ?」

「ほこほこ」

ケイス「こつ出したよくなつたんだ？」

「野良ゾリコン倒した後、レベルが上がつて」

ケイス「え？」

「ちなみに現在、数値の上ではレベル30くらいだから」

ケイス「他には、何が出せるんだ？」

「とりあえず、何でも。使つた回のあとがきにでも説明を書くやー」

ケイス「適当だなあ」

「やういえば、書くのを忘れてた」

ケイス「何を」

「この世界の設定」

ケイス「いやいや、設定はあるだろ？原作があるんだし」

「いやいや。」、「原作の4年前。女神たちがマジンコンヌ退治に出かける1年前の話だから」

ケイス「まあ、そりゃそつだけど

「ちなみに、1～6話で何か不思議に思わなかつた?」

ケイス「何を

「ん。ネプギアが女神化しないこと

ケイス「あ、そういうば

「ということじで。現時点では、女神候補生は女神化できませんって」と

ケイス「何で?」

「いやね、不思議に思つてたんだよ。何でネプギアだけマジHコン
ヌ退治に連れて行つてもらえたのか。俺の中の答えでは、原作の3
年前では女神候補生のうち女神化できるのはネプギアだけだつたん
じやなかろうかと」

「ルウイーの2人についてはミナが止めていたつて可能性もありえ
るけどな」

ケイス「まあ、あり得るなあ

「といふことで、そんな設定で行きます

幕間 設定のまとめ～プラネットコース編～ + 駄話（後書き）

設定を書き忘れていたので、急遽こんな形で出しました。

今後は、何か新しい要素が出たら、あとがきに書くようにしないで
は。

第7話 新たなる出会い（前書き）

プラネットユースでの事を終えて、ルウェイーに向かっているケース。 ところでは、どのような出会いが待っているのか

第7話 新たなる出会い

「ああ、ルウェイーはまだかー」

俺はそう言いながらプラネットユースとルウェイーを結ぶ街道を歩いていた。

気候的には、どちらかと言えば寒いに属するだろ？

雪が降っているため、寒いのは当たり前なわけだが。

そのため、先ほど立ち寄った街でコートを買い、それを羽織つている。

「マスター、無理をせず車で行つたほうがよかつたのでは？」

そう言って、胸ポケットから顔を出すアーンヴァル。

え？ ロイツがどこから来たかって？

ロイツは、斬鬼丸の装備の一部を使って組み上げた、俺オリジナルの兵装。

姿形、声まで武装神姫のアーンヴァルと一緒にだ。

しかも、大きさも15cmくらいときていて。

ただ、彼女が装備できる兵装が全くないため、素体状態のままだ。

「いやいや、歩いていつたほうが、生の情報を集めやすいだろ？」

それに、原作の誰かに会えて不思議じやないしな。

side ???

ちょっと街から離れたところまで来ちゃったなあ。

それに、目的のキノコもたくさん取れだし。

「そろそろ、教会にかえるつか。ミナちゃんも心配してるだろ？」

「……うん」（「ククク）

ミナちゃんには、キノコを探つてくるとしか言つてないから、早く帰らないと。

じゃないと、また『そうさくたい』を組織してわたしたちを探しに

行きかねない。

そう思つた時だった。

ちょっと離れたところから、

『ギュイーン、ガシヨン、ガシヨン』

と機械の動く音が聞こえた。

わたしたちは、咄嗟に岩陰に隠れてその音の主を探した。

前に、お姉ちゃんに教えてもらつた、怖いモンスターの一体。たしか、D S T Tって名前だつたと思う。

だけど、あのタイプのモンスターは、国際展示場の方にしかいないつて聞いてたのに。

「どうしよう、ロムちゃん」

「……こわい」（びくびく）

ほんとに、どうしよう。

教会に帰るために今は隠れてるといふから出なへやいけないし、出たらあのモンスターに見つかっちゃう。

そんな時。

「くちゅん」

ロムちゃんがかわいいくしゃみをした。

『ルルルルルルル、ギュイーン、ギュイーン』

間違いなく、見つかっちゃつたみたい。

D S T Tは、確実にわたしたちのいるといふ方向かっただようだつた。

何か、ひつかかる。

「どうしたんです？ マスター。変な顔をして」
これは、突つ込まないといけないんだろうか。いやいや、何かそもそも言つていられない状態のような気が。

s i d e ? ? ? E N D

「いや、機械の探知に何かが引っかかったみたいなんだ。アーンヴァル、お前の方の探知に何か引っかかるないか？」

「えっとですね、……あ。人が一人近くにいるようです。大きさから言って子供のようですね」

「方角と距離は？」

「東に500メートルと言つていろでどうか」

うん、大体あつてる。

ん？ 何か、移動速度が速くなつたな。移動方向は南といつところか。

「あ、マスター。先ほどの反応ですが、片方だけが動き出しました。

東方向へ」

「もう片方は？」

「そのままどどまつています」

あ、こっちの反応も、南東へ方向を変更した。

と言つことは、この一人が危ない！

俺はそこから東の方角へ駆け出した。

s i d e ? ? ?

どうにかして、ロムちゃんから引き離さないと。

そう思つて、わたしは隠れていた岩陰から飛び出した。

「モンスター、わたしはここよー、追いつけるもんなら追いついてみなさい！」

わたしはそう言つと、一目散に走り出した。

そんなに移動速度の速そうなモンスターじゃないし、楽勝よね。

でも、わたしの予想は悪いほうに裏切られた。

モンスターは飛行形態になつてわたしのほうに迫ってきた。

そして、田の前にモンスターが来てしまつた。

もうだめつ。

わたしはそこで田を閉じた。

s i d e ? ? ? E N D

やべえ。

田の前では女の子が走っていて、それにロボットが飛行形態で近づいていた。

こうなつたら、じつに注意を引き付けるか。

そう思い、アルヴォ P D W 1-1を呼び出す。

そして、女の子に当たらぬように、しかも近づきながらトリガーを引く。

キンキンキンッと弾かれてしまつたが、注意を引き付けることはできたようだ。

s i d e ? ? ?

田を閉じて衝撃に備えていたんだけど、何も来る気配がない。

さつき、なにか金属音が鳴つたみたいだけど、ビックしたんだひつ。わたしはおそるおそる田を開けてみた。

そこでは、さつきのモンスターと見たことのない男の人人が銃で応戦していた。

「やっぱ、銃じゃ駄目か」

そう言つて手に持つた銃が消え、代わりに剣が姿を現す。

「とりあえず、これでどうだっ！」

そう言つてロボットに一撃を加え、後退させた。

s i d e ? ? ? E N D

お。田を開いたな。

「よお、無事か？」

「うん、どうにか無事だけど。アンタ誰？」

「お、ついでにキツイお言葉。

「俺はケイスつてんだ。よろしくな」

「わたしは……つて。アイツが何か撃つてきそうよ?」

そう言われてロボットのほうを見ると、何かチャージをしていた。

「アーンヴァル、電磁フィールド展開だ」

「イエス、マスター」

アーンヴァルはそう言ひと俺たちの前にフィールドを張った。
ロボットは、何かビーム方のようなものを撃つてきたが、電磁フィ
ールドに阻まれ、俺たちに命中することはなかつた。
もちろんその後、剣のみで倒してやりましたよ、ええ。

さて、と。

「そういえば、誰かもう一人いたんじゃないのか?」

そんなことを言つていると、こちらに誰かが走つてくる足音がした。
足音がするほうを見てみると、ロムが走つてきていた。
そして、ラムに抱きついていた。

「……ラムちゃん、大丈夫?」

「うん、この人がアイツをやつつけてくれたから

「……ら

「ら?」

「ラムちゃんを……まもつてくれて……ありがとうございました」

そう言つて、ロムは深く頭を下げた。

顔を上げたとき、顔が真つ赤だったが、囁んだのが恥ずかしかつた
んだろうか。

こうして、俺はルウェイーの女神候補生と出会つた。

まあ、本人たちはまだ明かしていないが。

..... S A V E

第7話 新たなる出会い（後書き）

「はい、というわけでルウェイーの双子女神候補との出会いの話でした」

ケイス「そういえば、何でアーンヴァルが出て来るんだよ」「ということで、アーンヴァルの説明を下に」

アーンヴァル

リバーサ
原作では、バトルユニットといつ名称で出てきています。姿は、ダースベーダーのヘルメットのみ見たいな感じ。型番はど忘れしましたが、愛称は『ちぢこ丸』『かしこ丸』だった記憶が。

本当は原作のままの姿で出す予定だったのですが、諸般の事情で武装神姫のアーンヴァルの姿となりました。

能力としては、索敵能力および電磁フィールド（いわゆるバリアつすね）を張ることができる。

人語を理解し使用することができるため、ロボユニケーションをとることができる。

「まあ、今のところは物理攻撃用のバリアを張る係って感じかな」

ケイス「かわいそうに。それだけのために……」

「物語が進むと、実はちょっとしたキーパーソンになる」

ケイス「おお」

「……といいなあ」

ケイス「おい…」

それでは、

次回、第8話 そしてルウェイーへ（仮）
でまたお会いしましょう。

第8話 そしてルウェイへ（前書き）

成り行きでロムとラムを助けたケイス。
さて、この後彼はどんな行動を取るのだろうか。

第8話 そしてルウェイーへ

「へえ、ロムちゃん」とラムちゃんって言つんだ」「俺は今、ロムちゃんとラムちゃんと一緒に歩いている。

彼女たちがルウェイーへ帰る、というので護衛を買って出た次第だ。

「うん、わたしがラムよ。よろしくね」

「…………わたしが…………ロム…………よろしく（ボソボソ）」

「俺は、ケイスって言つんだ。よろしくな」

「うん。よろしくそれであげる」

「…………うん」

あー、原作通りにラムちゃんはお転婆、ロムちゃんは無口って言つ
か恥ずかしがり屋か。

「そりいえば、ケイスはルウェイーに何をしに来たの？」

「何をしに、とこうか。ちょっとルウェイーに行つてみようと思つて
な」

まあ、本当は力を手に入れるためだが、表向きはこんなもんだろ。

「それに、ルウェイーの女神様にも会つてみたかったしな」

そう言つと、ロムとラムは顔を見合わせて二コ二コ笑つた。

「ケイス、アンタ運がいいわよ。わたしたちが、このルウェイーの女
神なんだから」

「…………正確には、女神候補生」

うん、知つてる。

「へえ。つてことは、今の女神様の妹なのか。ロムちゃんとラムち
ゃんは」

そう言つと、一人そろつて「うん！」と答えてくれた。
元氣のあることば、良いことだ。

「でもね、おねーちゃんは重い病気にかかつてゐて、ミナちゃん

が言つてた

いやいや、それは初耳だぞ。

「……うん、なおりづらい病氣だつて、言つてた」

「もしかして、今もベッドで横になつてるのか?」

「ううん。ふだんは大丈夫なの。でも、たまに『ほつせ』が起つて

つて言つてた

「……そのときには、近づこちやいけないって、ミナちゃんに言わ
れた」

あ。もしかして……。

「ちなみに、なんて病氣つて言つてた?」

「「ちゅーべびょう」「

やつぱりか。（笑）

「うん、それは発作が起つてゐるときには近づかないほうがいいな
主に精神的な意味で。」

「そういえば、さつと出でたミナちゃんつて誰?」

「ミナちゃんは、ルウェイーの教祖なの」

「教祖なの」

「でも、怒るとさつといついく怖いの」

「……こわいの（びくびく）」

「でも、すごい優しいの」

「……うん、やさしいの」

ああ、確かに怖いだろうなあ。あんな黒いオーラまで出るような怒
り方は。

side //ナ

ロムちゃん、ラムちゃんがなかなか帰つてこない。

『きのこをとりにいってくるねー』

と言つて出かけてからすでに数時間。

すでに帰つてきてもおかしくない時間なのに、なかなか帰つてこな

い。

「ブラン様、あの二人遅くないですか？」

私は、本を読んでいるブラン様にそう問いかける。

「……大丈夫、多分寄り道をしているだけ」

ブラン様はそう答えるけど、私は気が気じゃない。

「やっぱり、遅いです。もうそろそろ口も暮れるといつのに、一向に帰つてこないじゃですか」

なんと言われようと、心配なものは心配なのだ。

「……だから、大丈夫。そのうち、元気に帰つてくるわ」

「ブラン様は心配じやないんですか！？」

私がそう激昂すると、ブラン様は読んでいた本を閉じていつ言った。
「……心配に決まつてゐる。でも、あの子達のこと、少しあは信用してあげて」

ブラン様がそつと直後。

「ただいまー」

と元気な声が教会の中に響いた。

「ほら、ね」

side //ナ END

ラムちゃんが元気よく「ただいまー」と言つて教会の扉を開けて入つて行つた後を、小ちく「……ただいま」とピクピクしながらロムちゃんが入つていく。

怒られちゃうのかな、二人とも。

その後に続いて、俺が「失礼します」と言つて教会の扉をくぐつた。入つていつたら、すでにミナによるお小言が始まっていた。
もっと早く帰つてきなさい、とかあまり遠くに行かないように、とか言われているようだつた。

そして、ひとしきり怒つたミナが顔を上げたとき、俺と田が合つてしまつた。

「あ、もしかして見られていました？お見苦しいことを見せして申し訳ありません」

そう言って、俺に頭を下げてきた。

「この教会の教祖、西沢ミナと申します。失礼ですが、何の御用でしょりか」

「申し遅れました。私はケイスと申します。冒険者をやつております」

そりゃうと、ミナさんは何か思案し始め、「あ」と声を上げる。

「もしかして、プラネテュースから来た方ですか？」

「え、ああ、はい。まあ、一応」

「そうでしたか。プラネテュースでのじ」活躍、聞き及んでおります」

活躍って何だよ。

「活躍って言うと、わたしたちも助けてもらつたんだよ、ミナちゃん」

「……うん、かつこよかつた」

「助けてもらつた！？」

「そうよ。モンスターに襲われてこるとじぶんを助けてもらつたの」

「……助けてもらつた」

おい、ロムちゃんにラムちゃんよ。

何か、あつさりしそぎじやね？

「えええつと。本当に、本当にありがとうございました」
ミナさんはワタワタしながら俺に向回も頭を下げてくれる。
うわあ、この人本当に真面目なんだなあ。

「ロム、ラム、二人はちゃんとお礼した？」

そんな声がしたほうを向くと、プランがロムちゃんとラムちゃんの頭を撫でながら、話をしていた。

「うん、もちろん！」

「……お礼、言った」

「……そう

」 そう言つたあと、ブランは俺のほうを向いてこうとついた。

「私からもお礼を言わせてもらひ。妹たちを助けてくれて本当にありがとうございます」と

りがとう

そう言つて、柔らかな表情で微笑んだ。

「私はルヴィーの女神。普段はブランと名乗つてゐる。よろしく

そう言つて、右手を差し出してきた。

「冒険者のケイスとります。お会いできて光榮です」「

俺もそう言いながら右手を差し出し、握手をした。

……SAVE

第8話 そしてルウイーへ（後書き）

お前、礼儀正しいのな。

ケイス「いや、そりゃこの世界で生きていかないといけないんだから、当然っしょ」

まあ、そつかもな。

そういえば、今回アーンヴァルが全然出てこなかつたな。

ケイス「アンタが前回あれだけ脅かすから、出て来れなかつたんじゃないのか？」

あー、そんなこともあつたねえ。

アーンヴァル「『そんなこと』もあつたねえ』じゃないですかー。(ドゴッ)

ケイス「おー、あんばる。適度にしつけよ?」

止めひよ。

あんばる「つて、何で私の名前が『あんばる』に?」

いいじやん。いい、本編じやないんだし。

あんばる「よくねーです」

それじゃ、次回予告こくよー。

あんばる「また今回も無視つすか」

「プラン」「次回、『ああっ、女神さまっ』」

すまん、プラン。マジでやれはやめさせてくれ。

「プラン」「えー」

えーじゃなー。

次回、「女神と明るい食卓と大事件（仮）」でまたお会いしまじゅう

ケース「やつこえーば、なんでいつも（仮）がついているんだ？」

ん？気分によつて変わるかもしれないから。

ケース「んな」とで変えるなー

第9話 女神と明るい食卓？（前書き）

ロムとラムを連れてルウェイーの教会へ来たケイス。ロムとラムの怒られイベントが終わつた後……。

第9話 女神と明るい食卓？

「あの、よければ今日はもう遅いので、教会で寝泊りされませんか」

教祖ミナさんがそう持ちかけてきた。

今は夕刻だから、そこまで遅い時間ではない。
けど、さすがに今から街で宿を取るには遅すぎる時間だつた。
それに、プラネテユースを発つてからずっと野宿だつたため、あり
がたい申し出だつた。

「お言葉に甘えさせていただきます」

俺はそういつとミナさんに頭を下げた。

「それに、この一人を助けていただいたんですから。教祖として、
人として当然のことをしているだけです」

彼女はそういつて、祭壇の手前の扉から出て行つた。

「腕によりをかけて夕食を作りますので、楽しみにしていてくださいね」

と言い残して。

ロムとラムは、ミナを追いかけるようになり、同じ扉から出て行つた。
夕食の準備を手伝つのか。

感心感心。

そんなこんなで気がつけば、教会の中には俺とプランが残されてい
た。

プランはあまり饒舌な方ではない——(とこりより、どちらかと言つ
と無口だらう)ため、物静かな空気が漂つていた。

「……座つたら?ここには、椅子がたくさんあるから
先に声を発したのは、プランだった。

「あ、はい。失礼します」

そう言いながら、俺は椅子に腰を下ろすのだった。

俺がそんなことをしているときも、ブランはずっと本を読んでいた。
どんな本を読んでいるのか、非常に興味がある。

「あの……。先ほどから、熱心に何の本を読まれているんですか？」

俺がそう言つと、ブランは本から目を離しきりを見てきた。

そして、本を持ち上げ俺のほうへ見せた。

「これ」

本の表紙にはこう書かれていた。

『家族との団欒。夕食時の会話100選』と。

苦労してゐるんだなあ、ブランも。

俺は、ブランから少し離れた場所に座ることにした。

……邪魔しちゃ悪いからな。

そして、胸ポケットからアーンヴァルを出してやる。

「アーンヴァル、すまん。もう少し早く出してやればよかつたな」

「酷いです、マスター。5日間くらい外に出ていなかつたような気がします」

気のせいだ、アーンヴァル。

「それで、どうしたんですか？ マスター」

「いや、今の武装を確認しておこうと思つてな。お前は、転移の数

珠の向こう側が分かるだろ？」

「はい、それはもちろん。そういう設定になつていますから「設定言つたな。

「で、俺の戦い方に合つ武器を見繕つて欲しくてな」

いつまでも、M4ライタセイバーとアルヴォP.D.W.1-1だけでは心許ない。

そこで、アーンヴァルに選んでおりぬつと書つ寸法だ。

「やうですねえ」

そう言つて、アーンヴァルは押し黙つた。

おそれく現在武装の検索をしていくのだね。」

「剣に関しては、ギュリーノスカレーヴァティン、銃に関してはさほど変わりませんが、手数と言つ意味ではアルファピストルなどが良いかと。または、今のアルヴォ P D W 1-1を光学武装に改造するか、でしょうか」

へえ、結構いいのが出てきたじゃないか。

「あれ？ この武装は何でしょうか。私の中のDBに入っていないものがあります」

「お前が把握していない武装？ そんなことがあり得るのか？」

「いえ、通常ありません。それにしても、何でしょうか。この、

『種別・魔法の杖』といつものは」

「魔法の杖？」

「はい、武装の情報を調べたらその単語が出てきました

一体なんだろ？

そのうち、呼び出してみよう。

「おねーちゃん、ケイスちゃん、じはんできたつてー」

ラムちゃんが教会の中に入つてくると、大きな声でそう言った。

「ラム、そんな大きな声で言わなくとも聞こえる

「そりがなー。だつて、この間聞こえてなかつたみたいだつたしまあ、本を読んでいると聞こえなことがありますからな。

「……ケイスさん、じはん、たべよ？」

俺の近くには、ロムちゃんが来ていた。

「そうだね、それじゃいこつか

そう言つて立ち上がり、ロムちゃんの頭を撫でてから扉へ向かおつとした。

そういえば、どこでどう行けばいいんだろ？

そう思つていると、ロムちゃんは俺の手を握つて、「ひつか」と言って引っ張つていった。

side ラム

あ、ロムちゃんが頭を撫でられて笑顔になつて。あんな笑顔、私にもあまり見せてくれないのに！

あのケイスつて人、どこに行けばいいのか分からぬみたい。しうがない、案内してあげようか。つて、ロムちゃんが手を握つて連れて行つた！？あんなに積極的なロムちゃん、見たことないよ！？うう、なにがあつたんだろ……。

「おねーちゃん、私たちも早く行」
「ラム、分かつたからそんなにせかさないで」
おねーちゃん、早く！
早くしないと、ロムちゃんが取られちゃう……。

side ラム END

そんなこんなで食堂にて夕食の時間。

今日はロムちゃんとラムちゃんが取つてきたきのこを使つたきのこの鍋だつた。

俺の横にはロムちゃんが座つていて、小さな体を一生懸命使つて鍋の具を取つてくれている。

「んしょ。これ……と、これ。あと……これ、も、色々と取つてくれているのはうれしいんだけど……。ラムちゃんからの視線が痛い。

視線で人が殺せるなら即死つて感じで。

「……はい、ケイスちゃん。どうだ？」

そつさいながら色々と盛り込まれた器を渡された。
うん、鍋のお代わりはしなくて済みそうだな。

みんなに鍋が行き渡り、よつやへ夕食開始。

「いただきます」

そう言つて、みんなでじょんを食べ始めた。

「うん、おこしいです」

「そうですか。今日はロムちゃんとラムちゃん一人とも手伝つてくれましたからね」

「そうよ。私たちが手伝つたんだから、おこしここ決まつてんじゃ
ない」

「こつしょうけんめい、お手伝い、した

「せうか、そりゃおいしこはずだよね」

……おかしい。

「」している中で一人だけ会話に参加してこない。

もちろん、プランさんだ。

さつき、読んでたあの本の知識を生かすのは今ですよ。
そう思ふ、プランさんのまづを見てみた。

……一心不乱に食べていた。

ダメじゃん。

夕食を食べ終えた後、プランさんが話しかけてきた。

「ケイス。明日、ヒマ?」

「まあ、暇つちゃ暇ですが

「ちょっと、付き合つて欲しい

「分かりました」

会話が終わると、プランさんは立ち上がり、「自室にいるから。用

があつたら来て」と言つて食堂から出て行つた。

..... S A V E

第9話 女神と明るい食卓？（後書き）

ケイス「タイトルに偽りがあるが」

いや、しようとしないだろ。こうなつちやつたもんは。

ケイス「やりようはあつたんじやないのか？」

まあね。

本当は、プランが嬉々として話をしているつて話にしようとしたら
だが……。

ケイス「したんだが？」

俺の中のプランはそう一筋縄じゃいかなかつた。

ケイス「それに、前回の予告にあつた「大事件」も削除されてるし」
さすがに自分の中では、いつもの2倍くらいになつそつだつたんで分
けた。

ケイス「そういうえば、今回新しい武装が出てきたな、言葉だけだが
うむ」と言つことで、説明行きます。

ギュリーノス

種別：大剣

特徴：基本は金属の剣だが、刃の部分がライトセイバーのよつこ
エネルギーでコーティングされている。

レー・ヴァ・テイン

種別：小剣

特徴：炎の剣。ライトセイバーが斬る剣なら、これは溶かして断つ剣。

アルファピストル

種別：ハンドガン

特徴：装填数が多いが威力がアルヴォ P D W 11には劣る。が、耐久力が高いため別用途で使用することを検討中。

アルヴォ P D W 11（エネルギー弾モード）

種別：ハンドガン

特徴：威力はアップするが、エネルギーの消費量がぐっと増える。コレを使うのであれば、ライフル銃のほうがはるかに効率的かも知れない。

こんなところか。

ケイス「で、今回出てきた「魔法の杖」って、次回はちゃんと出てくるのか？」

うん、その予定。

ケイス「つてことは俺のパワーアップか

パワーがアップするか分からぬけどね。

ケイス「え、」

それでは次回、「大事件発生（仮）」でまたお会いしましょう

ケース「また（仮）つてつくのな」

第10話 大事件発生（前書き）

ケイスはルウェイーの教会で夕食を『馳走になつて』いた。
そして、その日の宿も提供してもらつていた。
そんな夜のこと。

第10話 大事件発生

s.i.d.e ????

ええと、どうだったかしら

私はそう思ひながらあるダンジョンの中を歩いていた。

たしか、ここに迷ひだと思つたのに。

「どなたか、いらっしゃいますか？」

私は誰かに向かつてその声をかけた。

だが、通常は誰も答えるはずがない。

先ほどまで存在していたこのモンスターもすべて倒してしまった
し。

ま、私がここから出れば復活するんでしようけど。

「誰じや？」「そんな時間に」

ふと、そんな声がした。

……探し物、ゲット。

「いえ、道に迷ってしまったんですよ、『ゲームキャラ』さん

「まう、こんな時間に辛かるわ。わしが案内してやりたいのは山々
じゃが、如何してもこの地を離れるわけに行かなくてのう」

「いえいえ、良いんですよ。貴方はそこにいれば。

むしろ、そこから動かないから助かります。

「大丈夫ですよ、もうわかりましたから。だ・か・ら」

そう言って私は得物を振り上げる。

「そこで粉々にしてあげますッ」

そして、振り下ろす。

バキンッ、と音を立ててゲイムキャラは割れた。

「……お主、……何者、じゃ？」

「ああ、まだ生きてるみたい。しぶといですね。

「……まあ、いいでしょう。私は、『マジックンヌ』に『』するもの、
とだけ言つておきます」

言い終わった後、私はゲイムキャラだったものを粉碎した。

「さて、これでのキラーマシンの封印を解きました。どう出ます
か、ルゥイーの女神」

s i d e ? ? ? E N D

次の日の朝。

まあ、昨日は旅の疲れもあったのか、夕食の後に部屋に案内されそのまま寝てしまっていた。

何回か部屋をノックされたような気がしたが、疲れには勝てず…。

そして、教会のまつに行つたのだが、ミナさんが何やら慌しく動いていた。

「おせよひ、じやこます、じうしたんですか？」

「ケイスさん、ちゅうじこといひ」

そつぱつと、ミナさんが駆け寄ってきた。

「実は、『世界中の迷宮』と言つところで、大きなモンスターの発生が確認されて」

「世界中の迷宮?」

「あ、そうでしたね。世界中の迷宮と言つのは、これから北西に向つたところにあるダンジョンです」

「そこでモンスターが発生した、と」

「ええ。すでにブラン様にもお伝えして貰つてもうらつていますが、念のためケイスさんにも行つていただけたら、と思いまして」

まあ、モンスターを倒せるのは頼りがあるからなあ。

「俺でよければ、いくらでも協力をせらります」

別に断る理由もないし、それに今田はブランセさんと一緒に行動する約束してたしな。

「ありがとうございます。それで申し訳ないのですが、ビのくらーで出発できますか？」

「やつですね、すぐにでも行けますよ」

「それでは、お願ひでできますか？」

「はい」

そう言ひて、俺は教会から出て行ひました、のだが。

「すこません、何か腹に入れるもの、ありますか？」

……あまりにもカッコ悪かつた。

そのあと、ロムちゃんラムちゃんにご飯を用意してもらつたのだが、ロムちゃんと帰つてきたら遊ぶ約束を強引に取り付けられた。

だつてなあ。「約束しないと朝ごはん抜きです！」って言われて、じゅあいこやと言つと田をウルウルさせて泣きそうになるんだから。

あれは、反則だよ。

そんなこんなで世界中の迷宮。

来たんだが、何か嫌な予感しかしねえ。

だってや、やつきから機械の駆動音が聞こえてくるんだぜ？

世界中の迷宮と機械の駆動音、つて言つたらキラーマシンしかないだろ。

入つてみたら、やっぱりだつた。

で、ブランさんは苦戦してるわけだ、物理で殴る系だし。

「ケイス、いい所に来たな。あつひのやつらを頼むぜ」

で、「ううおりゃあああ」と言しながらキラーマシンの群れに突っ込んでいった。

ブランさんは、やっぱり堅いなあ。

ま、泣かれたとあつちや逃げる訳に行かないつじょ。

「アーンヴァル、レー・ヴァーテインを出してくわ

「了解です、マスター」

次の瞬間、俺に右手にレーザー・テインが現れた。

それじゃ、行くぞ。

s i d e ? ? ?

見たことない人が「キラーマシン」と戦つてますね。

かわいそつに。人間には敵うはずが…。

あら。倒されてしましましたね。

それも、随分あつたり。

ちょっとと、興味が湧きました。

「ねえ、貴方」

s i d e ? ? ? E N D

「ねえ、貴方」

上から、そう声が聞こえてきた。

俺が上を向くと、銀髪の少女が空中に佇んでいた。

「誰だ、君は

少なくとも原作にはこんなキャラは出てきていない。

銀髪で黒いゴスロリ衣装を着ている奴なんて。

「あら、怖い。でもそういう場合は男性から召喚するものではなくて？」

今つて、そういう場面でしたっけ。

とつあえず無視を決め込み、キラーマシンを倒すことに専念しようと思ったのだが。

「…女性を放つておくなんて、感心しませんわね」

そつ言いながら、何か呪文のようなものを唱えはじめた。

そして、その力を解き放つ。

「雷よ、降れ」

彼女がそつ言つと、雷が俺めがけて降り注ぐ。

「アーンヴァル、電磁フィールドを高速展開ー！」

「了解です！」

アーンヴァルによつて電磁フィールドが生成された、が。

「うがああああつー！」

電磁フイールドを素通りし、そのまま俺に直撃した。

「アーンヴァル、大丈夫か？」

「ど、どうにか、ですが」

そつか、向こうは魔法だった。これじゃ、止められるはずがない。

「あら、あつさつ終了ですか？ 少しは耐えていただかないと」

そう言いながら、第2波を用意しているようだ。

何か、手はないか？

そういえば昨晩、アーンヴァルが言っていたな。

転移の数珠の領域内に魔法の杖があつたって。

「アーンヴァル、魔法の杖に武装変更を頼む」

「え、マスター。魔法が使えるんですか？」

「いや。でも、魔法の杖だつたらどうにかなるかと思つてな」

そう言つとレー・ヴァーテインが右手から消えた。

「マスター、今先ほどの攻撃であれば私もマスターもあと2、3回が限度です。正直、それ以上は命の保障ができません」

「上等ー。」

そして、マジックワンド魔法の杖が召還された。

ん？どこかで見たことあるぞ、これ。

「これは…閃光の杖か！」

そう言った次の瞬間、周りの時が止まった。

「当たり、か」

「どうやらそのようですね」

「ダイク・ザ・ウイザードか」

「私をご存知でしたか」

この人はダイク。リバーサーという物語で、辺境の大魔道師とまで呼ばれた人だ。

「まあ、ね。それで、貴方も俺に力を貸してくれるのか？」

「ええ、神との契約ですし、それに貴方が面白そうな方だったので」

「面白セリフ？」

「ええ。力に溺れず、力を過信せず、あくまで自然に流れていると
ころが」

「アンタ、やっぱりそういうのうが『先生』なんだよ」

「ううしてこらへんうちにも、俺の中にダイクの知識が流れてくれる。

この人の外見からは、想像し得ない禁呪もたくさんあるんだなあ。

「さて、これで終わつたようですが」

「ああ、ありがとう、先生」

「また会つ機会があれば、そのときには色々と話したいものですね」

「はい、そのときには是非」

その言葉に、先生はうなづいてくれた。

それ以降、先生の声は聞こえなくなつた。

そして、また世界に時が戻つていく。

さて、と。

「マスター、反撃の準備はよろしいですか？」

「ああ、もういいん！」

次は止めることができる、はず。

「それでは、」^{いかり}から行かせていただきます。雷よ、穿て^{いかすち}」

空中にいる少女から、そのような声が聞こえた。

そして、雷が俺に向かってくる。

「…^{ロン・ウォール}魔力壁」

俺は左手を掲げて、魔法を唱えた。^{かかげあるいは}

次の瞬間、その左手を起点として俺を守る魔力壁が形成される。

これがロン・ウォールだ。

そして、その魔法で雷は止められた。

「なつ…」

「さて、反撃開始だ」

……SAVE

第10話 大事件発生（後書き）

ケイス「大事件過ぎるんですけど」

「どうか、この事件がやりたいがために女神たちの出撃の1年前から物語にしたんだから、しちゃうがない。」

ケイス「お前か、お前が黒幕なのか」

「ううう、落ち着け。
俺が黒幕なわけがない。」

ケイス「にしても、あの『スロリ少女は何者だ?』

「ああ、彼女の名前くらいだつたら次回明らかになるかも。
正体は、まだまだ先。」

ケイス「ちなみに、あいつが放った雷は何で電磁フィールドで止められなかつたんだ?」

「それは、電磁フィールドでは、魔法は止められないから。」

ケイス「で、やつと俺がパワーアップしたな!」

「うん、やつと魔法を使えるよになつたねえ。
とはいへ、あまり多用はしないと思つよ。」

ケイス「えー!」

基本、君は剣士 + 銃士なんだから。

ケイス「まあ、そうだな。今までがそつたから急に魔道師になれって言われても困るからな」

だから、差し詰め魔法剣士 + 魔法銃士つてところか。

とりあえず、今回出てきた人物 + 技の説明

人物

銀髪のゴスロリ少女

名前は決まっていますが、上で書いたとおり次回で。

とりあえず、魔法重視の魔道師です。

ダイク・ザ・ウイザード

本編で書いたとおり、リバーサーと言つ作品に出てくる主人公の仲間。

かなりの知識人で、今回は魔法以外の知識もケイスに受け継がれています。

ちなみに、持ちネタの禁呪がいくつありますが、全部命に関わるので封印。

武装

閃光の杖

高速詠唱の補助、詠唱の代替、魔力ブーストが主な機能。

魔力ブーストはケイスの場合、元々の魔力量はそんなに大きくないのですが、魔力量が数十倍に跳ね上がって認識される。そのため、本来の魔力では行使不可能な魔法でも使用することができる。

ただし、閃光の杖を装備している場合に限る。

魔法

ロン・ウォール (Ron Wall)

魔力で作成した障壁、と言つたほうがわかりやすいですかね？
基本的に、魔力が介在した攻撃を防ぐことができる。
その強さは魔力量に左右される。

それでは次回、「事件の收拾（仮）」でまたお会いしましょう

ケイス「……突つ込まないぞ」

とりあえず今回、実験的に行間を1行空けてみました。

第1-1話 事件の收拾（とつあげし）（前書き）

世界中の迷宮でキラーマシンが大量発生。その收拾を行っていたときに、銀髪の少女から雷撃の攻撃を受ける。1度目は受けてしまったケイスだったが、ダイクの力を吸収したことにより2度目の攻撃は防御成功。さて、ここからどうなることやら。

第1-1話 事件の収拾（とつあげや）

反撃開始とは言つたもののびり反撃するか。

俺は悩んでいた。

とつあえず地面にいるのであれば、このまま攻撃してしまえばよい。

だが、今の相手は空中にいる。

だつたらどうするか。

……地面に下ろすか。

俺は、閃光の杖を自分の前に掲げた。

s.i.d.e ????

雷撃を防がれた後、下の彼に動きはありません。

一体、どうしたのでしょうか。

そう思ったとき、彼に動きが。

右手に持つている杖を前に掲げて、何か呪文を唱えているのでしょうか？

今が好機のようですね。

私はキラーマシンに指示を下した。

あの青年を攻撃しろ、と。

それで、どうやれます？

s.i.d.e ???.? END

何か、さっきまで動きのなかったキラーマシンが動き始めてるなあ。

「アーンヴァル、すまん。あいつらの攻撃を電磁フィールドで防いでおいてくれ」

「『ゼ』、全部は無理ですよよ（泣）」

だつたら。

「—炎熱術式《PSYCHO-FIRE》、起動

「圧縮、外郭作成、—変換《MATERIALIZE》」

呪文を唱えると、俺たちとキラーマシンの間に浮遊する物体が出現した。

「マスター、あれは？」

「いわゆる《FLOATING-MINE》、爆弾だ」

「ば、爆弾～？」

「じゃ、後は頼むぞ？」

「いや、こんな状況で頼まれましても～」

アーンヴァルが何か泣き言を言っているが、気にしない。

いざとなれば、守れるしな。

さて、と。次はアイツか。

「— 重力制御《GRAVITY - CONTROL》、拘束設定、起動
MODE - BIND LOA

「圧縮、変換」

呪文を唱えると、俺の目の前に黒い魔力球が出現する。
で、これを。

「発射」

あいつに向けて発射する。

side ???

彼は、聞いた事のない呪文を紡いでいた。

まったく聞き覚えのないタイプの呪文だった。

唱え終わると、彼の前に魔力球が出現し、彼が杖を振るとそれは私のほうへ飛んできた。

「くつ。風よ、我を守れ」

呪文を唱えると、風の結界が私の周りに布かれる。

無駄ですよ。その程度の攻撃では。

s.i.d.e ???: END

ああ、やつぱり止められたか。

そりや、防護呪文の一つや二つ持つてるよなあ。

とりあえず、それは想定範囲内、だから。

「一重力制御《GRAVITY - CONTROL》、一圧縮解除《DISCOMPRESS》」

圧縮モードを解除し、その結界ごと拘束する。

黒い魔力が彼女の周り（といふかおそらく結界）を包み込む。

包み込んだのを確認し、最後の呪文を唱える。

「拘束、下降」
BINDING DESCEND

呪文を唱えると、黒い魔力は中を締め付けながら地面に降りてくる。

さて、「」対面とこきますか。

「くつ、何故私がこんなことに」

先ほどまで空中にいた少女がそう言っていた。

ちなみに、まだ拘束^{BINDING}は解いてないよ。

「で、君は誰?」

「それは、私のセリフです。」この国に、貴方のような人はいなかつたはず「

勝気な人だねえ。

「えっと、俺が質問してるんだが?」

そう言いながら拘束に魔力を込めていく。

「ぐつ。分かり、ました。言いますから、これを解いていただけません?」

「駄目。逃げそつだから」

「くつ」

そつとこいつ、彼女は俺のほうを睨み付けてくる。

だが、観念したのか話し始めた。

「私は、グリ。マジュコンヌに『するものよ

「マジュコンヌ?」

「ええ、私に何かあればマジュコンヌが黙つていなさいわよ」

マジュコンヌが黙つてないって。一体、ビッちのだらう。

「えーとさ、確認。マジュコンヌって、犯罪神? それとも犯罪組織?

「え? 犯罪神? 犯罪組織? 何ですか、それ?」

「は?」

「だから、マジュコンヌって人が黙つてないっていってるんだよ!」

ちょっと待て。

「あのせ、マジュコンヌさんつてどういう人?」

「え? 電話とかメールとかでしか話したことないんですけど」

ちよ、おま。ゲイムギョウ界でもゆとり化が進行してゐるのか?

何でそんな会つたこともない人を信用してるんだよ。

「今回のこととは、その人に命令されてやつたのか？」

「ええ、そうです」

「何で！」

「一人で生きていくには、そうでもしないと生きていけないんです」

彼女から、色々なことを聞いた。

まず、身寄りだが今は誰もいらないらしい。

数年前まではおじいさんとおばあさんと一緒に住んでいたが、今はもう一人とも亡くなってしまったこと。

それから一人でどうにか暮らしていたが、生活費が底をつけ始めたため、職を求めてギルドに行つたが、女という理由のみで帰されたこと。

そんな時、ネット上でマジックコンヌと言う人が、能力のあるものを募集していることを知り、それに応募。

それで今に至る、というわけだ。

「少しだけ同情できるけど、あまり褒められたものじゃないな」

「はい、すみません」

先ほどまでの彼女はビックリ。

完全に別人だった。

「まあ、今はそれは置いといて、事態の収拾を優先で考えましょう」

俺はそう呟つと、フランさんを探した。

まあ、簡単に見つかりましたけどね。

「フランセーん、ちょっと来てもいいですか？」

「あ、？今戦闘中だ！見てわかんねえのか」

「いや、分かってるから言つてるんです。それだけの数全部相手にするつもりですか？」

まあ、本編でロムちゃんラムちゃんは2人で相手にしてたけどね。

「…何か策があるのか？」

「ええ、とつあえず」

「わかった。すぐ行くから待つて」

そう言つと、フランさんは得物を振り回し出口を作り、じつに来た。

「で、どうあるんだ？」

「逃げます」

「「え?」

ブランさんとグリさんは声を合わせて叫んだ。

まあ、そりゃそうなるわなあ。

「とりあえず、彼らを足止めします。お一人は先に出口に向ってください」

そう言つと、俺は先ほどの一浮遊機雷《FLOATING-MINE》を手元に戻した。

そしてそれを、2グループのキラーマシンへ向かって投げつけた。

それらが地面に落ちたとき、ドーンと音が鳴り響き、その後熱風が吹き荒れた。

「……マスター、あんな物を作ったんですか」

アーンヴァルの笑いがすぐ乾いていた。

そして、俺はブランさん、グリさんと並んで出口へ向かった。

俺が出口に到着すると、一人は待つてくれた。

「あの、おーじい爆発が起つてましたか、あれは？」

「足止め用爆弾ですよ、ただの」

「マスター、足止め用爆弾はあんな火力ではないと思います」

グリさんは冷や汗をかきながら、爆発の起つていた場所を見ていた。

「わー、それじゃーこれから出ましょーか」

やつまつこ、世界中の迷宮から出てきました。

で、出た後。

「おー一人とも、ちょっとだけ待つてください」

やつまつこ、俺は今出てきた出口のまへを向く。

「何をやるの?」

やつまつランが聞いてきた。

「この迷宮の時間を止めるんですよ。じゃないと、やつまのキラー
マシンが出てやつまつでしょー。」

「やんな」と、やあることですか?」

「やあるかよ?」

俺がそう言つと、「私、ケンカを売っちゃいけない人に売っちゃつたのかなあ」と涙目になつてゐた。

「とつあえず、聞かなかつたことにする。

「一時空間制御《CRONUS-SYSTEM》、ACCESSES接続

「一時空間凍結《FREEZE-MODE》、COMPILERUNNING構築、EXECUTING実行」

「ふう、とつあえずこれでどうにかなるかな?

「さて、終わりました。とつあえず、これから後のこと話を話しにルウェイーに行きましょうか」

そつまつて、俺はルウェイーへ歩き始めた

「そ、そうね」「は、はい」

ブランさんとグリさんはそつ答えると、俺の後について歩き始めるのだった。

……SAVE

第1-1話 事件の收拾（とつあがせ）（後書き）

ケイス「ちょ。どういう状況だよ、これ
どれが？」

ケイス「全部だよ全部。敵キャラみたいに出てきたグリさんは実は
いい人みたいだし、俺は思いつきり魔法使つてるし」

そうだねえ。

まあ、いいんじゃね？

ケイス「ついでに、魔法が何か普通の魔法と違つじ
うん、けど何やってるか大体分かるっしょ？」

ケイス「わかるけどさあ」

魔法は大体こんな使い方になるよ。

こうした方が、使い勝手が良いんで。

わい、それじゃ新しく出てきた人の紹介です。

グリ（GRILS）

銀髪のロングヘアで、服装が黒のゴスロリファッショーン。

魔法（主に4元素を使役した魔法）が得意な魔道師。

本編では述べられていなかつたが、5年以上前の記憶がなく、覚えているのは名前くらいだった。

数年前まで一緒に住んでいたおじいさんとおばあさんも、自分の親戚縁者などではない。

おじいさんとおばあさんは、亡くなつた自分たちの孫娘に似ているグリを引き取つて暮らしていた。

魔法については、気がついたら使えるようになつていた。（おじいさんやおばあさんが教えたわけではない）

そんな状況のため友達も知り合にも面づらす、マジヒコンヌ（？）でいいように扱われていた。

グリ「こんな私ですが、よろしくお願ひします（ペニツ）」

ケイス「何回聞いても、腹が立つな、これは」

グリ「ひいっ！？謝りますから許してください。本当にみんなさい（土下座）」

ケイス「いや、君じゃない。この、マジヒコンヌ（～）だ。だから、土下座はやめー」

ケイス、……お前何した？

このおびえ方は尋常じゃねーぞ。

ケイス「何もやってないーー！」

（あとでグリのフラグ立てとくか）

ケイス「（ゾクッ）何だ、今の寒気は」

それでは次回、「キラーマシン、再度封印」でまたお会いしましょつ

第1-2話 キラーマシン、再度封印（前書き）

迷宮」と時間を凍結させ、キラーマシンを一時封印したケース。彼には、キラーマシンを再度封印する手立てがあるのか？ わたし、これからどうなることやら。

第1-2話 キラーマシン、再度封印

ルウェイーに帰つてゐる途中なア。

わへ、ぢりじよつかなア。

キラーマシンを封印しないといけないのは当たり前として、ぢりじよか
るか。

まさか、こまま放つておくれて手は……なによなア。

「ねえ、ブランさん」

「何?」

「ルウェイー元、ゲームキャラクターデザインのへりこ残つてる?」

「〇よ。まつたく、何を考えてんだか」
ロボ

そつとこながらグリさんのみつを覗む。

その睨まれたグリさんといえ巴。

「ノレ、じめんなさこひー。」

俺たちからひよつとはなれて後ろを歩いていた。

あ、今はもう拘束をかけてないよ?

でも、とつあえず「逃げたいひつなるか、分かつてゐよね?」と言つておいた。

その後から田を合わせてくれなくなつたんだが、何でだろ。

「マスター、それは当たり前と言つまのです」

「ちよ、アーンガアル。心を読むな。

それはさておき、ホントじつようかなあ。

ゲームだと、どうだつたんだっけ。

確かに、ホワイトディスクが
『ネプテューヌに頼まれた』
つて言つてたな。

だったら、話は簡単。プラネットьюースと交渉をすれば良い訳だ。

でも、そうするとあとは交渉の材料か。何があるかなあ。

「何を考えてこるの?」

ブランさんがさう聞いてきた。

「いや、ゲームキャラをひとつ入れようかと|画策中

「何かいい案があるの?」

「いや、無いんだつたら、他の国から貸してもいいべき良ことと思つて
る」

「宛は？」

「プラネテユース？」

「ぱつ、お前、それは駄目だ。アタシはネプテューヌに頭を下げる
のは絶対に嫌だからな！」

ブランさんは明らかに拒絶反応を示した。

まあこの一人、水と油だしなあ。

「ですよねー」

「だつたらラステイションとかリーンボックスとかから借りれば」「
交渉の材料はどうします？リーンボックスはまだ良いとして、ラ
ステイションは何か吹っかけてくるような気がしますが？」

「うう……だつたら、リーンボックスから」

「だから、交渉材料をどうするか、って言つてるんです。妹さん、
一人貸し出しますか？あそこは女神様に妹がないみたいでし

「それもダメだ！何でロムがラムのどちらかを差し出さなきやいけ
ないんだ！？それだつたら、今そのままにすればいいじゃねーか！」

「いや、それは」勘弁くださいな

「何でだよ！」

「今、こいつしてる間も、俺の魔力がガンガン使われてるんですよ。
このままじゃ干からびます」

もちろん嘘ですが。

閃光の杖を持つてゐる限り、こいつにかかる。

「馬鹿野郎！ 何でそれを早く言わないんだよ」

「や、だつてそつこ風に心配しちゃつじやないですか。だから嫌
だつたんですよ」

side グリ

うう、何かあの一人の会話がかなりヒートアップしてゐる。

それに、私が『ゲームキャラ』を壊したことで、何か大変なことに
なつてるみたい。

こいつは、私が！

「あ、あのぉ、ちょっとだけいいですか？」

side グリ END

「あ、あのぉ、ちょっとこいですか？」

グリさんが、そつ話しかけてきた。

「じつしたんだね。」

「じつしたんです、グリさん」

「ゲームキャラをそつて、蘇らせられないんですか？」

まあ、普通はそつ想ひだらうなあ。

「俺には無理ですね。グリさんは持つてるんですけど、蘇生魔法」

「いえ、持つてない……です」

グリさんがそつ想ひで落ち込んでしまう。

「大丈夫ですよ、何とかなりますつて。……多分」

まあ、でも正直俺たちだけじゃ決められない。

とりあえず、ミナさんを巻き込もう。

そう思い、俺たちはルウィーへ向かった。

さて、ルワイーの教会にて。

「ええっ、モンスターってあの伝説で語りわたるキャラマシンだつたんですか！？」

まあ、そうだよね。

それが正しい反応だね。

「それで、この弱そうな人がその封印を解いちやつたの？」

「ううううう、ラムちゃん。少しばオブラーートに包みなさい。

「それでですね、ミナさん。ゲイムキャララってもうルワイーにはいらないんですよね？」

「やうですね。世界中の迷宮にいたあの方が最後のゲイムキャララと聞いています」

うん、ブランさんの話と合ひつな。

「とすると、ゲイムキャララを他の国から借りる、または譲り受けるしかなこと思つんですねよ」

「そうですね。私も同じ意見です」

「ちなみに、ミナさんだったら、どこの国にはじめに交渉しませうか

「やうですね……。私だったら、まずプラネットコースでしょうか」

「やつぱりですかよ」

まあ、なんだかんだ言つて一番交渉しやすいだらうしな。

他の2国に比べて、だけどな。

「お、お前り……。アタシは絶対にネプロテコーズに頭なんか下げないからな」

うんうん、分かってますって。

「でも、どう交渉しましょうか。正直言つて、今のルウェーに交渉できる材料なんてないですよ?」

「なら、俺がビルにかして見せますよ。だから、プラネットコーズと通信してもらひえません?」

最悪、俺が交渉材料になれば良い。

そりすれは、丸く収まるだろ。

そつ思つてみると、ナセさんとブランセさんが一生懸命何かをセッティングしていく。

「それが通信用の機器ですか?」

液晶テレビ「マイク、それにビデオカメラ。

小さこ「レビ局だな、これは。

「さうよ、今まであまり使つたことがないけど。ほら、ロムに元ロム、あなたたちも手伝つて。それとそこでいじけてる貴方もよ」

そういひじてこぬつて、俺を除く4人でセッティングを完了していた。

「さて。それでは、まず私が話をするので、それに続いて話していただいくよ」

「ああ、わかった」

さて、一世一代の晴れ舞台、びつなることか。

side イストワール

はあ、平和ですね、最近は。

ネプテューヌさんもネプギアさんも静かになつたので、こうして静かに仕事ができます。

そう思つていると、他の国から通信が来たようです。珍しい。

さて、それでは早速この通信を受信しましょつか。

ふふつ。何か良いことがあると良いんですが。

side イストワール END

『はー、 ジカラフナテコーズのイストワールです』

おお、 いーすんさんだ。

相変わらぬのね。

「お久しぶりです、 イストワール様。 何年振りでしょうか」

『あー、 ミナさんではないですか。 お久しぶりです。 今日はどうしました?』

「実は、 少々お願ひがありまして。 ちょっと変わりますね」

いーすんさんは『はー』と返事をして、 ジカラを見ていた。

ミナさんはとこづと、 僕のほうを向いて、「それじゃ、 後はお願ひします」と小声でいい、 席を空ける。

その空いた席に俺が座り、 いーすんさんと対面する形となつた。

「お久しぶりです、 イストワールさん」

『ケイスさんじゃないですか。 お久しぶりですね。 元気そつで何よりです』

「はい、 イストワールさんもお元気そつで」

『それで、 お願ひとこづのはケイスさんからなんですか?』

「ええ。実は…」

と言いかけてたそのときだった。

『いーすーん、たつだいまー。あれ?何かお話中?…あーっ!!ケイスさんだー』

間がいいのか悪いのか。

ネプテューヌの登場だった。

「お久しごぶり、ネプテューヌさん。お元気そうで何よりですよ」

『うんっ!私は元気だけが取り柄だからねー。で、今日はどうしたの?』

「いや、実は…」

そのあと、かくかくしかじかで事の顛末を伝える。

『うーん、私としては別にかまわないんだけどね。けど、いーすんが何か見返りが欲しいって言つてるんだよね』

そつ言つてる後ろから小さく『私はそんなこと言つてません!』と聞こえてくる。

『だからね、ネプギアに会つてあげてもうえないかなあ』

「ええ、そのくらいの見返りだつたらいいからでも」

『わかつたー！ちょっとだけ待つててねー』

そう言ひ、ネプテューヌは画面から出て行った。

変わりに、一一さんさんが画面に近寄つて来て、立派だった。

『ネプギアさん、ケイスさんと別れてから、ずっと剣の練習をしているんですよ、あのときの剣で。だから、壊めてあげてくださいね』うん、やっぱりネプギアはいい環境で育つてゐんだなあ、としみじみ思つた。

そうしてると、『お姉ちゃん、私髪乱れてない？』とか『服、汚れてないよね』とか聞き覚えのある声が近づいてくる。

そして、その声がいつたん途切れ。

そして、バンッと扉が開け放たれ、そこには懐かしい顔があつた。

「よし、ネプギア。久しぶりだな」

『はー、ケイスさん。こちらこそ、お久しぶりです』

「聞いたぞ、一生懸命剣の修行がんばつてるつて」

『ちひかさん。ケイスさん、一田でも早く近づいためですからー。』

「がんばれよ？また余ひ口を楽しみにしてるからな」

『はいっ。それじゃ、私今からギルドに行つてきまーすから、これで』

「ああ。またな、ネプギア。気をつけてな」

『ありがとうございます。ケイスさんも、体に『氣をつけてくださいね?』

そつまつと、ネプギアは画面から出て行つてしまつた。

side ロム

今の女の子、誰なんだろ?。

「あの、あの娘誰なんですか?」

さつき、ケイスさんが連れてきた女の人がミナちゃんにそう聞いていた。

「あれは、プラネテュースの女神候補生のネプギアさんですよ。それと、その前の人人が女神のネプテュースさんですよ」

ネプギアちゃんって言つんだ。

……注意しないと。

私の中に、ネプギアちゃんは要注意人物として登録された。

side ロム END

side グリ

あー、女神候補生だつたんだ、あの子。

それに強そうだし、何しろ『恋するオーメ』の顔をしていた。

それに伴つて、何かわざから口ムチャさんが怖いんですけど……。

(;) ;)

side グリ END

『つひこ』と、見返りももうつちやつたから、今からゲイムキャラを1人連れて行くよ。数時間だけ待つて』

数時間後、女神化したネプテューヌが最高速度で飛んできた。

ゲイムキャラを伴つて。

「サンキュー、ネプテューヌさん」

「いいわよ、わざわざ言つたじゃない。見返りはもうつたつて

さて、それじゃ再度封印と行きますか。

「ネプテューヌさんも一緒に来ます? 封印に

「ええ、もちろん。そんな強そうなモンスターと戦うことなんてめつたにないことだし」

……やつぱりそっか。

女神じゃなくて戦闘狂じゃないのか、本当は。

「足を引っ張らないでね、ネプテューヌ。アタシの邪魔するなら、マッハでぶちのめすわよ」

アンタもですか！

とつあえず、キラーマシンはこの2人の狂戦士バーサーカーに任せて、俺たちはそのキラーマシンの封印を行つたのだった。

「戦い足りないー」

「…右に回じ」

「やかましいわー！」

「ゲームキャラさん、本当に申し訳ありません。このようなことを今回お願いしてしまって

「いいのですよ、ルウェイーの教祖。わたしたちの力は、このような時のためにあるのですから」

あのバーサーカー達がいなければ、もつといい場面だったのに。

そう思いながら、俺達はルウェイーの教会へ帰つていった。

... S A V E

第1-2話 キラーマシン、再度封印（後書き）

祝！ファルコムさん、ケイブさん配信記念！

ケイス「いや、意味が分からぬから」

本当はファルコムさん配信までにこの本編にファルコムさんを出したかったんだけどな。

ケイス「まあ、でも出しちゃいけないってわけでもなし

モチロンですよー。

さて、今回ですが。

ケイス「無理やりだつたなあ、本当。いつも以上に

うぬせー。

ケイス「でも、久々にネプギアに会えたから、ほつこつできたよ」

そうだねえ、何話ぶりだろ？ ちなみに、プラネットユースから旅立つて1ヶ月くらいって設定でよろしく。

ケイス「ただ、ロムちゃんがずっと不機嫌だったんだけど。何があつたのか？」

…知らないほうが身のためだと思つよ。

ケイス「ま、どうかキラーマシンを封印できたからいいか」

お前もお気楽だのう。

ケイス「それで、次はどうなるんだ？」

まあ、やる」とやりましたから、次回でルウェー編は最後。あ、もちろん本編開始前って意味でね。

ケイス「つてことは、また旅立ちか。結局、ラムちゃんとは仲良くなれなかつたなあ」

なりたかつたのか？

ケイス「ま、嫌われてるよりかはいいだろ？」

……（三角関係がお望み、と。あ、四角関係か？ネプ、ギアも入れる
と）

とこうことじ

それでは次回、「旅発つ者と残る者」でまたお会いしましょう

第1-3話 旅発つ者と残る者（前書き）

ネプテューヌの協力により、キラーマシンを再度封印することができた。

そして、ケイスは平和になつたルウェイーを見て回ることにした。
さて、これからどうなることやら。

第1-3話 旅発つ者と残る者

「それじゃ、私はこれで帰るわね」

ネプテューヌはやうやく、ルウェイーの教会を後にしようとしました。

「ネプテューヌ、サンキューな」

「別に、いいのよ。私はルウェイーに貸しが作れただけでも満足しているんだから」

そう言いながら、クスリと笑う。

「やっぱつやつやつ」と、か。だから、私は反対したのこ

ブランさんは呆れたような、諦めたような微妙なかおでそんなことを言っていた。

「冗談よ、ブラン。このへんこ西北西に欲しいわね」

まったく、この一人ときたら、仲がいいんだか悪いんだか。

「ああ、早く帰つたら?妹さんが心配してゐるわよ?」

そう言いながら、ブランさんはニヤッと笑う。まるで、さつきのお返しだと言わんばかりに。

「やうね、ブランにも早く帰れって言われてしまつたし」

ネプテューヌは心なしかシゴンとした感じでそう言った。

「いや、あの、誰も本氣で帰れなんて、そんな……」

ブランさんはあたふたしながら何か言おうとしているが。

傍から見ると……。

「冗談よ」

…遊ばれてるよ!!しか見えないのは何でだろ!!。

「てめつ、ネプテューヌー早く帰りやがれ、このバカが」

「あははっ、やつヒブラン、ひじくなつた。それじゃ本當に、じやあ
ね」

ネプテューヌはひづれと、協会から出て行った。

そして、教会の中は沈黙に包まれた。

「あははっ、お姉ちゃんとネプテューヌの女神の掛け合いで、面白
かつたね、ロムちゃん」

「…そうだね、ラムちゃん」

…かのよつて見えた。

さて、俺もそろそろ次の国に行く時期かな。

キラーマシンの封印もできだし、あとは時間がビビリかしてくれるださう。

「さて、それじゃもう俺も行くつかね

「…ケイスさん、どこに行への…近くのお店だったたら、私も一緒に行きたい…」

「口ムチャさん行くならわたしも。何か買ってくれるんでしょ? ケイス」

口ムチャさんとラムちゃんは、俺がビロに買い物に行くものだと思つてゐみたいだ。

「違つよ、口ムチャさん、ラムちゃん。俺もそろそろ、また旅に戻ろうかな、つて思つてや」

「ううん、ラムちゃんは「なーんだ、つまらない」と言つて、ミナさんのほうに行つてしまつた。

一方口ムチャさんは、「えつ?」と言つて俺の顔をずっと見つけていた。

「ケイスさん、…あのネプギアちゃんって女の子の所に行への?..

何故そこでネプギアが出て来る。

「違うよ、口ムチャさん。俺は、ラステイションに行つて廻つてゐるんだ

「ラステイション？…何をして行くの？」

「別に、何をして行くってわけじゃないんだ。俺は冒険者だからね。いろんなものを見たいだけなのかもしれないけど」

「…だったら、ケイスさんのお別れ会…したい。いい？…ミナちゃん」

そう言つてミナさんのほうを見た。

ミナさんは困った顔で「いいですよ、ロムちゃん」と答えた。

「…うん、それじゃ準備…する。お姉ちゃん、ラムちゃん、ミナちゃん…手伝つて

「じょうがないなあ。口ムちゅんの頬みじょ断れないからね

「うそ、じょうがない。私もロムの頬み聞いてあげたいから」

「だったら、書は急げ、ですね」

そして、4人は俺のお別れ会の準備をするために、教会から出て行つた。

いや、正確には、

「ケイスさん、グリさん。お二人はどうかで時間をつぶしていくいただけますか？夕方くらいに教会に戻つていただきだければ良いですから

「ナ、なんせそう言つてから出て行つた。

俺、OKしないの。へすん。

「セ、セ、どうしましょつか」

おれはグリさんはこう話しかけた。

するとグリさんは、「ちゅうじこいです」と言つて、俺の手を引いて喫茶店に入つていつた。
何でも、相談があるらしい。

「で、何の相談ですか？」

俺は注文してから10分ほど待たされて出てきた珈琲を啜りながらそう聞いた。

お、これ美味え。

「あの、私も連れて行つてもらえませんか？」

「え? どうしてまた」

「私は、前にお話したとおり、身寄りがもうないんです。だから、連れて行つてもられないかなあ、って」

あ、そういうえばそうでしたねえ。
すっかり忘れてました。

「ダメです

俺は即答した。

「何ですか！」

「グリセラ、貴女にはやりなくてはいけないことがあります

「やるなくてはならないこと、ですか？」

俺は「ええ」と答えたながらまた珈琲を啜る。

「今回、ルウェイーをこんな状況に陥れたのはどなたですか？」

グリセラは「うう」とつめき声をあげた。
結構、気にしていたようだ。

「貴女には、この状況を見守る義務があると思います

「確かに、そうですね」

「それと、もうひとつやって欲しいことがあります

「何でじゅう

「女神候補生…ロムナちゃん、ラムナちゃんに魔法を教えてあげてもう
いたいんです」

「魔法を、ですか？」

グリさんは「女神様には、不要だと思いますが」と続けた。
まあ、普通はそう思うよな。

「こぎりと言つと私の保険ですよ。現在の女神様たちは魔法がほとん
ど使えないと見て間違いないよつですから。それに」

「それに？」

「あの2人は、本から得た知識で魔法を行使しています。そんなも
のより、生の情報まほつうのほうが断然いいと思いませんか？」

「確かにその通りだと思います。でも、私に教えられるでしょうか
？」

「大丈夫ですよ、グリさんは優しいですから」

「はい、ケイスさんがそう言つなら、私やつてみます！」

そう答えたグリさんの顔は笑顔だつた。

まじめな話が終わつた後、俺とグリさんは他愛のない話をしていた。

俺からは、プラネテユースで経験した話やプラネテユースからルウ
イーへ旅したときの話、あとはロムちゃんラムちゃんに初めて会つ
た時の話。

グリさんからは、おじいさんやおばあさんが生きていた頃の話やそ
の後俺達に合つまでの話を聞かせてもらつた。

俺が一番驚いたのは、グリさんがメドローアを使えることだった。

「アレ、使える人いたんだ。

話しているうちに夕方になってしまったので、教会に戻ることにした。

教会に戻ると、すでにパーティーが始まられる状態となつており、俺達はすぐにパーティーを開始した。

プランさんの開会の挨拶から始まって、今は雑談中…のはずなんだが。誰だ。酒を入れたのは。

「いつも」「」「あなたの隣に這いつぶる混沌、ニヤルラトホテプでつす！」

「プラン様。何言つちやつてるんですか！」

「なあ、ラステイションのユーを連れてきた方がいいか？」

「……それは、いろいろな意味でダメです」

「世の中の、二ートではない人間のほとんどは、人間の資質がスカラではなくベクトルであるということを理解できないのだね」

「ロムちゃんが…、ロムちゃんが饒舌にしゃべってる…しかも難しいことを」

「何か、いい具合に混沌だな」
カオス

「…………おー」

「今度は壊れたつー!?」

色々としつちやかめつちやかだつたが、パーティーが終わつた。

まあ、フランさんも口ムちゃんも何も覚えていないと言ふのが幸い

「あ、みんな、ちょっとだけいいかな？」

俺はそう言い、みんなの顔を見渡した。

「俺が、今まで「んな」させつてもひつた」となかつたんだ。本当にありがとな

そう言って、頭を下げる。

この世界に来る前から しぐんな出会いや別れをしてきたにと
んなに別れが惜しくなるのは初めてだった。

「そ、う、よ、感謝しなさいよ。女神様じきじきにやつてあげたんだから

۱۵۱

ラムちゃんがやつぱつと、ミナさんが後ろからロジンと頭を叩いた。

ラムちゃんは「いたーい」と言いながらその場で頭を押された。

そんなラムちゃん田線を合わせるよついで座り、頭を撫でながら「ありがとね、ラムちゃん」と言った。

そんな俺達を「……むー」と叫こながらロムちゃんが見ていく」と俺は気づかなかつた。

ラムちゃんは、はじめは氣持ちよがうにしていたのだが、シミナセニヤブランさんが二口一一口しながら見てくるの「え?」と「せつ」となり俺の手を払いのけた。

「なれなれしくしないでよつ

やつまつと、教会から出て行つてしまつた。

……いい空氣だつたのになあ。

パーティーが終わつたあと、ブランさんとロムちゃんは自分の部屋に帰つてこそ、教会には俺とグリさんとナさんが残された。

「やつだ、ミナさん。ちよつとおじめなお話が

「どうしたんですね?」

「グリさんの話です。実は……」

と言つて、毎間にグリさんと2人で話していくことを話してみた。

「そうですね。正直言わせてもらひつと、教会にはそれほど欲しいとは思いません」

「そうですか……」

「ですが、必要だとは思っています。ですから……ルウェイーでギルドメンバーになる気はありませんか?」

「私、一度断られてくるんですよ?」

「それに関しては大丈夫です。ギルドには私のほうから、推薦状を出します。そして、ギルドのお仕事の合間にでもロムちゃんとラムちゃんに、魔法を教えに来ていただければ、それではダメですか?」

「いえ、私には充分すぎるほどです。その依頼、お受けします」

「お礼を言つのはいかがのほどですか?」

「それからよろしくお願ひしますね、グリさん」

「ハーハーハーハ、よろしくお願ひします。ハナさん」

「さて、それではもう遅いですから、お一人とももう寝たほうがいいと思いますよ。お一人とも、昨日のお部屋を使えるようにしてるので、そこを使ってください。」

そういうわれたため、俺達は昨日使わせてもらった部屋へ向かった。

そして、俺の部屋の前に来たとき、2人の人影が見えた。

「あらあら、ケイスさんモテモテですね」

部屋の前にいたのはロムちゃんとラムちゃんだった。

「それじゃ、私も自分の部屋に行きますね。おやすみなさい」

そう言って、早足で自分の部屋に向かっていった。

さて、俺にどうしようと。

「……ケイスさん、一緒に寝ていい？」

「わたしはロムちゃんがあんたと一緒に寝たいって言つてたから一緒に着ただけなんだからね！ カン違いしないですよ」

ロムちゃんの上目遣い + ウルウルに勝てるわけもなく、陥落しましたよ、ええ。

結果的に、「小」の字になつて寝ました。

そして二人ともが俺に抱きついてきて、「あつたかい……」と言つた始末。

二人とも子供と言つこともあり、すぐに寝てくれた。

ただ、二人ともが寝言で「行っちゃやだ」と言つて俺の服を握つてきたのは印象的だった。

思わず、一人の頭を撫でてしまつほどだ。

その後「えへへつ」と笑つてくれた時は、思わず「ズキン」と心が痛んだ。。

朝。

俺は口づけを離して下へ向かつ。セイドは、ミナセが朝食の用意をしていた。

「ミナセ、おはようござれ」

「おはようござります、ケイースさん。それに口づけを離すのも時間がかかるも」

「おはよう、ミナセさん」

「ミナセさん、……おはよ」

「わあ、冷めちゃこますから早く皿に上がれ」

ルウェイー最後の食事、ともなると感慨深くなるなあ。

「あれど、ケイスさん。グリセラから伝言です。今度ルウェイーに来たとき、また戦闘しましょ、だそうですね」

「アリですか。じゃあ、いつ返しておこしてください。望むところです、と」

ミナセは「お一人とも不器用ですね」と軽く笑う。

どうこうの意味だ?

そして、朝食をお食べ終わり、俺は自分の荷物をまとめた。そしてこの数日間世話をした部屋に挨拶をして教会に向かつ。教会では、ミナセとブランセ、ローチヤン、ラムチヤンが待つ

ていた。

「ありがとう、ケイസ。また会いましょう」

「ケイസさん、本当にお世話になり、ありがとうございました。近くに着たら、また寄つてくださいね」

「ケイസ、アンタが強いつてのは認めてあげる。けど、わたしはもつと強くなつて見せるんだから。そうしたら、アンタのこともわたしが守つてあげるわよ」

「ケイസさん、……ばこばこ（ウルウル）」

「うん。みんな、ありがとう。この濃厚だつた数日、絶対に忘れないから。それじゃ、またなー。」

そして、俺は教会から出て一歩、また一歩と足を進め始めた。さて、次の目的地は、ラステイションだ！

.....SAVE

第1-3話 旅発つ者と残る者（後書き）

やつひまつたぜ。

ケイクス「中の入ネタのことか？」

うん、そう。

ケイクス「でも、これって分からない人が見たら意味不明だよな」

まあ、そうだな。

その場合は、その部分だけ消す？

消しても問題ないようにはしてあるし。

ケイクス「まあ、誹謗中傷があつたらね。今のところなぞうだから安心してるけど」

とにかくことで、ルウイー編終了です。

ケイクス「つてことは、次回からラステイションか？」

まあ、ラステイションって言えばラステイションだな。
けど、まだノワールやユニーは出ない。

ケイクス「どういう意味だそりゃ」

ということだ。

それでは次回、「空から何かが落ちてきた」でまたお会いしましょう

ケース「おー、何が落ちて来るんだよー。」

幕間 設定のまとめ～ルウェイー編～（前書き）

ルウェイー編が終了したので、いままでの設定のまとめをしておきま
す。

幕間 設定のまとめ～ルウェイ編～

オリジナルキャラ

ケイス

現実世界から転生したこの小説の主人公。

基本的に感性のままに行動する。

現在、剣士、銃士、魔道師の力を駆使して戦闘を行う。

剣士としての力

片手剣、両手剣どちらも自在に扱える。

また、棒術についてもそれなりに使えるらしい

銃士としての力

軽火器から重火器まで扱うことができる。

ただし、重火器の場合移動に支障が出るためあまり多用していない。
これまでの傾向より、まず軽火器で牽制してから突っ込むという戦法を多用する。

魔道師としての力

アイテム創造から空間掌握、時間停止など、多岐にわたる。

ただし無詠唱で使用できるものは限られており、その筆頭が魔力壁である。
A LONG WALL

使用する呪文は、コンピュータのプログラムに近い。

また、魔術師の力を行使する際に便利な閃光の杖だが、彼自身が剣士として戦うことも多いため、左手首にブレスレットとして身に付けるという方法をとっている。

アーンヴァル

ケイスの中にある剣士の力によって生み出された存在。

彼女自身、自分が何者なのかは理解している。

彼女の中に武装神姫としての知識もあり、装備の解析については問題ない。

また、ケイスの持つ転移の数珠の力を使用することにより、異空間からの武装の取り出しを行うことができる。

だが、基本的に彼女は自分ではその武装を使用することができないため、自分から行動を起こすことは少ない。

グリ

ケイスたちがルウイーで出会った少女。
まあ、少女とはいえ外見年齢は16～20歳程度なのだが。
某魔法少女も118歳時の物語も「少女」で通していたため…（以下、脱線のため削除）

現在はルウイーにて贖罪行動中。

主に、ゲームキャラの保護、ルウイーの女神候補生姉妹に魔法を教えると言ったことを行っている。

後者については、対象である姉妹が気侷なため、あまり進まないようだ。

彼女の魔法は基本的に4大元素を扱う魔法が多い。

火、雷、風、水、氷、土

（雷は風に、氷は水に含まれる）

特殊記述として、彼女には6年以上前の記憶が存在しない。

本人もすでに気にはしていないため、「別に思い出さなくてもいいか～」程度の認識。

ケイスの使用する武器

近接戦専用

M4ライトセイバー

M8ライトセイバー

剣の部分がエネルギーで構成されている小剣。

M4、M8はエネルギーの消費量の差を示している。

M4ダブルライトセイバー

M4ライトセイバーを2つ上下に取り付けたダブルブレード。
多数の敵がいる場所に切り込むのに重宝するが、今のところ使用された実績なし。

ギュリーノス

刃の部分がエネルギーで構成されている大剣。
使用実績なし。

レーヴアティン

剣の部分が炎を模した何かで構成されている小剣。
鉄などの金属であれば、溶かし斬ることが可能。
持つっていても、別段熱くない。

近・中距離

アルヴォ P D W 1 1

普通のハンドガン。通常モードでは通常弾（火薬弾丸）で攻撃するが、エネルギーモードの場合はエネルギー弾を使用する。エネルギーモードの使用実績はないが、それなりに使いやすいハンドガン

アルファピストル

ピストルと名がついている通り、あまり大きくない。ケイスはこれを魔力弾を使用するための銃に魔改造済。そのうち本編に出てくるかも

遠距離

L C 5 レーザーライフル

今のところ、野良ドラゴン掃討のために1回だけ使用された武装。基本的にケイスが近距離専門なため、あまり出番がない。かつ、エネルギーチャージに時間がかかるため、といつのも理由のようだ

幕間 設定のまとめ～ルウェイー編～（後書き）

とうあえず、ルウェイー編が終わりのため、まとめてみましたが…あまり変わつていませんねえ。

ケイス「変わつたのはグリセラーリーか」

そうだね。でも、彼女も一応重要な役をしてもらひ予定。

あと、ちなみに地味に閃光の杖をフォームチュンジさせてある。この杖が書きやすいかな、と思つて。

ケイス「やうだな。いちいち出して呪文を唱えてってのはアレだしな」

ええ、アレです。

と書つことで、今回は短いですがここまで。

第1-4話 空から少女が落ちてきた（前書き）

予告と題名を変えました
ルウェイーから旅立つたケイス。
彼らはルウェイーとラステイションの国境に差し掛かっていた。
さて、これがどうなることやら。

第14話 空から少女が落ちてきた

俺ことケイスは、今ルゥィーからラステイションに至る街道を歩いている。

すでに、ルゥィーを出発してから4日が経過した。

田にする景色も、一面の雪から緑に変わつた。

そろそろ、ラステイションの土地が近いようだ。

「アーンヴァル、そろそろラステイションに入るみたいだ」

「あ、やつですか。ラステイションに入つたら、私の武装を作ってくれるんですよね？」

「ま、作れるやつがいたらな」

そう言つておれは歩を進めた。

「そんな時だつた。

「マスター、上から何か来ます！」

上から何が来るんだ？

上から？

「マスター、どうやら人間が落ちてきているようですね」

人間！？

「アーンヴァル、その人間の落下予測位置を教えてくれ」

「はい、南に10メートルほど先がそのポイントとなります」

「予測到達時間は？」

「はい、あと30秒ほどです」

ちいっ、そんなに時間がないか。

そう思い、俺は魔法の準備をする。

「GRAVITY TRAP MODE LOADED
重力制御、補助設定、起動」

「FLOATASSIST TRAPIBEALIZE
浮遊補助、高速変換」

そこまで唱えて、その落ちてくる人を目視確認する。

…見えたっ！

「RUNNING
実行！」

そつ言つて俺は力を解き放つ。

次の瞬間、落ちてきた人の落下速度は遅くなつたため、俺は両腕で

受け止める」ことができた。

「ふう、危機一髪だつたな」

まつたく、俺がここにいなかつたりじりになつてたんだよ。

そう思いながらその落ちてきた人の顔を見たのだが……俺は固まつてしまつた。

「ま、まさか、ファルコムさん?」

ファルコム。

ゲームギョウ界をドラゴンスレイヤー一振りで冒険している冒険者……のはず。

それが何で、空から落ちてきたんだ?

そんなことを考えていいたら、ファルコムさんが「うう……ん」といつて目を覚ました

「あ、気がつきました?」

「ああ、うん。って私は気を失っていたの?」

「まあ、そうですね。さすがに空から人が落ちてくるとは思つていませんでしたが」

「空から？……あ

ファルコムさんは、何か思い当たる節があつたようだつた。

「危なかつたですよ、もつ少しで地面に激突でしたから」

「あははは、私はいろんなものに守られてるみたいだからね。そんな簡単には死なないのさ」

突つ込んでいいのかなあ。「そういう人は、空から落ちてきません」つて。

「ありがとうございます。私はファルコム。見ての通り、しがない冒険家さ」

「俺はケイスと言います。貴女と同じよつて冒険者をやつています」

「へえ、冒険者か。私と同じよつな人がいてくれて、うれしいよ」

「俺も同じですよ、ファルコムさん」

まあ、冒険者（正確には片方は冒険家だが）同士だから、打ち解けるのも早かつた。

「そういえば、何で空から落ちてきたんですか？」

「実は、このはるか上空に、イクスという島が浮かんでいるんだ

俺は、咄嗟のこと」「え？」としか答えられなかつた。

そんなことを言つてゐるのがファルコムさんじやなかつたら、信じ

ていないうつ。

少しだけ沈黙が流れた後、俺は会話を再開した。

「それで、そのイクスって島はどんなところだったんですか？」

「信じてくれるのかい？」

「ええ、もちろん。俺だって行ってみたいですね、そのイクスと
いう島に」

「君は面白い人だね。こんな『太話を信じるなんて』

「『太話なんですか？』」「まさか！」

「フルコムさんによると、地上ではその島はイクスと呼ばれている
とのこと。行つたことがある人がいないため、『X^{イクス}』と名付けられ
たらしい。」

そして、フルコムさんはある塔に登り、最上階にたどり着いたとき
に光に包まれ、気がついたらその「イクス」にいた、と言うこと
だった。

そしてその「イクス」に住む人たちに、その島の本当の名前は「ア
ージュン」と言つことを教えてもらつた、と。

そして、その島を冒険中にモンスターに襲われ、島から落とされ、
地上に落ちてしまつたと言つことだった。

「まあ、信じるも信じないも君次第だけど」

俺の頭に、ひとつ的事柄が浮かんだ。

それは……ネタ元はイース、といつこと。

「そうですね。信じますよ、俺は

「本当だ？」

「ええ。だって、そつちのまづが面白こじやなーですか！」

そう言つて、サムズアップした。

「うん、違いない

「それじゃ、今度は俺が今回の冒険で経験したこと話をしてもいいですか？」

「ああ、他の人の話つてあまり聞かないからなあ

そつ言つて、耳を傾けてくれた。

そして俺は、^{いにしへ} プラネットユースで女神のネプテューヌと共に闘したこと、ルゥイーで古の戦闘機械、キラーマシンと戦つたことを話した。

「そんなに強かったのかい？そのキラーマシンってのは

「強い、なんてモンじゃないですよ。そんなのが数十体ですよ」

「あははっ。それは災難だつたねえ」

俺は「笑い事じやないですよー」と言ひ、話を続けた。

「まあ、どうにか封印できたからよかったですよ」

「ふうん。君も、面白い経験をしてるんだねえ」

「まあ、ファルコムさんほどじやないですけどね」

「ちなみにさ、今の話つて本にしても大丈夫かな？あ、私実は本を書いててさ」

「やつなんですか？」

俺はそう答える。

もちろん知ってるさ。

クリスティン漂流記はプランさんに読ませてもらつたからな。

「うん、それで、今聞いた話を書かせてもらえないかなあつて

「いいですよ、別に」

ファルコムさんは「ホント？」とうれしそうに言つていた。
でも、俺の冒険が小説でかかるなんて、何かむず痒いな。

そんなこんなで色々な話をしたあと。

「さて、それじゃ、名残惜しいけど」お別れかな

「ファルコムさん、さよなら」と言って、荷物をまとめ始めた。

と言つたが、バッグに入つていたものを元に戻しただけだけどな。

「ファルコムさん、どこかに行く予定が？」

「うーん、もう一度あの島に行きたいけど、塔に登りたくないからなあ」

……ダームの塔？

「俺は、ラステイションに向かってこる途中なんですよ。よかつたら、一緒に行きませんか？」

そんな俺の誘いにファルコムさんは「いや、私はいいよ」と答えた。

結構期待してたんだけどな。

「私は、一度実家に帰るよ。いいタイミングだし」

「実家って、どこなんですか？」

「プラネテコースだよ」

「へえ、そつなんですか。俺も今の旅が終わったら、またプラネテコースに行く予定なんで、もしかしたら会えるかもしませんね」

「そつだね。そのときのために、また新しい冒険をしないと」

俺は、「それじゃ、会えないじゃないですかー」と言つてツッコんだ。

その後、一人して「あはは！」と笑つた。

一人で笑いあつた後、ファルコムさんが「そつにえば…」と言つて鞄をまさぐりだした。

そして、何かを見つけると、それを俺のほうに差し出してきた。

「これか、イクスの洞窟の中で見つけたんだ。何に使うものかは分からんんだけど、あげるよ」

そう言つて、俺にそれを渡してきた。

それを受け取つたとき、アーンヴァルが胸ポケットから出して「マスター。これ、ラファールですよ」と言つた。

…お前、今まで出てきていの、何やつてんだよ。
ん？ラファール？

「…ラファールだつて！？」

「気に入つてくれたみたいだね」

「え、ええ」

ファルコムさんはアーンヴァルを指差し、「ちなみに、そちらは？」
と聞いてきた。

「コマイツは、アーンヴァルつていいます。サポートをしてもらつて
いる俺の仲間です」

ファルコムさんは「へえ…」と言つて、アーンヴァルを見ていた。
一方のアーンヴァルは、屈心地が悪そうにその視線に耐えていた。

「うふ、君の仲間のことだからとやかくは言わないよ」

「さて、それじゃお別れだ」

「はい、ファルコムさん、お元氣で」

「やつちもね。機会があつたら、また会おう」

そつと、俺達は別れた。

side ファルコム

ふむ、面白い人もいたもんだ。

色々な経験をしていくこともやつだけど、ああいつたものを仲間と
して連れていくとはね。

それに、また会いそうな予感がするから、そのときまでに私もまた
面白い話ができるよつ、冒険をしておひ。

そう思い、家路を急いだ。

... S A V E
s i d e ファルコム E N D

第14話 空から少女が落ちてきた（後書き）

とつあえず、はじめに今回用いたアイテムの説明をしておきます。

ラフラー

武装神姫のアーンヴァルの武装をすべて体させた飛行形態のマシン、と言えば分かりますかね？

ちなみに大きさは、アーンヴァルの大きさと同じため150cm位です。

（あくまで、アーンヴァル用の武装です）

さて、トマトファルムさん登場です。

ケイス「まだ、仲間にはならないんだ」

うん、でも再会のフラグは立ておいたよ？

ケイス「だけど、俺がアーンヴァルを持っているのを見て、どう思つたんだろうなあ」

反応を見る限り、『この変態…』とかではなくただけど。

ケイス「もしそれだつたら、死んでも死に切れん」

トマトで、次回はやっとカステイシヨンです。

ケイス「ノーラルとゴーリーとソーナ。これまで頑かつた…」

そういえば君、君の黒の姉妹大好きだったね。

ケイス「黒の姉妹言うな」

とこ「う」とで。

それでは次回、「黒の女神」でまたお会いしましょう

ケイス「ちなみに、ラステイションでは中の人ネタ禁止だからな
えー。」

第1-5話 黒の女神（前書き）

空から落ちてきた少女、ファルコムと別れラステイションを田舎す
ケイスとアーンヴァル。
彼らはラステイションを田舎し旅を続けていた。
さて、これがどうなることやら。

第15話 黒の女神

うーむ、わからん。

この間ファルコムさんからもらったラファールなんだが、何故か動作しない。

アーンヴァルに言わせると、「ちやんと反応は返つてくれるんですけどね」とのこと。

反応は返つてくれるのに、動いてくれない。

ファルコムさんにこのラファールをもらつた当初は、アーンヴァルが「これで私も戦闘に参加できます!」といつてはしゃいでいたのに。

何で動かないんだろうなあ。

「なあ、アーンヴァル」

「…なんですか、マスター」

「そう落ち込むな。そのうち、ちゃんと動くようになるだ

「…私は落ち込んでもなんていません。では、いつ動いてくれるんでしうが、ラファールは

ああ。もう取り付く島もない。

何でこうなつちまつたんだね?。

s i d e アーンヴァル

マスター、本当に申し訳ありません。

私はこんなことが言いたいわけではないのに。

何故か、口を開けばマスターを貶すかのような言葉が出てきてしまう。

私は一体、どうじてしまったのでしょうか。

あれ？ 段々と…から…だ、が、つい…

s i d e アーンヴァル END

さつきから、アーンヴァルの様子がおかしい。

今まで、あんなことを言ったことなんてないのに。

まさか、精神的ストレス？

…まあ、普通に考えてそんなことあるわけがない…とも言い切れないなあ。

「おーい、アーンヴァル。機嫌直して出て来いよ」

俺がそう言つても彼女は無反応。

ま、その「ひょいひょい」の顔を出すだろ。

side アーヴィング・ヴァル

『気がつくと、私は真っ暗な空間にいた。

『よつこじやこらつしゃいました、機械人形マシンヒューマン』

「誰ー？」

聞いたことのない声。

だけど、すいせい懐かしい気がする。

『懐かしい、ですか？私達は初めて会つのですけど

「えー？何で私が考えていることが分かるのー？」

『私はこの空間そのもの。ですから、手に取るよう分かれますよ、あなたが感じている恐怖感も、何もかも』

空間そのもの？意味不明。

私は、思考を巡らすのもバカバカしくなり、少しだけ冷静になつてみる。

「…で、あなたは誰なの？」

『あら、瞬時に冷静になつてしまわれた。やはり面白みがないです

ね、あなた方機械人形は『マシンドール

「誰なのか、…と聞いてるのですけど?」

私は少しだけ怒氣を含めて言つてみる。

『あら、怖い。私は…』

声の主はそこまで言つと、急に声を発さなくなつた。
その代わり、私の目の前にある意味見慣れたモノが姿を現した。
それは、あのラファールだつた。

『お分かりですか?』

「何で、貴女が意思を持つてゐるの?」

『そのようなことを、私に聞かれましても、判るわけがないじゃな
いですか』

彼女(といつていいかは定かではないが)は、そう飄々と答えた。
まあ、もちろん聞けるとは思つていない。

「それで、私にどうしろと言いたいの?貴女が私に成り代わるの?」

『それはそれで魅力的な提案ですが、違います』

『だつたら、何?』

『貴女に、わたしの力を受け取つていただきまます』

わい、そろそろラスティイションか。

「つむぎさんとかコニーちゃんを生で見られるんだ。

うん、この世界に来てよかったです。

…とその前に。

「アーンヴァル、ラスティイションに着いたぞー」

俺は、アーンヴァルにそう呼びかけてみる。

…無反応。

なぜ？

不思議に思い、胸のポケットに手を突っ込んで、アーンヴァルを出
そうとしてみる。

あら？ また無反応？

いつもだつたら、『いきなり手を突っ込むなんて、何でデリカシー
のない…』とか言つて怒るはずなのに。

そして、出してみたのだが…。

「スリープモード？」

目が単色の状態となつており、焦点が合っていない状態だった。
今まで、こんなことになつていいことはなかつたのだが…。

side アーヴィング

「あなたの、力?」

『はい、私の力です』

「拒否権は?」

『すいません。もう形振り構つていられないんです』

そう言って、ラファールが私の方へ向かつてきました。
私にぶつかる寸前、彼女は

「一度とあんな悲劇が繰り返さないよう、力を貸してください」と
だけ言つた。

そして彼女が私の中に入り始めた瞬間、理解した。
彼女の力、そして、私のこれから戦い方。

『本当に、無理矢理で申し訳ありません』と彼女は詫びた。
そして、『私はすぐに消えますから』とも言つていた。

「何で、私なんですか?」

『貴女が、一番波長が私に近かつたから』

「私が悪用するとかは、考えなかつたんですか?」

『機械人形^{マシンゾーラ}にそんな器用な真似はできないと考えました』

「どうこいつですか?」

『貴女のマスターは、そんなことができる方ではないでしょ』

『ま、そうですね。』

『私のマスターに限って、この力を悪用するとかは考え付かないでしょ』

『信用してくれているんですね』

『違います』

『え、それじゃ何で?』

『信用ではなく、信頼です』

その言葉を最後に、彼女は言葉を発さなくなつた。
おそらく、先ほど言ったとおり、消えてしまったのだ。

そして、辺りが眩い光に覆われ始めた。
目覚めの時間、ですね。色々な意味で。

私は、その光に身を委ねた。

side アーンヴァル END

「おい、アーンヴァル。どうしたんだよ

「……」

「返事じりよ。おこ、じつじあまつたんだよー。」

アーンヴァルに声をかけても反応がない。

それに、一緒に入れておいたラファールもなくなっていた。
もしかして、あのラファールって呪いのアイテムだったんじゃない
だろうなあ。

もしやうだつたら恨むば、ファルコムさん。

俺は自分から進んで貰つたのに人のせいにじょとじしていた。

「ふああ。。。あ、マスター、おはようござります。じつせられたん
ですか？」

「アーンヴァルが田を覚まさねえんだよ。じつすればいじと思つ?
アーンヴァル…つて、あれ?」

「え? 私がじうかしました?」

「田を覚まさねえから、じつじよつかと思つたじやねえか

「心配…してくれたんですね?」

「…まあな。俺の唯一のパートナーだからな」

アーンヴァルは「えへへ」と笑いながら、俺の頭に飛びつこう
きた。

さて、ラステイションの協会についたんだが…。

「やつぱり、入らないとダメかな？」

「ソレまで来たら、覚悟を決めましょ！」よ、マスター」

アーンヴァルの言葉に背中を押され、おれは教会のドアを開けた。

「おや。誰かと思えば、空から落ちてきた少女を助けたり、人形を田の前にあたふたしていたケイス君ではないかな？」

もうやだ、コイツ。

やつぱり間者を潜ませてやがったか。
だつたら、いっちも。

「おや。誰かと思えば、女だとバレないようサテンを巻いている
神富寺ケイさんですか？」

「なつ、何で初対面の貴方がそれを知っているんだっ！」

俺は涼しい顔をしつつ、

「おや、やつぱりそうだったか。見事にプラフに引っかかるてくれ
ちゃって」

と言つておいた。

『世の中、情報がすべてを制す』でしたよね、ケイさん。
いっつには、原作の知識があるんですよ。

ケイさんは「くつー」と言いながら、じりりと睨んできていた。
あ、やりすぎちゃった？

「ケイ、貴女そんな顔もできるのね」

そう言いながら現れた人影。

黒髪に赤い瞳の人だつた。

「はじめまして。私はノワールよ」

「私は…」

俺が自己紹介を始めようとすると、ノワちゃんがそれを止めた。

「ケイから聞いて知つてるわ。ケイス、よね？」

正直、うれしいけどさあ。
自己紹介くらいさせてよ。
まあ、気を取り直して、と。

「ええ。名前を覚えていただいているとは。恐悦至ご…」

と言おうとしていたのだが、また途中で止められた。
くきこ～つ。

「ねえ、ケイス。そういう物言い、どうにかならない？正直、ケイ
だけでおなかにいっぱいなのよ」

「ノワール！？」

「…！」んな感じでいいですか？ノワールさん

「ん～、さんも要らないわね。ノワールって呼び捨てでいいわ

「わかったよ、ノワール。これで？」

「OK...」

「…！」の、こんなにはつちやけてたっけ？

「それでさ、ケイス

「なんじょ

「一回だけでいいから、戦つて…」

Why!?

「何で！？」

「ケイから聞いてね、強そうだなって思ったのよ。でも、実際に貴方を見たらそんなに強くなさそうに見えるじゃない？」

悪かつたっすね。

「だから、一回戦つてみたいのよ」

「ケイス、…さっきの暴言は水に流そう。だから、ノワールと一回でいいから戦つてくれないか？」

ケイはそう言った後、小さな声で「本当に頼む。じゃないと、暴れて手が付けられなくなるんだ」と呟つた。
お前も苦労してるのな。

「わかった。ただし、条件がある

「条件?」

「ああ、女神化は絶対しない」と

「貴方、私が女神だつて知つてたの?」

「まあな。ネプテューヌやブランから聞いてたからな

「わづか…でも嫌

何ですと…?

「ちよ。それ、勝負にならないじゃん

「いいじゃない。ねえ、やーるーおーるー

「良くねえよ。ま、しかし何だ。女神と戦つてみるのも面白こかもしれないな。

「分かつた。じゃあ、条件変更だ。俺が勝つたら、ノットチャーンって呼んでいいか?」

「いいわよ、どうせ私が勝つんだし」

「うしつ。だつたら、気合入れるか。

そう思つていると、アーンヴァルが話しかけてきた。

「マスター、新しい武装があるんですけど、今回試していいですか

?」

おお、いいねい。

「 よりしへ頼んだ」

「 はいー。」

「 それじゃ、人気がない廃工場でもやりますか」

「 ちやんぱりいつづけ」と、俺達を案内すべく歩き出した。
そして、瓶と出るか凶と出るか。

..... SAVE

第15話 黒の女神（後書き）

ケイス「せんせー。タイトル詐欺になつてまーす。タイトルが『黒の女神』なのに、ノワールさんが最後くらいしか出てませーん」

大丈夫だ、問題ない。

ケイス「さて、ど。何か、アーンヴァルがすごいことになつているんだが」

本当はそこだけで1本書くつもりだったんだけどね。
早くノワちゃんを出したいがゆえにこうなつた。

ケイス「で、新しい武装つてのは何？」

秘密。

でも、大体予想通りじゃないのかな？
だってさ、アーンヴァルの中にラファールが入つたんだよ？

ケイス「判るか、そんなモン。ちょっとひねくれて考えると、アーンヴァル自身が武器になる？」

そつかもしれないねえ。

とこうことで。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ち」でもたお会いしまじょう

第16話 ノワールとの一騎討ち（前書き）

ラステイションについたケイスとアーンヴァル。
彼らは、ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られて
しまった。
さて、これがどうなることやら。

第1-6話 ノワールとの一騎討ち

さて、ノワちゃんと戦うために廃工場とやらにやつて来たわけだが。

「なあ、アーンヴァル。廃工場つて戦いにくくないか？」

「大丈夫ですよ、多分。それに戦うの私じゃないですし」

Ｚ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！

「貴方達、余裕あるのね」

そう言いながらジト目で見てくるノワちゃん。
そんな目で見ないでくれ。

「さて、それじゃそろそろ戦^やらない？」

そう言って、剣を構えるノワちゃん。
絵になるな……つていかんいかん。そんなこと考えてる場合じやなかつた。

「女神化はしなくていいんですか？」

「戦つてる最中で切り替えられるしね。そんなこと気にしなくとも
大丈夫よ」

「ついでにいながら、剣をぶんぶん振り回していた。
…よっぽど戦いたかったのね、この人。

「それじゃ、行きますか。アーンヴァル、剣を」

ギュリーノス

次の瞬間、俺の右手にギュリーノスが姿を現した。
それを手に取りながら、「了解です」と答えた。

では、行きますか！

side 一二

お姉ちゃん達のいる廃工場から少しあなれた高台。
私はそこにいる。

ケイからお姉ちゃんと旅の冒険者が模擬戦をする、と聞いたからだ。
近くにいたら、迷惑をかけちゃうから、遠くから見ることにした。
…もちろん、双眼鏡を持ってきたわ。悪い？

廃工場に双眼鏡を向けると、ちょうど始まるところだつたらしく、
2人が向き合つて剣を構えていた。

まあ、お姉ちゃんに勝てるわけないし、一方的な戦闘になるんだろう
うな。

あの旅の冒険者ってのも災難よね。

ま、せいぜいがんばつて。一応応援しておくわ。

side 一二 END

はじめ、と言う人がいるわけもなく、俺とノワちゃんの戦闘が始ま

つた。

といふか、剣をお互いに向けて、少ししたらこの人斬りかかってきたよ。

まあ、大振りだったから、後ろに跳んで簡単に避けられたが。

「ま、このくらいい避けられるわよね。それじゃ、次行くからね！」

そう言つて、こつちに突つ込んでくる。
そして上から剣を振り下ろした。

ギインと音がし、どうにか剣を受け止めることができた。
だが、今の衝撃でまだ手がしびれてる。

油断したな、マジで。

一撃目は通常様子見だろ？
まさかこんなに力を入れてくるとは。

「あれ、もう限界？」

「ンなわけあるか！ちょっと油断しただけだよ」

そういうながら俺は少し間合いを取り、呼吸を整える。

「もう、だつたらいいわ！」
そういうながらまた斬りかかってきた。
今度は横から。

キイイン。

今回は、危なげなく止められた、ハズだった。

「甘あい」

そう言いつつ、ノワちゃんは鐔の方に剣を滑らせた。
俺は咄嗟に剣を弾き、その攻撃を終わらせた。

「うーん、咄嗟の判断力は合格ラインギリギリ、かな？」

「うひうひと、今度は剣を構えて動かさない。

…誘つてる？

まあ、罷でもいいかと思い、今度は俺の方から攻めることとした。
上から、横から、袈裟懸け、逆袈裟で剣を振つてみるも全部止められた。

「へえ、結構攻撃力あるんじゃなー」「

そう言つて、剣をぱりぱりさせていた。

side ノワール

あ、危なかつたあ。

剣をちゃんと持つていたし、ケイス君の剣も見えていたからどうにか捌けたけど、油断してたらホントにマズかった。

まったく、私とそんなに変わらない背丈で何て力を持つてるのよ。

ひつも優位に立てたのに、これじゃ笑いものじゃない。
ひつなつたら…。

side ノワール END

「さて。それじゃ遊びはおしまいね。そろそろ本気でやらせてもら

「うわ

ですよね。

つてゆーか、今の力量差で女神化されるとマズイんじゃない?

「アーンヴァル、そういうば新しい武装があるとか何とか言つてたな、前回」

「前回じゃなくて、やつხです…」

「うそ、こいつの際どっちでもいい。それつて、女神化したノワちゃんに対抗できる?」

「多分、ですが」

「よし、それをやつてみるか。…ちょっと不安が残るが」

「ノワールせーん、女神化するんですね?」

「わが君たちのつもつよ。怖気づいた?」

「まあ、怖いのも確かなんですが」

言つた瞬間に、ノワちゃんのコメカミがピクつとした。
やべえ。怒らせたかも。

「…冗談です。こっちもちょっと準備したいんですよ。ちょっとだけ待つてもらつていいですっ!」

「ダメ…といいたいところだけど、いいわ。それも見せて欲しいし

ね

ところことで。

「アーンヴァル、それじゃその武装をよろしく頼むー。」

アーンヴァルはそれに對して「はーーー」と冗談よく返事をした。

side アーンヴァル

さて、それじゃ行きます。
わたしたちの新しい力!

「召還陣開放」

私がそう言つと、空に召還陣が作成された。
そして続いて、

「召還、ラファール」

その召還陣からラファールを召還した。
大きさは、私用のものではなく、もっと大きなもの。
つまり、マスター用のラファール。

「アーンヴァル。どういふことだ、これ」

マスターがそう聞いてきたので、私はこう答えた。
「あのラファールが力をくれたんです」と。

そして、私はそのラファールの方へ跳躍する。

：私は空を飛べませんから。

そして、仕上げの言葉。

「一融合合体！」

こうして私はラファールと融合した。^{ヨーリン}

side アーンヴァル END

まじかよ。

そう思いながら、空のラファールを見上げる。確かに、すごい武装だわ、これ。

side ノワール

：ナニコレ。

なんで、人間がこんな力を持つてるのよ！

女神化しても、こんなので攻撃されたら無事には済まないわ。

私は頭を抱えた。

side ノワール END

『マスター、驚くのはまだ早いですよ』

頭の中に、アーンヴァルの声が響く。

『今度は、マスターの番ですかね』

その言葉の後に、頭の中に言葉^{キーワード}、^{ユーセージ}使用方法が送られてきた。

「おーおー、マジかよ」

『マジです』

「男は度胸、一丁やつてやるか！」

「疾風よわれに力を」とえん！疾風合体^{リフューリンビーネーション}

俺がそう言つと、ラファールは俺の方に近付きながら二つの塊に分離し、装着された

2つは腕にガントレットとして。

2つは足にサブスラスター兼ガーダーとして。

1つは背中のスラスターおよび前面のガーダーとして。

1つは右腕のマウントウェポンとして。

1つは左腕のマウントウェポンとして。

「お待たせしました。これで、じゅうの準備は完了です」

side ノワール

き、聞いてないわよ、こんなこと。

まさか、こんな奥の手を隠していただなんて。

あとで、ケイを問い合わせないといけないわね。

s.i.d.e ノワール END

s.i.d.e ニ

何あれ。

何で人間にあんなことができるの！？
意味が分からぬわよ！

s.i.d.e ニ END

「え、ええ。それじゃ続きをやりましょっか」

そう言つたノワちゃんの体は震えていた。
まさか、武者震い？
これだからバトルマニアは。 -) <)

.... S A V E

第1-6話 ノワールとの一騎討ち（後書き）

「うひひほこました。

と書つことで、まずは初出の紹介から。

「ラフアール（つて前々回も出てたな）

元々はアーンヴァル用の武装を変形・合体させた支援機。この小説の中では、ケイスの支援機となります。

アーンヴァルが異空間から呼び寄せ融合するににより、ケイスの支援を行うことができる。

融合中ももちろん意識はあり、ココロシートの操作やいつも通りの武器還をメインに行います。

基本的なスペックは原作と同じ。

違つ点は、右腕にマウント式の武器（粒子ブロスター）がついているところ。

左腕のマウント式武器は原作通りランチャーワークスで。

この武装の名称についてはまだ検討中。

ちなみに、合体方法は2種類あり、今回の合体はペガサスモードと書つひしこ。

ローレット：ファンネルみたいなもの、とお考へください。

粒子ブロスター：建物等障害物に遮られずに目標に当たられるハンチャー、とお考へください。

ケイス「なんだこれ」

「うん、まあそういうなるよね。

ケイス「つか、合体のところが適切か、それとも」

しうがないだうが。

詳しく述きたいけど、^{フィギュア}資料が家にはないんだよ。

ケイス「小説の資料として買つたら?」

考えたけど、さすがに約2万をポンと出す勇気はない。

ケイス「にしても、相当なパワーアップじゃないか、これ」

そうだね。

たぶんこれで女神化状態の方々にケンカ売つても引き分けに持ち込める。

ケイス「引き分け?」

そ。引き分け。

話の都合上、そうなつた。

ケイス「深くは聞かないが、どうせそのうち分かることだからな」

といふことで。

それでは次回、「ノワールとの一騎討ちその2」でもまあいしまじょう

ケイス「ま、今回決着つかなかつたからな」

それでは。

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化ver）（前書き）

ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られたケイス。新しい力のお披露目も終わり、後はノワールの女神化を待つのみ。さて、これからどうなることやら。

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化ver）

「それじゃ、いつも女神化させてもらひやな」

そう言つて力を集中し始めた。

「見せてあげる。女神の力つてモノを！」

そう言つと、ノワちゃんを中心に光の柱が進る。光が収まつたとき、そこにはノワちゃんの姿はない。変わりに、黒トレーデマークとした女神が立つていた。

「ブッロセッサゴニット、装着完了！・ブラックハート、推参！」

いやいやいや、推参じゃないから。

多分言いたかっただろうなあ、推参つて。

「さて、それじゃはじめましょつか

そう言つて、左腕のランチャーの照準をブラックハートに合わせる。それと同時にアーンヴアルにココレットの制御を頼んだ。

『了解です、マスター』

その声と同時に脚部ユニットの先端についていたコレットが宙に放された。

そして、俺の周りを回るように巡回していた。

「こつでもこいわよ。女神の力を思い知りなさい！」

そつと、ブランクハートは斬りかかってきた。

(「アーンヴァル、ココレットで彼女に攻撃。その隙に俺は彼女の後ろに回つこむー。」)

『はい、了解です！』

斬りかかってきたブランクハートにココレットを向かわせ迎撃させ、そのうちに俺は建物の影を利用してつつ彼女の後ろへ回り込む。

「これで、どうだ！」

俺は彼女の後ろからランチャーを打ち込んだ。

今はココレットの対処に追われてこっちには気づいていないはず。

だが。

「ふふん。銃なんかにせられる私じゃないわ

左腕だけで防御されてしまった。

side 一一

たしか、ケイスって言つたつて、あの冒険者。

お姉ちゃんが剣しか使わないと思つて銃のみで応戦しているの？

だとしたら、相当な間抜けね。

あの障害物だらけの場所で銃で挑もうなんて。

動きも制限されてしまうし、障害物を盾として使うことができる以上、彼に勝ち目はない。

だけど、銃使いの私としては、勝つてもらいたいってのも正直あるのよね。

あー、もー、どっちを応援すればいいのよ、私は！

side 二 END

移動に時間がかかっちゃった以上、防衛されることも予想できたが、まさかこれほどとは。

そんな時、アーンヴァルが『何でスラスターを使わないんですか?』と話しかけてきた。

…忘れてた。

だつたが。

(「アーンヴァル、スラスターの制御をこいつに」「元気にしてあります」)

『こんなこともあるうかと、マスターの意思で自由に操作できるようにしてあります』

…先に言え、先に。
まあいい。

これで、彼女に高速で近づけるわけだ。

そこで、脚部スラスターを少しだけ吹かし宙に浮いた状態にした。

「さて。じゃあこっちも本気で行かせてもらひや」

そつと、スラスターの出力を全開にする。
…正直、見誤っていた。あそこまでスピードが出るとは。
気づいたときには、銃口をブラックハートに当てている状態だった。

「！」

「チェックメイトー！」

そつ言ひて、俺は再びワントゥーチャーを打ち込んだ。
今度はゼロ距離射撃。
当たらないはずがない。

「…やるじゃない」

そつ言いながら、俺を睨みつけてくる。
よく見ると、そつと撃つた場所を押さえつけて、痛みに耐えている
ようだった。

side ノワール

いつたあ…。

今何が起つたのよ。

気がついたらケイスが田の前にいて、銃を発射された。

コレじゃ、いくら距離を離してもダメね。

だったら、建物の影に隠れて様子を見るしかないかしい。

side ノワール END

俺は、アーンヴァルにココレットを回収させた。

「さて、立場が逆転ですよ。降参します?」

「誰がよつー」

彼女はそう答えると先ほどの傷を押さえながらかなりの速さで移動していった。
ですよね。

多分俺でもそういうわ。

どこかの建物の陰に隠れて、回復を待つ戦術。

でも、それは間屋が卸しません。

(「アーンヴァル、ココレットでブラックハートの潜在場所の座標特定を頼む。あ、できれば見つからないようにな」「元気だよ」)

そう言ひうと、ココレットは上空に浮かび上がり、ブラックハートの搜索を開始したようだった。

さて、それじゃあ見つかるまでチャージをしておきますか。
そう思い、粒子ブラスターのチャージを開始した。

『マスター見つかりました。今、座標を送ります』

そうアーンヴァルの声が聞こえた後、頭の中に座標情報が流れ込んできた。

さて、と。

俺はその座標に銃口を向ける。

「粒子ブラスター、発射!」

s i d e ノワール

「粒子ブラスター、発射！」

そう、ケイスの声が聞こえた。

まったく、何を考えているのかしら。

こんな障害物の多い場所で銃を撃つても、当たるわけないじゃない。

そう思っていたときだつた。

地面が揺れている？

何だか波が押し寄せているかのような振動だつた。

波？

そう思い至つたとき、私の足元で青白い光が走つた。

そして、私を包囲するかのように青白い光の壁が出来上がつた。それは段々と私の方へ近づいてくる。

「きやあああああつ！」

s i d e ノワール END

「きやあああああつ！」

よし、当たつたみたいだな。

さて、これからどうするか、と思い悩んでいたとき、アーンヴァルが話しかけてきた。

『マスター、追撃の必要はなさそうです。今の一撃で決しました』

えええええつ。

だつて、まだ序盤じやん。
ゴーパーンモードとかグランーポーレとか、やりたい」とまだたくさんあつたの!」

『今は我慢していくだれい、マスター』

アーンヴアルが冷たい。くすん。

side ニ

お姉ちゃんが、負けた！？
それも、銃使いに！？

もしかして、あの人に銃の使い方を教えてもらひれば、お姉ちゃんより強くなれるのかなあ。

うん、ラステイションに戻る所で声をかけてみよう。
もしかすると、もしかするかもしれないし。

でも、お姉ちゃんが反対するかなあ。

side ニ END

武装したままノワちゃんがいると思われる座標に行つてみると、確かにノワちゃんが倒れていた。
女神化が解除されて。

「ノワちゃん、大丈夫？」

そう言いながら頬をぺちぺちする。

何か、顔中がぴくぴくしているが、起きる気配まったくなし。さらにぺちぺちしてみる。

ノワちゃんは「うん」といながら、目を開けそうになっていた。もう少しかな？

「ノワちゃん、大丈夫？」

頬のぺちぺちを繰り返していたら、バツと飛び起きた。

「あ、あれ？ 私、倒れてた？」

「うん、倒れてた」

「あ…負けちゃったんだ、私」

そう言つと、ノワちゃんは落ち込んでしまつた。

まあ、無理もないな。

普通の人間に負けちゃったんだから。

それも女神化して。

「負けたから何だつて言つのさ」

「え、だって負けちゃったのよ、私。私を信仰している人たちに申し訳なくつて」

あ、ノワちゃんってプライドの塊だったなあ、そういうえば。まったく、扱いにくいことこの上ない。

「ね、ノワちゃん。負けなこととその信頼をたまごと約束してるので？」

「約束はしないわよ」

「だつたらこじちゃん。もつと、気楽に行ひつけ

「でも…」

「だつたら、俺の負けでいいや

「え？」

「俺の負けでいいって言つてるんだよーはい、「コレで決定」

とりあえず、廃工場からラステイションに向かっているんだが。
沈黙が…。

俺、何か悪い」とした？

side ノワール

ケイスのことが分からない。

あのとき、何でんなことを言つたのか。

『俺の負けでいい』

何で、そんなことを言えるんだろう。

勝利を望んでないの？

うん、せっぱり聞いてみよう。

s.i.d.e ノワール END

「ねえ、ケイス。ちょっと聞きたことがあるんだけど」「ん? 何?」

「せつめい、『俺の負けでいい』って句で言つたの?」

「ああ、そんなことか。だつてさ、ノワールは負けられないんだろ? だったら、俺が負けるしかないじゃん」

「でも……」

「それさて、女の子は落ち込んだ暗い顔よりも笑ってる顔の方がいいと思つたからさ」

「そういうとまた俯いちました。

こつちは恥ずかしいのを覚悟して言つたのに。」

そんな時、「あの、ちよつといいですか?」という声が聞こえてきた。
声のするほうを見てみると、そこにはユニーがいた。

「あの……つむあれ。お姉ちゃんも一緒に顔が真っ赤だし」「

「ななななな、何言つてるの、ユニー。」
意味がまったく

分からなーいわ

あ、俯いてたのは恥ずかしかつただけか。
あー、よかつた。

……つて、なんでユニーがここにいるんだ?

「君は?」

「あ、すいません。私、ユニーって言こます。そこのお姉ちゃんの妹
です」

なんか、本編と性格が違つた。

「それで、そのユニーちゃんがどうしたのかな?」

「单刀直入に言つます。師匠と呼ばせてもらひつてかまいませんか?」

「し、師匠?」

.....SAVE

第17話 ノワールとの一騎討ちの2（女神化ver）（後書き）

ところが、ノワールをブッ倒してフラグを立ててみました。

ケース「何でフラグを立てる必要がある」

実は、うれしいんじゃないのか？

ケース「…ノーメントで」

ところが、最後にゴーを出してみましたが。

ケース「本当に本編と性格が違つた」

まあ、多分今はいやんこ被つてただけですよ。

ケース「そこですか」

ところがと

それでは次回、「師匠？」 でもたお会いしましよう

ケース「俺はゴーの何の師匠になるんだ？」

銃のだる、参考。

第1-8話 師匠？（前書き）

ラステイションの女神であるノワールにケンカを売られ、ケイスはそれに勝利した。

そして、ラステイションへの道程でユニから師匠になつて欲しいと頼まれた。

さて、ケイスの選択はいかに。

第18話 師匠？

「監匠と呼ばせてもらひてかまいませんか？」

ユニーが俺に向かつてそう言つてくる。

ふむ、おそれくべにいかで俺達の戦いを見ていたか？

「師匠つて呼ぶのはかまわないけど、何で？」

「強い人に師事したいって言つのは当然ですー。」

うん、間違いない。

多分、どこかで見ていたんだな。

「だつたら、お姉さんの方が適任じゃないのかな」

「お姉さんは、貴方に負けちゃいましたし。それに、私の武器はコレですから」

そういうつつ、ユニーは空間から銃ライフルを取り出した。

へえ、ユニーはもつやういうことができるのか。

「へえ、ライフルか」

「はい。お姉さんは剣が主体ですから、教えてもらえません

「ちなみに、どんなのが使えるんです？」

「わ、私だって飛び道具くらい使えるわよ」

「ちなみに、どなんのが使えるんです？」

「えっと、剣に鬪氣を集中させたそれを打ち出したり、鬪氣を集め
て宙に浮かせてそれを銃で撃つて破裂させて攻撃するとか」

「そいつって、どうだーとばかりに胸を張るノツヅケなん。
デスペラードとスケイツターオリオンか。
つて、それ前作の技ですか!」

「ね?お姉ちゃんじゃダメでしょ?」

「ああ、うそ、やつだね。これは認めざるを得ない

「え?え?私、何か変なこと言つた?」

「ノツヅケんま、分かつていなによつだ。
それは、銃の技じゃない。

「とこつことじで。よろしくね、師匠」

「何が『とこつことじ』なのか小一時間聞いて詰めたいわけだが。

「いや、まあ師匠と呼ぶのはいいが、何も教えられんべ?」

「え?」とヨーは不思議そうな顔をする。
まあ、何か教えてもらえたと思つたんだひひ。

「だつて、お姉ちゃんと戦つて勝つたのよね?」

「まあ、一応な

俺がそのままいつつ、ノワちゃんが苦笑いになる。

「一応?」

「ああ、一応だ。あの勝負は、ノワールの勝ちつけてこなっている」

この言葉に、ユニーが激しく反応した。

ユニーは「あの状況で、お姉ちゃんの勝ちつけてこなして、「と喧

つて、ノワちゃんに突っかかった。

「え、えーとね、私が負けられなって言つたら、勝ちを譲つてくれたの。でね、私は…つたほうが…って言つてくれて（『じょじょ』）」

そつ言いながら、ノワちゃんはまた顔が赤くなつてこつてこつてこつていうか、なんていう羞恥プレイだよ、これ。

「へえ、じゃあ戦いは師匠の勝ちで、勝負はお姉ちゃんの勝ち?」

「わくわくないけど、まあいいわ。」

ユニーはつ言いながら、何か的の準備をしてくる。

「何をやつてるんだ?」

「的の準備ですよ。私のウデを見ておこしもいろと黙つて

そう言つての的の準備が終わったのか、少しほなれたといふでライ

フルにチャージ始めた。

ああ、チャージって女神化しなくともできるんだ。

「姫匠、それじゃ見ていてください」

そう言って、ライフルを構えた。

だが、なかなか発射しない。

「どうして発射「すいません、ちょっと黙つてもいいですか
? 気が散ります」…」

少しした後、ライフルのトリガーが引かれ弾が発射されたのだが、
中心からかなりずれたところに着弾している。

「ちょっと、気が散っちゃったみたいですね」

「ひとつ、教えてくれ。君に射撃を教えたのは誰だ?」

「ケイよ。彼女に言われたのよ、よく狙えって

ちょっと氣になるな。

そう思い、横にいるノワちゃんに声をかける。

「ねえ、ノワール?」

「ひやいつ」

…なにを驚いてるんだよ、そんな!。

「どうしたの? ノワール」

「ど、どうもしないわ。それで、何？」

「ヨーヒトセ、運動神経よかつたつする？」

「つけんは少し考えてから」「ーん、悪くはなこと細かわよ。あれでも、女神候補生だし」と言った。
まあ、そうだよな。

「なあ、ヨーヒ

「向でじゅつ、歸

「ちよっとや、早撃ちをやつてみよつか、あの的に向かって
やつて、やつての的を指差した。

「え？ 向でまた」

「ひとつだけ、教えておいつと細ひね

「でも、早撃ちだとよく狙えないから外れるんじゃないの？」

まあ、普通はやつられるよな。

でも、本当は逆。

初心者とかの場合には、的によつとして筋肉が緊張して当たらなくな
ることが多いわけだ。

だから、早撃ちとかで緊張していない状況を作つてやれば、当たる
確立が上がる、はず。

「だから、狙わなくていい。当たればいいんだよ。戻らせてみ
な

「分かりました、師匠！」

そう言って、ライフルを下に向ける。そして、そこから肩の位置まで上げて、トリガーを引く。当たるよじに調整を加えてから。

今回の弾は、ど真ん中を射抜いていた。

「中心に当たりましたよ、師匠！」

ユニーはやつ言つて喜んでいた。
うとうん、よかつた。

当たるよになつたのがうれしいらしく、ユニーはそこに残つてまだ撃つていくと言つていた。

だから、俺とノワちゃんは先にラステイションに帰ることにした。

「ありがとね、ケイス」

急にノワちゃんが俺にお礼を言つてきた。
俺、何もしてないんだけどな。

「ノワール、何のことだ？」

「あの子のうれしそうな顔、久々に見たのよ。いつも、苦虫を噛み潰したような顔をしていたから」

「なんだ、そんなことか。アレはさ、俺が昔人から言われたことを

「言つただけだよ

まあ、嘘は言つてない。

弓道をやつてゐるとき、一度を過ぎた緊張は災いにしかならないつて教えてもらつたからな。

「それでもよ。なんだかんだ言つて、あの子の師匠になつちやうのかな、ケイスは」

「それはないよ、ノワール。俺はまだ、旅の途中だしね。それに、そろそろワーンボックスに行こうかと思つてゐるから」

ノワちゃんは、驚いたような悲しきようなそんな顔で「えつー!?」とつぶやいた。

「それじゃ、教会に行つて荷物を持つて、そろそろまた旅に出るよ」
そう言つて、教会へ向かおうとした。
が、何者かに服を引っ張られ、進むことができなかつた。
まあ、犯人は分かつてゐるけどな。

「ノワール？」

side ノワール

ケイスが、どこかに行つてしまつ。

そう考へていたら、気がついたら私はケイスの服を引っ張つてゐた。

「…ノワちゃんって呼びなさいよ」

一番初めの約束。

戦いに負けたら、『ノワちゃん』と呼ばれる約束。
そして、私は戦いで敗れた。

「え？ だつて、俺は勝負に負けたから…」

あなたは負けてない。

優しいあなたはプライドを捨てられない私に表面上の勝ちを譲つてくれただけ。

「そんなの関係ない。これは私の意志。それに、私は戦いで負けているのよ。あなたは、そう呼ぶ権利があるわ」

私は…多分ケイスのことが好きになりはじめている。

「ケイスは、私のこと嫌い？」

side ノワール END

「ケイスは、私のこと嫌い？」

なんで、そういう話に行く？

まあ、もちろん嫌いなわけがない。

どつつかと言えば、好きな方に入るだろう。

「嫌いじゃないよ、ノワちゃん」

そう答えた俺は急に恥ずかしくなり、ラステイションへの歩を早めた。

ラステイションの教会。

やつとついたが、ここではたと氣づく。

まさかとは思うが、わざまでのやり取りはケイの耳に入つてないよな？

入つていないと願いながら、教会の扉を開けた。

「…これはこれは、女神を落としたケイスさんではないですか」

耳に入つてた。

「いや、すぐに発とつと思つて、荷物をとつに来た次第で。あれ？
俺の荷物は？」

「これのことですか？」

そう言いながら、ケイが鞄を持ち上げる。
紛れもない、俺の鞄だった。

「やつやつ、それ。それをこいつに

「嫌です。とりあえずどうこうとか説明してもらつてから処遇を
決めます」

そんなちゅうどいタイミングのときに

「ただいま、ケイ。ケイス帰つて来てる？…つて、いたー！」
ノワちゃんが帰つてきやがりました。

「おかえり、ノワール。今、ケイスを問い合わせているところだから
ちよつと待つてくれ」

ケイのやの葉に、ノツカちゃんが顔色を変えた。

「じいじい」と・ケイ。」とと次第によつては無事では済まれないわよ~。」

「こや、ノワール。ケイスが君を落としたとの連絡があつて、その真偽を……」

「何のために?ねえ、ケイ。そんなにハツ裂きになりたい?」

ノツカちゃんが、低い声色でやつて言つた。

怖え。

「こや、やんなことは。でも……」

「でも、じゃない。今度ケイスにやつてじみつけてしまつたり……」

やつて二いつと笑つて

「わ・か・つ・て・る・わ・よ・ね?」

「あ、ああ。悪かつたね、ケイス。引せ止めてしまつて」

やつて、鞄を俺に渡してきた。

そのとき小声で「さすがにボクも命が惜しいからね」とだけ言つていた。

さて、これで出発かな?

「まつたく。ケイも気が小さいんだから」

やつてながら、ノツカちゃんはいりゆうと笑つた。

なんでも、やつれの奮動は一撃打ったとまつてこらんだが。
とても諦められた。

「また、会えるわよね？」

「やうだね。いつかまた、遊びに来るよ、ノホール
ノツカヤンガす」へ不機嫌そうな顔をする。

あ。

「いあん、ノツカヤン

「ん、よひじー

「ニーナンシマ、お別れ言えなくじーあん、つて書つておこへ

「ええ、分かったわ

そして俺は鞄を背負こなおした。

「じゃ、またね、ノツカヤン

「ええ、今度会うときは楽しみにしてこねわ
「さめこへ

そして、俺は空港へ歩き始めた。

空港へついてチケットを買おうとしてこんなとき

「歸匠へつ

とゴニの声がした。

「し、歸匠、エリートですか？」

「ローンボックスに行くんだよ」

「もっと、教えて欲しい」とがこつぱこあるんですけれど

「俺が教えることは何もないよ。それに、後は君のお姉さんが教えてくれるよ」

「お姉ちゃんが？」

「もうや。この世界に、剣士はすこない。そして、君のお姉さんは凄腕の剣士だ」

「そんな剣士を相手に、練習ができるなんてラッキーだよ」

「でも、お姉ちゃんはまだたく当たりないし」

「早々当たるもんじゃない。だからこそ、技術を磨くんだ。そうすれば、いつかは当たるようになる」

「あと、俺は師匠でもなんでもなこと。だから、師匠って呼ばなくともいいよ」

「いえ、私にとつては、師匠は師匠だけです。今度いつか、模擬戦をしてくれるとうれしいです」

「帰えておくよ」

やつぱり、俺はチケットを受け取り乗船手続きをした。

「ハニ、元気でな」

そう言って、俺は船に乗り込んだ。
さて、次は最後の国、リーンボックスだ。

...SAVE

ノワツヒヤンがヤンクトレ化？

ケイス「いや、俺に聞くな。と言つか、またタイトル詐欺が発生してゐる」

どつちかといふか、ノワールの恋物語、か？
とはいへこれでラステイション編終了です。

ケイス「今回、早かつたなあ」

元々、ノワツヒヤンのイベントを起しすぎだけのはずだったからね。
4~5話くらいで終わらせるつもりだったし。

ところひとつで、次はリーンボックス編だな。
…正直、何を書こうか迷つてゐる。

ケイス「えええええ。概要的なものもないの？」

ないんだな、これが。

ケイス「…俺、じつなるんだ？」

わあ。

下手すると、ベールをとゲームやつて終了かも。

ところど

それでは次回、「（タイトル不明）」でまたお会いしましちょ

ケイス「うわ、本当にタイトル不明にしゃがつた」

幕間 設定のまとめ～ラスティショーン編～（前書き）

ラスティショーン編が終了したので、JIGMOでの設定を以下略

幕間 設定のまとめ～ラステイション編～

人物

ケイス

われらが主人公。
とりあえず、ルウェイー編から成長なし。

アーンヴァル

武装神姫の形をした何か
異空間から呼び出したラファールと融合することにより、ケイスの
武装になることができるようになりました。
標準武装としては、

- ・ランチャー
- ・粒子ブラスター
- ・脚部スラスター × 2
- ・リアスラスター

これに加えて、武器を召喚して武装強化することが可能。

ラファールの合体モード

現在、3種類存在します。

1・ペガサスモード

ノワールと戦ったときのモードですね。

基本的に、ラファールと合体するのはこのモードになります。
ここから換装し、別モードになります。

2・ゴーラーンモード

ノワール戦でケイスがちょっと愚痴つてましたが、
接近戦ではこっちのほうが強いはずです。

追加武装としてP DW1-1、M8ライトセイバーを呼び出し、こ
れらを合体させて剣にします。

加えて、腰部の左右についているガーダーを2つあわせ、盾とし
ます。

(所謂、ディロ・シールドですね)
ただ、エネルギーの消費がすごいので、長時間戦闘には向きませ
ん。

3・ライディングモード

ケイスとの合体前に戻る感じですね。

基本は、敵に突っ込む感じになりますが、それ以外の使い方もで
きるようです。

そのときにまた説明を書きますね。

と言つことで、久々の雑談ですよ、ケイスさん。

ケイス「というか、今回またパワーアップしたな」

まあ、今回はやりたいことの一つだつたからな。

ケイス「アーンヴァル、好きだもんね」

まあ、BMの方でアーンヴァルだけを育てたからな。

ケイス「で、今回の雑談は何？」

「のあとリーンボックスに行って、3話くらいで序章が終わりになるわけだ。

ケイス「で？」

そうすると、1章に入していくわけなんだが、ここでアンケートをとりたいなーと思って。

ケイス「なんのだよ」

1章の一番初めは、ゲームで言うところの序章から始まるわけだ。ここは、女神 s vs マジック・ザ・ハードなわけなんだが、ここにケイスが加わったほうがいいのか?といつこと。

ケイス「俺?無理無理」

あ、ちなみにケイスが入っても負けますよー。

ケイス「マジか。ちなみに、この戦いに参加しない場合はどうなる?」

ほぼゲーム通りだな。

というか、下手をするとキンクリする可能性が高い。で、ケイスはと言つと、ある場所に冒険に行つてもうつ。

ケイス「…難易度は?」

まあ、そんなに高くないと思つてこよ。

けど、その場合ある理由からマーチングヴァルヒの合体ができないとなる。

ケイス「え？」

うん、ちゃんと理由は考えてるので。

と並つ」とど、「じゅうがここか一回のトライアルでもいいんだよ」といふ
れしいです。

ケイス「で、こつまで募集にする？」

そうだな、11／5あたりまでかな？

一応、締め切つたとわざ、その投稿するよ」元気じます。

幕間 設定のまとめ～ラステイション編～（後書き）

ところがどうもしければメッセージ下をこ、 よりしきお願いします。

第1-9話 未来の歌姫（前書き）

ラステイションでの冒険を終え、リーンボックスに向かつたケイス。今だ見たことのない景色に思いを馳せていた。さて、これからどうなることやら。

第19話 未来の歌姫

『利用ありがとうございました。またの利用をお待ちしております』

機械的なメッセージを聞きながら、俺はリーンボックスに足を踏み入れた。

というか、まだ空港内だがな。

「まあ、思ったより快適でよかったですよ」

「そうですね、これで2人分払つていなければ万々歳だったんですけどね」

…お聞きの通り、アーニヴァルの分も切符代を取られたんだ。
しかも、大人料金だぞ。

「私は、大人ですよ！」

地の文にツッコむんじゃねえ。

空港から出て、景色を見てみたんだが…。

「へえ、かなり未来的な都市なんだな、リーンボックスって」

「そうですね。この間まで黒々とした街にいたからかもですけど、白くてきれいな街ですね。」

確かに、白くてきれいな街だな。

これは夜景がきれいに見えそうだ。

「さて、それじゃ教会でも探ししますか」

「そうですね…ってあれ?」

アーンヴァルが何かを見つけたようだった。

「マスター、なんだか歌声が聞こえてきませんか?」

俺は耳をすませてみたが何も聞こえなかつた。

聞こえるのは、所謂人ごみが発する音くらいだつた。

「いや、何も聞こえないが

「すごい透き通つたいい声なんですよ。マスター、私も行ってみたいですね」

まあ、別に急ぐ旅ではないし。

俺はアーンヴァルの提案に乗り、その声の主を探すこととした。

どのくらい歩いたらどうか。

俺達は空港から少し離れた公園に来ていた。

「なあ、アーンヴァル。まだその声の主ってのは見つかないか?」

「うーん、このあたりだと思つんですけど…」

アーンヴァルが言つには、この辺りから聞こえてきていたのは間違

いないいらしご。

が、今はその肝心な声が聞こえないらしいんだ。

「歌の声をやめちまつたか？それともアーンヴァルが壊れ始めたか？」

「私は壊れません！」

そんな時、「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」と歌の声が聞こえてきた。

明らかに少年の声だつたが、『歌』と歌のキー・コードに引っかかったわけだ。

s.i.d.e ???

「ねえ、お姉ちゃん。もう、お歌歌わないの？」

喉が渴いちゃつたから水を飲んでた時に、急に男の子に話しかけられちゃつた。

ええと、何て答えたらいいんだろ。

「え、えと、あの、その…」

「ほら、このお姉ちゃんも困つてゐるじゃへんなんぞこね、急に声をかけちゃつて」

「い、いえ」

多分、声をかけた男の子のお姉さん、だと想ひ。

丁寧に頭を下げるから、男の子の手を引いて歩いていった。

あの男の子に悪いことしちゃったな。
はあ。ボク、何でこんな性格なんだろ。

「お姉ちゃん、バイバーイ」

さつきの男の子が、ボクに手を振りながらそう言った。
だから、ボクも手を振り返したんだ。

……あ、小突かれてる。

s i d e ? ? ? E N D

青い髪、ヘッドホン……。どう着えても5つ……だよな、あれ。
そして、どうしたもんか。

そんなことを考えていると、アーンヴァルが「ちょっと声を掛けて
きますね」と言つて、5つ……（仮）に近づいていった。
オイ。

「あのー」

「……ー。」

「あの、すいません。怪しい者じゃないです

こりいら、アーンヴァル。それじゃ怪しい人だよ。
そう思いながら、俺も5つ……（仮）に近づいていった。

「ボク、夢でも見てるのかな。

人形がボクに話しかけてくるなんて。

「私、アーンヴァルと申します。先ほど、歌声が聞こえてきたので来てみました」

この人形さんはアーンヴァルさんと云ひました。

会った事、ないよね？

「あ、ありがとうございます。ボクは、5月・つて言います」

夢の中だから、ちゃんと受け答えができるみたい。
本当にちゃんと受け答えができるからいのにな。

「5月・さんですか。マスターから伺っていたイメージと違いますね。ちゃんと受け答えなさりますし」

「？」

もしかして、これって夢じゃない？

「あ、でも、すごい歌が上手って聞いてます。さつき歌つていた歌とか、もう一度お願いできますか？」

「え、いや、あの、だけど……」

夢じやないって分かつた途端、喋れなくなっちゃった。
あはは、やっぱりボクだなあ。

「あ、マスター。5月・さんですよ、5月・さん」

アーンヴァルさんが誰かに向かつてそう言つていた。

アーンヴァルさんが向いている方向を見ると、男の人が立っていた。

side 5pb・(仮) END

俺はアーンヴァルに「わかつてゐるよ」と言つて、5pb・に向き直つた。

「はじめまして、ケイスといいます。アーンヴァルのマスターをやつてます」

そう、挨拶したんだが…。

5pb・の動きが止まつた。

「あの、大丈夫ですか、5pb・さん」

そう言つて、肩に手をかけようとしたんだが。

「ボ、ボクは5pb・って言います」

と言つて返してくれた。
うん、挨拶は必要だよね。

「それで、実は、君の歌を聞くために探してたんだ」

「え?」

5pb・は不思議そうな顔をする。

ま、当然か。

「ボ、ボク有名じゃないし、上手くもないですよ」

「そんなことないよ。なあ、アーンヴァル?」

「はい、そうですー空港から出たところで聞こえました。すこしきれいな、澄んだ歌声でした」

アーンヴァルがそう言つて、500・はずじく恥ずかしそうに照れていた。

「だけど、実際空港といつて結構離れてるよな。どうして聞こえたんだろ?」

「神姫イヤーは地獄耳なんですっ!」

アーンヴァル。それ、某アルトレーネのセリフ。

「ま、まあ、それはそれとして、歌を聞かせてもらえないかな、君の歌を」

俺がそつと、でしたら、とアカペラで歌い始めてくれた。
曲名?

野暮なことは聞かない。

「無理言つて、申し訳なかつたね」

「だ、大丈夫です。」ちらりと、聞いてくれてありがとうございま

した

そう言って、5pb.は笑顔で返してくれた。
うんうん、やっぱり笑顔はいいや。

「それで、俺はファン第一号ってこといいのかな？」

「え? えええええつー! ?」

そんなに驚くとか、こー。

「あ、もうファンがいたんだ。そうだよね、あんなに歌が上手いん
だし」

「いえ、そう言ひ事ではなくて。本当に、ボクのファンになってくれるんですか？」

そういう心配か。

「もちろん。こっちからお願ひしたいくらいだよ」

「でしたら……はい！」

さて、それじゃ俺達は教会に向かうとしますか。

「それじゃ、俺達教会に行くからさ」

「はい、お返をつけて」

「うん、ありがと」

そう言って、俺達は別れた。

s i d e 5 p b .

ケイスさん、かあ。

すつごい、いい人そうだつたなあ。

だけど、ケイスさんに挨拶されたときに挨拶返さないといけないって思ったのは何でだる。

けど、これでボクにもファンができたんだ。

しかも、一度に2人も。

うん、自信が出てきたよ！

s i d e 5 p b . E N D

... S A V E

第19話 未来の歌姫（後書き）

はい、とにかくとで、リーンボックス編始まりましたー。

ケイス「おう。ってことで、最初は5pbとか。といつか、えらくあつたりだな」

まあね。

一応、5pbが人見知りを発動しなかつたのには理由があつたりする。

ケイス「どうせ、『都合主義とかそんなもんだろ?』

チミは俺のことをどうこう田で見てるんだよ。
このページ見れ。

ケイス「へえ、こんなことがあつたんだ」

たしか、1年位前に何かあつたよなーと思つてググつたらこれが出てきたんでそのまま採用した。

ケイス「なんて安直な」

とにかくとで。

それでは次回、「ゲームーな女神様」でまたお会いしまじょ

ケイス「誰のことか丸分かりだな」

第20話 ゲーマーの女神様（前書き）

5pb・と別れた後、ケイスたちは教会へ向かっていた。
そんな彼らに、悪夢が襲いかかろうとしていた。
さて、これからどうなることやら。

第20話 ゲーマーの女神様

俺達はリーンボックスの教会に向かって歩いてくる。ハズなんだが。

「なあ、アーンヴァル。教会つてこんなに遠いのか?」

「ええ、街の外れのほうにあるみたいなんですよ」

「うまい、街をナビゲートしていた。

まあ、それなりじょうがないか。

そんな時、左のわき道からドドドドドドドドと誰かが走つてこいつの音が聞こえてきた。

「マスター、誰かが走つてきてこいつなので、注意してください
ね」

「おひ、分かつて……ほあつ…」

その足音の主は見事俺にクリーンヒットした。
しかも、ひともあらうか俺を下敷きにしてやがった。

「んー、んー、んー……（ジナー、ジナー、はやくジナー）…」

「どなたですか？ 私に鉄山轍てつさんせきをかました方は

なんかこの口調、聞いたことがあるよつなかつて、そんなこと考えてる場合じやねえ。

俺は、「んー、んー」と言いながら地面をバンバンと叩いた。
く、苦しい。息が続かねえ。

「あらあら。下に誰か倒れているみたいですね」

うおー、氣づいたなら早くどいてくれー。

俺はわざりに地面をバンバンと叩いた。

「私がどいて差し上げればよいのでしょうか」

そう言つて、ビヒリとしたらしいのだが。

「あ、あら?」

バランスを崩して、再び俺の上に覆いかぶさるような形になつた。

むにゅつ。

なんか柔らかいものが2つ押し付けられてるんですけど。
う、うれしくなんかないですじょ?

そのあと、やつとどいてくれました。
もうひょっと感じていたかつたとか、思つてないからね?

「大丈夫ですか?」

「貴女には、これが大丈夫に見えるんですか?」

「…見えませんわね」

まあ、見る限り服はほろぼろで擦り傷だらけ。
どう見たって大丈夫には見えんわな、これは。

「ちょっと、私の家までお越しくださいな。治療いたしますので」

まあ、ここの好意に甘えておひいつか。

「すいません、ご迷惑おかけします」

「やついえば、血口紹介もまだでしたわね。私はベールと申します

「私はケイスと申します。冒険者をやつております」

と、お互に自己紹介をしあつた。
まあ、もうひん分かつてたけどね。

「あら、それではネプテューヌ達が言つていたケイスさんと言つ方は
は…」

「多分、私のことではないかと。ネプテューヌさん、ブランさん、
ノワールさんと面識ありますから」

「へえー、不思議な縁ですねえ」

「そんなことを話しながら、俺とベールさんは教会のほうへ向かつて
いた。

「やついえば、何をそんなに急いでいたんですか？」

「えーとですね、今日は実はゲームの発売日でして…」

ベールさんの声が段々と小さくな。

「それで、…その…を置つ…、自分の…でやるのを…」

声がどんどん小さくなつて、聞き取りづらい。
多分、女神がそんなことをやつて居る、と知られたくないのかな。
だとすると、俺の取るべき行動は…と。

「あ、ゲームですか？俺も結構やりますよ？キンタとかの格闘ゲー
がメインですけど」

「キンタですか？あれ、結構難しいんじゃないんですか？」

「いや、ゲーセンで鍛えましたから」

もちろん、前の世界でね。

「それで、今日買つてきたゲームつて何ですか？」

「これは、武装紳士^{アーモンド}って言つゲームで、紳士の育成ゲームな
んです。一年前に武装紳士つて言つのが出たんですけど…」

やべえ、語りだしちまった。

こつちがゲームをやる人間だと知つた途端に「これかい。
ちなみに、教会につくまでこの武装紳士と言つゲームがいかに魅力
的なゲームなのか、と言つことをずっと聞かされた。
勘弁してくれ。

教会について、ベールの私室らしき部屋に通された。

ベールは、「ちょっとだけ待つていてくださいね」とだけ言い残し、部屋を出て行った。

おそらく、薬などを取りに行つたのだろう。

それから少しして、部屋のドアが開いた。

俺は、ベールが帰つてきたものだと思いそちらを見ると、それはチカだつた。

「お姉さま、帰つていらしてたんですね。今日もまたお一人で出かけるなんて。私に声を掛けていただければ、同行いたしましたのに。…ってあら?」

これだけ喋つて、やつと気づいたか、この人。

「あなたどちら様ですか?なんでお姉さまの部屋にいるんですか?即刻出て行つてくださいまし!」これは、あなたがいていい場所ではありませんよ!」

はあ、機関銃みたいな人だな、この人。
相手は疲れそなうんで、相手にしないことでFA。

「きいーつ。何で私の言つことを聞こいつとしないんですか。大体、あなたはお姉さまの何なんですかっ!」

「…私のお客様相手に、何やつてるの?チカ」

ここでベールさん登場か。

正直、もうちよつと早く来て欲しかつた。

「え？お姉さまのお客様、ですか？」

「そ、早く謝りておきなさい。今だったら許してくれるかもよ？」

「うう、早く謝りておきなさい。俺のほうにワインクするベールさん。
仕草が一々色っぽいんだよなあ。

「え、でも……」

「いい事教えてあげましょうか？彼、あのケイスつて方よ？
何か俺、ひどい事言われているような気がするんだが……。
ベールさん、何かその言つて方す”い氣になるんですが。

「え……。冗談ですよね、お姉さま。あのブランクハートを一撃で
粉碎したつていう、あの？」

「ふうっ！」

「おいおい、何か話が大きくなつて伝わってるだ。

「ええ、そうよ。もし彼の機嫌を損なうのであれば、貴女を容赦なく外へ放り出しますからね？」

「うう、言ひながらにいと笑つていた。

「怖ええ。ベールさん、マジ怖ええ。

〔冗談つて分かつても怖ええ。

「ひいいい。『めんなさい』、『めんなさい』、『めんなさい』。命だけは勘弁してください」

土下座をして涙を流しながらさういふチカさん。

うん、こりこりうチカさんは新鮮だなあ。（現実逃避）

「…だそつよ、ケイスさん？」

何か、俺すごい悪者にされてない？

「チカさん？」

「はいっ！？」

そんなに怯えなくていいと思つんだけどなあ。（・・・・シ
ヨボーン）

「俺、そんな人に見えます？」

「はい」

…見えるんかい。

「そうですか、だったら…肅清ですね」

「ひつー？」

ちよつと、一芝居打ちますか。

「だったら、こりに来いや」

そう言って、チカさんの胸倉をつかんで外に行こうとする。

チカさんは体が硬直してしまっているようすで、簡単に持ち上がった。

「ベールさん、ちょっとだけ待つてください。すぐに戻ってきますんで」

そう、いい笑顔で言つておいた。

と、そうだ。こっちもやつておかないと。

俺は、チカさんの耳に顔を近づけ、チカさんにだけ聞こえる声量でこつ語りつておいた。

「別に、あなたに何をするわけではないですよ。もう少しだけ付き合つてくださいね。いいものが見れるかもしませんよ？」

と。

side ベール

え？ 何がどうなつたの？

チカにちょっと反省してもうむづくと思つただけなのに。

だけど、現実にこうなつてしまつた。

チカだけは助けないと。

：私はどうなつてもかまわないから。

私はそう思い、ケイスさんの後を追つた

さて、そろそろかな？

side ベール END

「お待ちかねだわー！」

うん、来た

「何ですか？」

俺は、できるだけ低い声で呟いた。

「チカを返してくださいー！」

「どうして、と聞いても？」

「彼女は何もしていないじゃないですか！」

「侮辱しましたからね、私のことを」

「それについては、私が謝りますから、ですかー。」

「それでは足りませんね。貴女が彼女の代わりになりますか？」

さてベールさん、ここが正念場ですよ。

答え如何では…。

「彼女を助けてもらひえるなら、それでもいいです」

即答ですか。

さすがですね、ベールさん。

「だそうですよ、チカさん。いいもの見れたでしょ？」

「はい」

「それじゃ、2人で私を騙したの？」

「というか、ねえ。ベールさんが悪いんですよ？あんな悪い顔をするから」

「うう」

流石にやつすぎたと思つたんだろうな。

「ですが、あなたもひどいですわよ？何もあやしまで…」

「だつて、意趣返しをしたかったものですから」

まあ、確かにやつすぎた感はあるけど、ちやんと田舎ははつたからなあ。

「まあまあ、お一人とも。もうこいぢやないですか、過ぎたことですし」

「「お前が言うつなー」」

俺とベールさんの声がハモつていた。

第20話 ゲーマーの女神様（後書き）

… IJの、ラツキースケベが。

ケイス「え？俺、何もしてないじゃん」

みんなの意見を代表して言つただけだ。他意はない。

ケイス「ちなみにだが。なんでノワちゃんがウォーライクなんだ？」
ウォーライク：W A R L I K E つまり、戦闘狂とか好戦戦士
とか言う意味

いや、真実じやね？

といふか、今回悪い顔だなー、お前。

ケイス「やらせたのが自分だ、つていつ自覚はあるのか？」

いや、だつてや。

ベルさんと道でぶつかる

ベルさんの部屋に連れ込まれる

チカと鉢合わせ

チカと口論

てな感じにしかならんだろう。

ケイス「いや、だからどうしてあんなったんだよ。」

ノリ?

とこりことで。

それでは次回、「特命課メンバー」でもお会いしましょう

ケイス「あ、逃げやがった」

第21話 特命課メンバー（前書き）

ケイスはリーンボックスでの悪夢を乗り越え、その翌日教会でティー
ータイムを満喫していた。

その最中にリーンボックス特命課の話に上がった。
さて、これからどうなることやら。

第21話 特命課メンバー

…まあ、何だ。

この間まで色々とあつたわけだが。

今は、何事もなかつたかのように3人で優雅にティータイムを楽しんでいた。

「流石は女神様、紅茶とゲームには金をかけるみたいですね」

「…私は、どう反応すればよろしいのかしり」

「事実じゃないですか、ベール様」

「本当だつたんだ…。
まあいいや。」

「それはそれとして、だ。紅茶も美味しいし、このクッキーも結構いける。で、何を企んでる?」

俺がそう言つと、一人はビクンと反応した。
やつぱりか。

「いえ、別に何も…」

チカさんはそう否定していたんだが。

「いずれ分かる」とじょり、とベールさんは話を切り出した。

なんでも、今現在リーンボックスでは治安が徐々に悪化しているらしい。

目に見えて悪化しているわけではないらしいのだが、ストッパーが効いていないらしいんだ。

まあ流石にそうなつてくると教会も何もしないわけにはいかず、自衛組織を結成するに至った。

その結成した組織は、リーンボックス特命課といふらしい。

「結成したまではいいんですが、この組織のボスが役に立たなくてですね」

「ま、よくあることだね。」

「街中に女装をして現れ、歌を歌つて去っていくと言つ暴挙を繰り返してまして」

「ちょ。それどこのアイマスCM?」

「それなので、この間クビにしたんですが、いい人材が見つからず…」

「それで、俺にそこに入ってくれってこと?」

「いえ、それはそれで魅力的ですが、そうではないです」

「まあ、請われても入る気はないけどね。
としたら、何だろう。」

「そのクビにした元ボスなんですが、火山に陣取つているらしいのです」

「はい?」

「その者は、ボスを任せられた時に腕が立ちまして、今のメンバーでは、誰も歯が立たない状態なんですよ」

「ですから、その元ボスを倒してきて欲しいのですが、ダメでしょうか？」

なんという。

ま、でもそのくらいの依頼だつたら、受けられるかな。

「いいですよ。そのくらいだつたら」

俺がそう答えると、2人はお礼を言つてきました。
まだ早いんじゃないかなえ、礼つてのは。

「やつしましたら、案内役を付けさせていただきますね」

そつ言つて、ベールさんは手を2回パンパンと鳴らし、いつ言つた。
「ケイブ、いるのでしょうか？」

その後、ベールさんの影が持ち上がり、人の形を取つた。
… ケイブさんだつた。

「… ケイブ」

「あら、ケイブ。今日はそこから登場ですね」

後から聞いた話だが、ケイブさんはマジで神出鬼没らしく、部屋の隅から現れたり、どこぞの隙間妖怪ように空中に裂け目を作りそこから出てきたり、とするらしい。

見てみたいような見たくなこよつた。

「…何?」

「この方に、あの変態を倒してもいいかと思いまして。道案内をお願いできる?」

「了解。ついてきて」

ケイブさんはそう言つと、どんどん歩き始めてしまった。
つていうか、今から倒して来いつてことかよ。
ま、いいかと思い、ケイブの後を追いかけた。

ケイブはどんどん進んでいつてしまい、なかなか追いつかせてもらえなかつた。

それなりに混んでいる場所などを何箇所か通つてているんだが、何もないかのように進んでいる。

まあ、それがケイブなんだろうなあ。

それからもう少し進み、アンダーラインヴァースの入り口に着いた。

「…」

そう言つて、入り口を指差すケイブ。

そして、すぐに踵を返して来た道を戻ろうとしていた。

「おい、ちょっと。待つてくれないのか?」

「…ベールに言われたのは案内だけ。案内したから、帰る」

いやいや、ドライすぎるだろ、それは。

「んー、10分でいい。少しだけ待っててくれ

多分、10分もあれば倒せると思い、俺はケイブにそう言った。
ダメかな?

「ん…分かった。10分だけ待とう」

そう言つて、その場に立ち止った。

それを確認してから俺はアンダーラインヴァースに入り、元ボスを懲らしめるのだった。

所要時間3分。

あっけなかつたなあ。

「ユニローンモードまで持ち出しておいて言つセリフではないです
よ、マスター」

元ボスを倒し、ケイブのところに戻ると、彼女は先ほど立ち止まっていた場所で本当に待っていた。

彼女は空を見上げていた。

「…早かつた」

「まあ、急いだからな。それより、何か見えるのか?」

「…青い空」

「そこですか

おれはそう言つて、歩き出でたのとしたんだが、ケイブが歩き出でたとしなかつた。
ビービーしたのか、と尋ねると。

「まだ、10分経つてない。それに、まだ空を見ていたい気分」

と言つた。

俺は「しょうがねえな」と言い、一緒になつて空を見上げた。
空は、高いねえ。

俺が中に入つてから10分くらいは経つただろつか。
まだ、ケイブは歩き出でたとほしなかつた。

不思議に思い、俺はケイブのまつを見てみた。
ケイブは、ちよつと視線を俺の方へ移したところだった。

「行くか？」

「…ん

そんな会話ともいえないやり取りをし、俺達はリーンボックスへ歩き始めた。

少し歩いたところで、ケイブが俺に話しかけてきた。

「…空は…好き？」

「空？」

「やう、あの空」

そつと、上を指差す。

「空、ねえ」

そつと、空を見上げる。
好きでも嫌いでもないなあ。

「…好き?」

「わからん。でもまあ、嫌いではないな」

「…やう」

そう言つと、ほんの少しだけ暗い顔をした。
すぐに元の表情に戻つてしまつたが。

そんな時だつた。

／＼＼

あの歌声が聞こえてきたのは。

side ケイブ

歌声が聞こえる。

何よりも、透明な。

儂く、それでいて強い歌声が。

私の魂を揺さぶるような、優しい歌声が。

side ケイブ END

歌声が聞こえてきた公園。

俺とケイブはそこへ入つていった。

そこは、前に5pb・と会つたあの公園だった。

「～～～～」

やつぱり、5pb・か。

そう思い、横を見てみるとケイブが5pb・を見ていた。
この歌が終わつたら、話しかけよう。

「よ、5pb・。久しぶり」

「え？あ、ケイスさん！」

「やつほー。相変わらず、良い声してゐるねえ」

「あはは。お世辞でも嬉しいです。…あれ？そちらの方はどうなたですか？」

5pb・はそう言って、ケイブのほうを見た。
見られているケイブは、何か萎縮しているかのようにも見える。
ゲームとは逆だなあ。

「…きれいな声、だつた」

「ありがとうござりますっ！」

ここで 5 p.b. とケイブがお互いに自己紹介。

そして、色々な話をしていくようだった。

まあ、女の子同士の話だったから、俺は席を外させてもらひったが。

そして、この2人は友達になつたらしい。

5 p.b. と別れ、ケイブとリーンボックスへ向かってすこし経ったとき。

唐突にケイブが「：ありがと」と言つてきた。

「何が？」

「…10分待つてて、得をした」

「そうか、それは良かつた」

「…だから、これはお礼」

そう言つうと、ケイブは俺の頬にキスをしてきた。

「他意はないから」

そう言つたケイブの頬は、少しだけ赤みがかっていた。

第21話 特命課メンバー（後書き）

…お前は。

ケイス「俺、今日は本当に何もしないじゃん」

…俺は何も書っていないが？

とこり」と、ケイブ登場でしたー。

ケイス「というか、本文でベールさんとチカラさんがしゃべっている
と、どっちがどっちだか分からなくなつてくるな」

言つた。書いてて、俺も混乱したんだから。
あれ？これどっちが言つてるんだつけ？てな。

まあ、これでリーンボックスも回つたし、あとは…。

? ? ? 1 「ちよ～つと待つですのー！」

? ? ? 2 「わたしたちが出てないよつー」

うん、「めぐ。

君達を出す構想は元々なかつた。

? ? ? 1 「なんですかー？」

? ? ? 2 「だって、ファルコムやケイブは出でるじやん。意味が分
からないよー！」

まあ、そういうことで、たぶん次回はリーンボックス最終回です。

ケイス「うーん、長かったんだか短かったんだか。やつと、本編ち
ょい前まで来た？」

いや、マジでどうか考え中。

一応、設定上2~3ヶ月くらいは残ってそなで、ビックでゆつ
くつかせる気です。

ケイス「俺としては、ラステイションでゆっくりしたいかなー、な
んで」

とこう」と。

それでは次回、「振り出しに戻る?」でまたお会いしましょう

ケイス「おー、無視すんな。あ、それじゃまた次回でー。」

第22話 振り出しへ戻る？（前書き）

ケイスはリーンボックスで主要な人物に出会い、しばしの休息を満喫していた。

だが、やっぱり気になるのはあの子だった。

そして、ケイスはリーンボックスを離れる決意をする。

ケイスの選択は、吉と出るか凶と出るか。

第22話 振り出して戻る？

「…そういうえば、」それで4国とも回ったんだよなあ

俺はベッドの上で横になりながらそう呟いていた。

そして、今までのことをいろいろと懇に出す。

俺が初めてこの世界に現れたのはプラネットユースのバーチャフォレストだつたっけ。

そこで、スライヌに襲われてた（よう）に見える）俺をネプギアに助けてもらつて。

そのあとギルドに行きたいつていうネプギアの護衛をするためにアイエフと戦つたんだよな。

あの時は焦つたよな。まるつきり戦闘経験ナシの俺が戦闘をせらへたんだから。

まあ、どうにか切り抜けらてたし結果オーライだろ。

それでギルドに行ってネプテューヌに会つて、ハネダマウンテンで野良ドラゴンを退治。

あの時のドラゴンは実は結構強かつたんじゃないかなー、とか思うんだよね。

今の俺だったら、まあ楽勝なんだろうけど。

次にルウェイーに行って、DSTTに襲われてるロムちゃん^{だつたっけ}とラムちゃんを助けて。

で、教会に連れて行つてもらつてブランちゃんとナナさんに会つたんだよな。

そのあと俺が来たのを狙つたかのようキラーマシンを復活させたグリさんと戦うことになつて。

グリさんも改心（ていうか、多分だまされてたんだろうなあ）して

くれたし、まあ良かつたな。

ただ、もつるウイーにはゲイムキャラがいなってことだったからどうしようかってなって。

結局ネプテューヌに頼んでゲイムキャラを貸してもらつてキラーマシンを封印してもらつたんだつけ。

このまま行くと、キラーマシンともう一回戦いつになるんだろうな。

あの時はラファールがなかつたから、今だつたら剣だけでも倒せらんじやないかな。

そういうえば、ルウイーからラステイションに向かつてている時にフルコムさんに会つたんだつけ。

会つたつて言つか、空から落ちてきたんだつたな、そういうえば。

思わずラピタを思い出したよ。

で、フルコムさんは空に浮かぶ島から落ちてきたつて言つてたなあ。

でも、原作だとそんのはなかつたはずだし、その島つて何だろうねえ。

ラステイションでは、ノワちゃんに勝負を挑まれて大変だったなあ。でも、ラファールを手にした俺には、楽な戦いだつたかも。まあ、ノワちゃんの油断と粒子ブラスターがあつたから勝てたんだろうな。

そのあと、『こに『師匠つて呼んでいいですか?』つて言われて。流石にアレは面食らつたよなあ。

でも俺は基本は剣士だし、基本しか教えられなかつたんだよね。誰か、いい師匠役はいないかなあ。…つて、ケイブはどうだろ。

そして、『こにリーンボックスでは公園で歌つてる5つ。と会つて。俺とアーンヴァルでファン1号2号にしてもらつたんだよなあ。

原作ではアイドルをやっていたし、そのうち有名になるんだりつな。
その後、あのゲームに会って、つていづか交通事故になつて。
……やわらかかったなあ。

つて、そうじやない。

そのあと教会でチカラさんと口論をして、仲直りをして。
で、ついこの間ケイブとアンダーラインヴァースに行って、あの変態
を倒したんだよなあ。

みんな、どうしてるかな。
またみんなに会いたいねえ。

「マスター、そろそろ次のところへ行きませんか？」

ベッドでまどろみの中にいた俺に、アーンヴァルがそつまつへくる。

「次のところねえ。次つてどこなんだろつなあ

「やうですね。ギョウカイ墓場つて所はどうなんですか？」

お~お~い、アーンヴァルさん。冗談きついですよ。

「でも、全部回つてしまつたしなあ。どうしようかねえ

うーん、やっぱり堂々巡りになるな。

そう思つてみると、アーンヴァルが口を開いた。

「それなら、始まりの場所に行つてみてはどいですか？」

プラネットユース、つてことか。

そういえば、プラネテユースでゆづくした記憶がないからねえ。

「やうだな、それじゃ膳は急げ、だ」

そつ言つて俺は部屋の中に散らばつてゐる荷物をバッグに押し込み、アーンヴァルに渡す。

「ほい、アーンヴァル、頼む」

「神姫使いが荒いですよね、最近」

そつ言いながら、異空間にバッグを投げ入れる。

「それじゃ、行ぐぞ。こぞ、プラネテユース！」

そう言いながら俺は部屋のドアを開けた。

開けたとたん、周りからの痛いものを見る視線に打ちひしがれる。しまつた。ホテルの中つてのすっかり忘れてたわ。

そして、リーンボックスの教会。

「それでは、俺はこれで失礼しますね」

そつ言つて、出国の挨拶をする。

あ、前回の報告はちゃんとやつてるからね。

「あら、もう行つてしまわれるんですか？一回も私の部屋を訪れない今まで」

正直、あまり行きたくなかったんで。

だって、どうせBのポスターとかはってあるんだから。

俺はその言葉を飲み込んだ。

「せういえば、次はどう行くんですか？」

「プラネテコースに行こうと思つてます。ここが、まだプラネテコースを見たことがないんだ」

そう言いながらアーンヴァルを指差す。
ま、本当のことだしね。

「あら、やぢりは？」

あ、そういうえばベールさんとチカラさんには紹介してなかつたつけ。

「こいつはアーンヴァル。俺の相棒です」

「お初にお目にかかります。わたくしアーンヴァルと申します。以後お見知りおきを」

そつ言いながら、右手を胸の辺りまで持つて行き、お辞儀をした。

「…アーンヴァルさんと仰いましたか？」

「はい、…何かご無礼がありましたでしょうか」

アーンヴァルがそういふとい、ベールさんは手を握り合ひながら、いつ言った。

「貴女、私の妹になりませんか?」

「お姉さまっ!…?」

「姿形も、立ち居振る舞いも可愛かつたものですから、つこ」

「は、はあ」

俺とアーンヴァルは若干引いていた。

「それにしても、アーンヴァルさんとどじかで一緒に戦つたような記憶があるんですけど、気のせいでしょうか」

ベールさん、それは別のゲ・ムです。

さて、と。それじゃ行くか。

「アーンヴァル、ラファールを呼んでくれ

「何でですか?マスター。ここに敵は居そつにありませんが」

アーンヴァルは怪訝そうな顔をして言った。

「いや、某所だと女神化したりバイクで国境を飛んだりしてるんだ。ちょっと対抗したくてな」

「そんなところで対抗意識燃やさないでください。まあ、わかりました」

「待て。お前が融合しなくてもラフアールは飛べるのか？」

「それじゃ、行きましょつか」

「もうひろん飛べますよ。戦闘速度となれば話は別ですが

… そうだったんだ。
知らなかつた。

そして、俺とアーンヴァルはラフアールの上に乗り、プラネテ^{パン}ヌを手指した。
… ちょっとだけ、グランニユーレの気分が味わえた。

s.i.d.e ネプギア

「えいっ、やーっ、…たあーーーー！」

私は今、アイエフさんに稽古をつけてもらひつてこる。
ケイスさんには借りた剣をもつと上手に使えるようになるためこ。

「ほり、ネプギア。足の辺りががら空きよ?」

アイエフさんはさう言つて私の足のまづに攻撃を放つてくる。

「ぐう！」

辛うじて直撃は免れたけど、やっぱりカスつてしまつた。

「待て。お前が融合しなくてもラフアールは呼び出した。

「ネプギア、そろそろ集中力が限界なんじゃない？一息入れようか？」

「あと、ちょっとだけお願ひします！はあああっ！」

そう言ひて。私は氣合を入れなおす。

アイエフさんもそれに合わせて身構えてくれた。
多分、私が必殺技を出そうとしてるのが分かったんだらう。

「行きますっ！フォーエアーラッシュ！」

高速の斬撃がアイエフさんを襲つ。
けど、アイエフさんは涼しい顔でそれを受け流してしまつてこる。
まだ、敵わないなあ。

s i d e ネプギア END

よしやく、プラネットユース上空に到着。

懐かしいなあ、と思いながら下を見てみた。
そこでは、ネプギアとアイエフが剣を切り結んでいた。

「アーンヴァル、下に降りてくれ。知った顔に挨拶に行くぞ

「了解です、マスター」

その後、ラファールは段々と高度を落としていくのだった。

s i d e ネプギア

流石に疲れました。

必殺技って、こんなに体力を使うものなんですね。

「どう、ネプギア。一回休憩入れようか」

「そう、ですね。…あれ?」

何か、上から降りてくる。

白い機体が私たちのほうに向かって降りて来ようとしていた。

「何?あれ」

アイエフさんがそう聞いてくるけど、私にもアレが何だか分からない。

「何、でしようか」

そして、その機体に乗っている人が機体からジャンプし、私たちがいる場所に着地した。

「よ、ネプギアにアイエフ、久しぶり!」

そこには、懐かしくすごく会いたい人の顔があつた。

s i d e ネプギア END

「ケイスさん!」

ネプギアがそう言って俺のほうに飛びついてきた。

「ネプギア、久しぶりだな。元気してたか？」

そう言って、左手をネプギアの背中に回し、右手で頭を撫ではじめた。

「…私は席をはずしたほうがいいかしら」

「いやいや、いいでござりやうださ」よ、アイちゃん」

「アンタにアイちゃんって呼ばれる筋合いはないわー！」

「カルシウム、ちゃんと取つてるか？アイちゃん」

「だつれのせいだと思つてゐるのみ、まったく」

うん、2人とも変わつてないなあ。

で、名残惜しいがネプギアを放して、と。

「おい、アーンヴァル。ラファールをしまつてお前もこっちに来いよ」

俺がそう言つと、「了解です、マスター」と答え、ラファールを異空間にしまつた。
で、アーンヴァルが落ちてくる、と。

「ちやんと受け止めてくださいよ、マスター」

「はいよ」

セーブして、アーンヴァルをキャッチした。

...SAVE

第22話 振り出して戻る?（後書き）

お前、前回で懲りずにまたやつこいつに会うのか。

ケイス「いや、今回はしようがないだろ。頭を撫でようとしたら勝手に左手も動いただけだ」

その所為で、ネプギアはあんなてるが…。

ネプギア「（時折何かを思い出したかのように）ヤーヤーしてくる（

まあ多分、丘ヒロイーンの座ゲット、とか思つてんだりつつなあ。

ネプギア「（ビクッ）」

とこうことで、回想回+リーンボックス終了+フラグ建設をお送りしました。

ケイス「今回まとめたねえ。というか、これはフワグじゃなこだろ、参考」

ネプギア「（何か悲しそうに）」

ああ、もう一々つむれこなあ。

次回、君をヒロイーンで書いてあげるから、あつしに行つてなれ。

ネプギア「（やつたま）」

ふう、やっとネプギアがあっちに行つたか。

ケイス「いいのか、あんなこと言ひちゃって」

いいのいいの。元々書く予定だつたし。

とこうことで。

それでは次回、「ネプギアの成長」でまたお会いしましょう

あ、それとお知らせ。

ルートについてですが、多数決の結果、女神に同行することとなりました。

オリジナルに投票してくれた方々、申し訳ないです。

せっかくなんて、オリジナルの方のシナリオをちょっとだけ紹介。行き先はファルコムが落ちてきたあの空に浮かぶ島、イクスを舞台にするつもりでした。

ここで、アーンヴァルが使用不能となつてしまつたため、ケイスの新武装が手に入る予定だつたりしました。実は、この島に行こうが行くまいが関わらせる予定だつたので、これ以上のネタバレは控えておきます。

それではー。

第23話 ネプギアの成長（前書き）

ケイスは再びプラネットユースを訪れていた。

ネプギア「最愛の妹、ネプギアに会つために」

ケイス「最愛の妹って何！？」

ネプギア「ええー、違うんですか？」

…いいからお前ら黙つてろ。

と、とにかく。

プラネットユースでのまつたつとした休息の話です。

第23話 ネプギアの成長

「ともかく。久しぶりね、ケイス。他国での活躍は聞いてるわよ」
アイエフがそう言つてくる。

まあ、諜報部勤務だから、色々な話が聞こえてくるんだろ？

「あはは、そんなことないですよ。アイエフさんもお元気そうで」
まあ、キラーマシンを倒したりしてたし、その辺は知ってるんだろうな。

「まあ、ね。それなりにやらせてもらつてるわ」

同じ諜報部員にも、あのケイスと戦った人、と書かれて一目置かれるようになつたとか。
たはは。

「イストワール様が『あのとき、強引にでも引き止めて國に引き入れるべきでした』って言つてつむかつたのよ」

…まあ、いーすんせんだつたらナリハリともあるんだろ？なあ。

「光榮ですね、そう言つてもらえたと」
いやあ、あまり褒められなれてないから、恥ずかしいねえ。

「むう〜〜〜〜」

アイエフさんとばかり話していたら、その横でネプギアが頬を膨ら

ませていた。

心なしか、睨まれている様な気もするが、… 気のせいだろ。

「ネプギアも、元氣だつたか？」

俺がネプギアのほうを向いてそう話しかけると、ネプギアはぱあつと笑顔になり、「はいっ！」と答えてくれた。

「それはそりと、報告があるのよ。ね、ネプギア」

「は、はいっ」

報告？何があつたんだろ。

「じ、実は…女神化、できるよつになつたんですー。」

へえ、女神化できるよつになつたんだ。

「まだお姉ちゃんみたいに汎用のプロセッサコニッシュトは使えませんけどね…」

そう言つて、えへへつと恥ずかしそうに微笑んでいた。

「すうじないじやないか、ネプギア。他の国の候補生は、まだ女神化な
んできなかつたぞ？」

そつぱつと、ネプギアはちよつとだけむつとしたよつこ

「他の国の候補生じやなくて、今は私の話ですっ！」
と強じ口調で返した。

side ネプギア

「う、やつやつた。

こんなこと言つつもりなかつたのに。

なんか、他の子のことを見られるとき、胸がモヤモヤして。私つて、ダメな子だなあ。

「」みんな、他の国の子じゃなくて、今はネプギアの話だつたよな

ケイスさんがそう言つて謝つてきた。

ううん、悪いのはケイスさんじゃなくて私。

「いえ、私もちょっと強く言い過ぎちゃつたみたいですね。ごめんなさい」

そう言つて、私は頭を下げた。

side ネプギア END

「それで、ですね。ケイスさんに、私の女神化した姿を見てもういいんです。いいですか？」

それは願つてもない。

俺はもうひるん、2つ返事でOKした。

「それじゃ、こまめす。はあああああつー」

ネプギアが気合を入れ、右手を上に掲げる。

そうすると、ネプギアから薄紫色の光が発され、それが光の柱を作る。

そして、その光の柱が粒子となる中、女神化したネプギアがその姿を現す。

「プロセッサゴーライト、装着完了！女神ネプギア、ここに参上です！」

うおおおおっ。

生で女神化が見られるなんて。
生きててよかつたあ。

「どうですか、ケイスさん」

ネプギアが少し恥ずかしそうに、そう聞いてくる。
まあ、出てくる言葉は一つしかないよね。

「…綺麗だ」

今まで他の女神の女神化を見てきたけど（ゲーマー除く）、みんな
綺麗だつたしね。

それにも、無反応？

そう思つてネプギアのほうを見てみたんだが。

「（ぼそぼそ）」

何かボソボソと言ひながら、左右の人差し指同士をツンツンしてい
た。
なんぞこれ。

「なあ、ネプギア、武器はどうなつてるんだ？」

「え？ あ、は、はい。何ですか？」

聞いてなかつたのかよ。

お兄さん懲しいよ。

「こや、武器はどうなつてるのか、って聞いたんだよ」

「えーと武器は…」

と言つて、持つている剣を俺のほうに見せる。
あれ、さつきは木刀を持っていたみたいだつたけど、やつぱり変身
後は一緒に変わるみたいだな。

「今は、ここの剣ですね。元が木刀だから使いやすいんですよ」

剣だけ？

確か原作だとその剣が銃にもなつてたはずだが。

「その剣、銃とかに変形しないのか？」

「剣が銃に変形する訳ないじゃないですか」

そう言いながら、こわこわと笑う。
だったら、それを覆してやるわ。

「やういえば、俺が預けたバルムンクはどうした？」

「えっと、変身すると剣の形が変わっちゃうじゃないですか。だから元に戻らなかつたら嫌だなと思って、教会に置いてあるんですよ」

そうか。

まあ、アレで稽古をしているかと思つたけど、そういう理由で持つていなかつたのか。

それじゃ、ここに呼び寄せせるか。

「それじゃ、ちよつと待つてろよ、ネブギア」

俺は一言やう声を掛けると、呪文を紡ぎだす。

「時間軸固定、空間歪曲、顯現」

俺がそう唱えると、俺の前にバルムンクが現れた。
それを、一度掴み、さらに唱える。

「物体変質、重火器追加、変性」

そして、バルムンクが光り始め、その光がパンッと弾ける。
あとは、と。

「こんなもんだる。

「あ、アンタ魔法使えたの？」

「あれ、言つてなかつたつけ。まあ、普通の魔法とは使い方も性質

「Field Release
時間軸解放」

も違つけどな

そう言いながら、バルムンクを軽く振つてみたりする。うん、重さは変わってない。

で、多分これをネプギアに渡すと……変性するはずだ。

「ネプギア、これ持つてみな

そう言つて、バルムンクをネプギアに渡す。

その瞬間、バルムンクが機械的な白い幅広の剣に姿を変える。

「マッシュンブランク機械剣だ。けど、これだけじゃないんだぜ、これは」

そう言つて、ある言葉をネプギアに教えた。

「言つてみな、キーワード」

「はいっ。ランチャーモード起動します

『了解、ランチャーモード起動します』

そう機械音声が答え剣が変形を始め、ランチャーに変形を完了する。

「え、ええええつー!？」

うん、予想通りの反応をありがとつ。

「それは俺からの贈り物だよ。よくがんばったね、ネプギア」

「あつがとうござります、ケイスさん

その後、ネプギアが女神化を解除するとともにバルムンクは元に戻つて。

残念そうにバルムンクを見ているネプギアがそこにいた。

「ケイスさん、いつもあの変形とかつてできないんですか？」

「まあ、そう造つてないからねえ」

何かかわいそだなあと思い、この言葉を言ったのが間違いだった。

「設計図なら書くけど、…要る？」

「要ります！」

メカフューチの女神、ネプギアが誕生した瞬間だった。

..... S A V E

第23話 ネプギアの成長（後書き）

はい、と書つて無事（？）ネプギアが女神化した話でした。

ケイス「何か、原作と微妙にあつてるよつた違つてるよつた」

こまけえことは（…）

とはじえ、オリジナルの武器を渡したのは間違いかな。

ケイス「まあ、普通の剣で銃撃できる原作のほうがアレかとも思つ
けど…」

と書つては、全へのほほんとしていな束の間の平和回でした。

ケイス「つてことは、次回から？」

んむ。

次回から、キャプションが移ります。

題して、「第一章 第一次マジックンヌ大戦」

ケイス「やつと原作に追いつくのか」

追いつくつて書つか、原作では序章扱いだからね、（…）。

ケイス「とはじえ、（…）からマジックンヌとの戦闘が始まるとだな」

ところことで。

それでは次回、「終わる平和な日々」でもお会いしましょ。

第24話 終わる平和な日々（前書き）

ケイスが再びプラネットユースを訪れてから数日後、異変は起こった。世界に、何が起こったというのだろうか。

第24話 終わる平和な日々

side マジコンヌ

「……やつと、実体化できたか

ギョウカイ墓場の一角で私はそうひとりしゃべる。

私は、ただただマジコンヌ様復活を命ぜられたマジコンヌ様によつて作られた存在。

マジコンヌ様は識別子として『マジック』といつた頃を下さった。

私の名は『マジック・ザ・ハード』。

世界を闇に落とす稀代の魔術師、といったところか。

「さて、祝砲としてこの世界にモンスターを送り込んでやろうか」

そう言い私は、すべての国にモンスターを送り込み、活性化させた。この世界の人間が奏でる悲鳴を、マジコンヌ様の栄養^{チカラ}とするために。

side マジコンヌ END

プラネテュースでほのぼのと過ごしていたある日の昼時。

俺、ネプテュース、ネプギア、いーすんは教会で昼食を摂っていた。あ、とりあえず今日の昼食は俺特製のナポリタンね。つて、この世界にナポリタンとかあつたつくなあ。

その最中、一人の兵士が教会の戸を開け、こう言い放った。

「イストワール様、大変です！街の周りがモンスターで埋め尽くされています」

普段であれば、『食事時です、後で聞きます』といつもすんもさすがにそんな態度は取れなかつたようで。

「分かりました。30分ほど待つてください、今は食事時です

と言つて、あれ？いつも通り？

ここ、突つ込んでいいところ力ナ一。

うん、突つ込もう。

「いーすん、そこは3分じゃないの？」

つて、ネプテューヌ。

お前、人の突つ込みどころを取るな。
しかも、突つ込むところが違うし。

「お姉ちゃん、そうじゃないよ」

おお、ネプギア。君は唯一マトモだつたか。

「そういうのは、食事をしながら聞けばいいんですよ。ね、ケイス
さん」

…期待した俺がバカだつたよ。

うん、そうだったよね、君達は。

「あの、それじゃ説明させてもいいですか？」

君も、律儀に待ってるんじゃない。

早く説明して自分の持ち場に戻らないと大変なことになるでしょ？

「プラネテュース、ハネダシティの近隣でモンスターが大量に発生しています。現在、各街の防衛団が対処していますが、街中に被害が及ぶのは時間の問題かと」

「なんでそれを早く言わないんですか！」

「一すんさん…。アンタがそれを言つか。

まあいい。ここは素早く行動を起こさないといけないだろ。

「ネプテュース、ネプギア。ひとつと行くぞ」

俺はそう言つて席を立ち、扉のほうへ向かつた。
そして後ろを振り返つてみると。

「ちよつとまって、これ、食べてからね

「ネプテュース、食べるか喋るかどっちかにしぃよ」

「……」

「食べるんかい！」

と、ネプギアは…。

「難しい問題ですね。ケイスさんが作った料理とケイスさんと一緒に行動。どちらも捨てがたいです」

…つて、何を悩んでいるんだ。〇〇

「二人とも、そんなもんいつでも作ってやるから、早く行くぞ！」

「うん！約束だからね？」「はいっ！」

…」の回答に一抹の不安を感じるんだが、気のせいかな？
まあいい。

そう思い、モンスター討伐に向かう俺達だった。

side ミナ

何か、外が騒がしいですね。

そう思い、私は教会の外に出てみたのですが。
そこには、街の方々が集まって固まっていました。

「どうしたんですか？」

何が起こったのか分からず、私は皆さんに問い合わせました。
そして、返ってきた言葉に畠然としました。

何せ、街の外にモンスターが大量発生していると聞いたのですから。
今は、グリさんが街の外についてモンスターを追つ払っているとか。
だから、畠さんは町の中でじっとしていたんですね。

私は急いで教会の中に引き返し、プラン様の部屋を訪れました。
コンコン。

「プラン様、一大事です。ちょっと入りますよ

そつぱつて部屋の中に入つていつたのですが、部屋の中は丸められた紙でいっぱいになつていました。

「ひつじもせいいのよ。新刊を落としそうなんだから」

「そんな場合じゅないです！街がモンスターに襲われているんんです！」

「なん……だと」

ブラン様はそつぱつとの場で女神化されました。

「アタシの国でそんなことするなんて。命が惜しくないみてえだな
ブラン様は窓ガラスを突き破り、そのまま街の外へ向かつたようでした。
外からは、『おお、ホワイトハート様が出られたぞ』といつ明るい
声が聞こえきました。

ブラン様、せめて窓を開けて出て行つてください。
修理代もバカにならないんですよ（泣）。

side //ナ END

side ノワール

ある日、私はケイに黙つて街を出て、リビートリゾートに來ていた。
何だかモヤモヤして、何もせずにいられなかつたのよ。

「ふう、何でいつもアイツのことを思い出しかやうかなあ」

まあ、アイツってのは、前に女神以外で私に勝つた事のある奴のことなんだけど。

あれからアイツ、顔を見せないのよねえ。

元氣でやつてるかしら。

そんなことを思いつつ、ふと周りを見回した。

なんとなく、周りに視線を感じたからだ。
さつきここに来たときに、全部のモンスターは狩つといたんだけどね。

が、見なれば良かつたと後悔した。

なぜなら、私が今いるフロアにモンスターが溢れていたから。

「もう!なんだってのよ!」

そう言つて、私は女神化し、そのフロアのモンスターを殲滅した。
けど、何か嫌な予感が止まらない。

「ユニー、ケイ、無事でいて!」

私はそのまま空を飛んでラステイションへ向かうこととした。

side ノワール END

side ケイブ
何だるづ、この感じ。

何か、空気がチリチリするといつも、なんと言つが。
私はそんな違和感を感じつつ、見回りをしていた。

今私は、リーンボックス特命課の職員。
日夜この国を守るために働いている。

「ケイブせーん」

そんなに離れていない場所からそんな声が聞こえてくる。
この声、これは、十中八九5pb.ね。

「あら、5pb.どうしたの」

「いえ、ケイブさんの姿を見つけたから声を掛けたんです。…ダメ
でしたか？」

彼女はシュンとした感じの声でそう言った。

…何か、私悪い事したかしら。

そう思つたときだった。

『グオオオオアアアアツ』

「きやつ！？」「…何？」

あれは、ドラゴン？

しかも、いつもよりも凶暴な奴みたいね。

それに、それだけじゃない。

モンスターに囮まれてる？

「…5pb.走れる？」

「…」はい、もちろん

上出来、ね。

彼女もおそらくモンスターに囮まれていてることに気がついた。

「教会まで走るわよ、ついて来れる?」

「//ゴージシャンの体力、伊達じゃないことを見せてあげます」

私たちはそう言って笑い合い、教会を田指して走り出した。
この事をチカ、ひいては女神様に伝えるために。

side ケイブ END

side マジュコンヌ

ほつ、どの国も優秀な人材がそろっているようだな。
初動が早く、対処も早くに終わっている。

ということは、力押しでは無理がある、か。

それに、人間を殺してしまっては意味がないから、な。

神が復活しようと、信仰する者がいなくては話にならないからな。

「だが」

そう言い、私はある国の映像に目を向ける。

「この男、何者だ? それに、コイツが装着しているモノ、どこかで
見た記憶がある」

記憶を探つてみるが、何も思いつかない。

『まあ、いいわ。じうなれば、あとは女神どもをおびき寄せ、殲滅

するだけだ』

そう言い、私は一瞬たりとも

side マジコンヌ END

はあ、疲れたぜ。

夕方になつてやつとかたがついた。

全く5～6時間も連続で戦うなんてはじめてだぜ。

そんなときだつた。

夕焼けの色だつた空は次第に曇り始め、薄暗くなつてしまつた。

そして、何かぐもつた感じの声が聞こえてきた。

『我等はマジコンヌ。犯罪神マジコンヌを崇拜する教団なり
『人間よ、女神などといつ矮小なる者ではなく、犯罪神マジコン
ヌを崇拜せよ』

『我等の神、マジコンヌ様を崇拜するのであれば、それなりの見
返りを』『えよつべ』

その言葉の後、空から何かが落ちてきた。

…これは…マジコン、か？

『とつあえず、今は挨拶代わりにこくつか贈り物をしておいてやつ

た』

『それから、我等に反旗を翻す者よ、我等はギョウカイ墓場にて待つ』

『我等は逃げも隠れもする必要がないからな』

言葉が終わつたあと、空は先ほどと回じ色々に戻つた。
だが、俺の周囲にはマジコンと想しきものが落ちていた。
…これが、ほんとう真実なんだ。

プラネットユースに帰ると、街の中はずいぶん騒ぎだった。
特に子供達が。

「これ、すげーぞ。俺、このゲーム欲しかったんだよな」「うんうん。これで、この子のゲーム代にまわしていたお金を他に使えるわ」

「おおー、隠れキャラがこんなに簡単に出来るなんて。すげーんだな、マジコンヌって」

みんな、さつき落ちてきたマジコンを拾つたようだつた。
拾えなかつた人たちは、それを羨ましげに眺めていた。

「…マジコンヌを崇拜すれば、マジコン、もういるのよね」

「そんな思考、しちゃダメだー！」

俺はそう訴えるが、誰もそんな言葉に耳を貸してはくれない。
やつぱり、人間つて欲望には弱いんだな。
そつ思いつつ、教会へ帰ることにした。

.....
S
A
V
E

第24話 終わる平和な日々（後書き）

とつとつ、マジノコンヌが動き始めましたよ。

ケイス「とにかく、戦闘の描[画]が皆無なんだが」

苦手なんだよ。

ケイス「じゃあ、何でこの作品を書いてるんだよ」

ま、いいじゃん、そんなことね。

とこうことだ。

それでは次回、「4女神、集結」でお会いしましょう。

第25話 4女神、集結（前書き）

ケイスはマジHコンヌが送り込んだモンスターを打ち倒し、教会へ戻っていた。

そこで待っていたのは…。

11／13 ちょっと文章いじりました。ヘタレさん、サンクスです。

第25話 4女神、集結

「ただいまー」

俺はそう言いながら、教会のドアを開け中に入つた。
だが…そこには、誰もいなかつた。

いつもだつたら、街のおばちゃんたちといーすんが世間話をしていたのにな。

やっぱり、状況は変わつちまつたのか。

そんな時、教会のドアが『ギイツ』と音を立てて開かれた。

「いーすんせーん、ただいまー」

「いーすーん、おなか減つたー」

教会でボーッとしている間に、ネプテューヌ姉妹が帰つてきたようだ。

「お疲れ、二人とも」

「あ、ケイスー。ケイスもお疲れー」

「あ、たすがに疲れましたー」

ネプテューヌはほほいつもどりおつ、ネプギアは…相当疲れてるみたいだな。

ネプテューヌに肩を貸してもらつて、歩くのも億劫な感じだつた。

「やついたら、いーすんがどーしているか知つてる?..」

いつもこの時間だつたら教会にいるはずなんだけどな、と続ける。
ま、多分だが自分の部屋にでもいるんだる。

「…私が何か?」

「どわあああつー。」

扉のほうを向いていたから、いーすんさんが後ろから近づいてきて
いるのに気づかなかつたよ。

「失礼な。淑女レディに向かつてそんな声を発するなんて」

いーすんさんは、いつも通りふふふと浮いていた。
まあ、顔はげんなりとしていたが。

「とつあえず、今の状況を伝えておきますね」

そつ言ひて、いーすんさんは真面目な顔をして切り出した。
要約すると、こんなことらしこ。

- ・ プラネテュースだけでなく、ラステイション、ルウェイー、リーン
ボックスもモンスターに襲撃されたこと。
- ・ 4国とも、モンスターの襲撃を避け、今は一時的に平和になつて
いること。
- ・ 小型機械（まあ、おやじハマジハソンのことだらつ）が空から降
つてきたこと。
- ・ その機械のおかげで暴動が起つてこいる地域が存在してこゐる。
- ・ 4国のシェアが減少し始めていること。

「つてゆーことは、ゲームギョウ界全土でプラネテュースと同じ状

況が起きてるって事?」——すん

「やつ思つて間違いないかと」

「で、それらを打破するには、奴らの招待を受ける必要がある、つて事ですか」

「そうですね、おやうそれしかなこいでしう」

だけど、未知数の敵相手には、方策が立てにくこととか。

「だつたら簡単だよー。わたしがひとつ飛びキョウカイ墓場にいつて、誰かを倒してくれればいいんでしょ?」

おい、ネプテューヌ。短慮にも程があるぞ。

「お姉ちゃん、誰を倒せばいいか分かつてるの?」

「そんなの…全部倒せばいいんだよつー」

ガクッ。

そうじやないだろ、ネプテューヌ。

「つたぐ。戦力が分かつてないのにどうやって戦うんだよ。ブランさんとかベルさんが100人ずついても、勝てるのか?」

「…そこは気合で」

「気合だけじゃ、どうしようもないだろ」

まあ、実際はマジック・ザ・ハード一人なんだろうけどな。

原作どおりであれば。

しかも、4女神でかかつても勝てない相手だぞ。

「そこで、提案があるんです。ネプテューヌさん、聞いてもらえますか？」

そう言って、いーすんさんがネプテューヌに耳打ちを始めた。

「い、いーすん。なんかこそばゆいよお

あ、終わつたみたいだ。

「といふことですが、いかがです？ ネプテューヌさん

「他の女神に協力、か。…うん…いいんじゃないかなっ！」

「それじゃ、通信室に急ぎましようか」

そう言って、俺達はその通信室とやらに来たんだが。

「とりあえず、教祖と女神だけで話をします。だから、ケイスさんとネプギアさんはここで待っていてくださいね

「そう言うと俺達一人を残し、いーすんさんとネプテューヌは通信室へ入つていった。

「いらっしゃ、プラネットコースのイストワールです。皆さん、聞こえていたら返事をお願いします。それから、できれば女神様も同席願います」

私は通信機のスイッチをオンにしてそう問い合わせた。
しばらくしてから、それぞれのスピーカーから返事が返ってきました。

「いらっしゃ、ラステイションのケイだ。珍しいね、イストワール自ら連絡してくれるとは」

「リーンボックスのチカよ。ほんと、珍しいわね」

「すいません、ルワーのミナです。今組み上げてる最中なので、ちょっとだけ待ってください」

ルワーの映像だけ『SOUND ONLY』と表示されています。
あそこだけ、組み立て式ですからね。

「すいません、終わりました」

ミナさんのその声を皮切りに、話を始めました。

「さて、要件は分かっておいでとは思いますが

「まあ、そうだね。あんな状況の後では、それくらいしかないだろ
う」

流石はケイさん。

もうすでに情報を集めている、といったところですか。

「一応、イストワール様が何を言おうとしているかは分かっているつもりですが」

「まあ、世界の危機、と聞いて黙つているわけには行きませんからね」

ミナさん、チカさんのお二方も大体分かっているようですね。

「わかりました。それでは、単刀直入にお伺いします。女神様方の力を貸していただけますか?」

私はそう言いながら、頭を垂れる。

「そうだね、見返りはどうなつて…」

「…」の、バカケイ!…私で良ければ、いくらでも貸すわよ

ラステイションはOKですか。

「ルゥイーも異論はありません」

「ですが、女神様不在時の戦力は?」

「それについては」「安心を。女神様には劣りますが、有能な方が居りますので、心配は」「無用です」

「そうですか、ありがとうございます」

ルゥイーもOKのようですね。

「リーンボックスも、問題なしよ」

「あー、一番抵抗するかと思っていたのですが」

「それについては大丈夫ですわ。そのために、あとでお姉さまの写真を撮りためておきますから」

「は、はあ。やうですか」

リーンボックスも… ようですね。

「やういえば、プラネットコースは大丈夫なのかい？」

他の国は出す、と明言ましたが、私は出すとは明言しませんからね。

「はい、プラネットコースはネプテューヌさんとネプギアさんをお出しよろしくしています」

「ほう」「ええ?」「ふーん」

まあ、他の国は出るのは女神だけのようですからね。
候補生は出せないでしょ?からね。

「それでは、集合はいつにしましょうか」

「正直、早いほうがいいとボクは思つてこる。明日でいいだい?」

ケイさんがそう発言する。

これは願つてもない発言ですね。

「問題ないと思います」「わかったわ、今夜中に何とかするよつ、努力するわ」

「ほんちも問題ありません。それでは、明日の暁くらいにブランチユースの教会でお会いしましょう」

「わかった」「はい」「ええ」

「これで、準備は整いましたね。」

side イストワール END

時間は少し戻って、イストワールとネプテューヌが通信室へ入つて行つた後。

「どんな風になるんでしょう、ケイスさん」

「多分、どこかの女神様もみんなのことを考えてるし、賛同してくれるんじゃないかな」

多分ね。

一番の心配はリーンボックスだけビ。チカさん、お姉さま離れがちゃんとできるか心配だ。

「そういえば、ケイスさんは4国全部の女神に会つたんですね?」

「そうだね。みんないい人だつたよ」

みんなシスコンだけだね。
つて、ここもそうか。

「…皆さん、美人でした？」

「うーん、どうなんだろう。美人って言つより、かわいいくつの方が
近いかな。でも、みんな綺麗だったよ」

そう言つたあと、ネプギアから黒いオーラが出る幻覚を見たんだが
…。
幻覚…だよね？

その次の日。

運命の日がやつてきた。

まず現れたのは、ルヴィーからの4人だった。

…4人？

「へえ、ここがプラネットユースの教会なんだ。結構いいところじ
やない」

「…」

「ロム様、ラム様。いい子にしてるつて約束、忘れてないですよね
？」

「もっちらん！」 「うん、約束…した」

ああ、あの2人がついてきたのか。

「お久しぶりです。ブランちゃん、ミナさん」

「…ケイス?」「ケイスさん、ビラントーン君?」

「いや、今ここに厄介になつたんですよ」

「うん、家族四人、水入らずって感じか。
あれ、そういうえば…」

「グリさんはお元気ですか?」

「まあ、とりあえず。流石に昨日の襲撃が思いのほか厳しかったみたいで、今日は寝入つてますけど」

グリさん、がんばったんだねえ。
もう信用されてるんだ。

くいっ、くいっ。

大体分かつてるけど、ね。

「「めぐ」「めぐ、口呑ちゃんにラムちゃん。無視してたわけじゃないんだよ」

「ジーだか」「…」

この二人は…どうしよ。
ひとつあえず、ネプギアに預けるか。

「ネプギア、ちょっと来てもらいたいのか?」

俺は少し大きめの声でネプギアを呼んだ。

「ケイスさん、何ですか？」

「すまん、この二人の相手をお願いできるか？ 確か、冷蔵庫にジュー
ースがあつただろ？」

「は、はい。それじゃ二人とも、いらっしゃいがうぞ？」

ネプギアは何かギクシャクしながら口ムラムを連れて行った。
「あ、そうだ。イストワールさんがあつちで待っています。早く行
たほうがいいのでは？」

「せうですね、せうをせむらこます」「…じゅ

side ラム

客間に通された、まではこいんだけど。

「……」
「……」

さつきから、ネプギアと呼ばれた子とロームちゃんがずっと睨みあつ
たままだつたり。

「…」の、泥棒猫

ロームちゃん！？

誰か助けて…。

ケイス、本当に恨むわよ。

s i d e ラム END

次に到着したのが、リーンボックスの二人だった。

「ケイスさん、久しぶりですね」

「お久しぶりです、ケイスさん」

つて、何で二人とも目の人下に隈があるんだよ。

「疲れてるみたいですね…」

「ええ、ちょっとの間ゲームできませんから、一晩中ゲームを」

…アンタって人は（笑）

「私は、昨日撮つたお姉さまの写真を現像していたら…もう陽が上つてました」

…アンタもか。

「ま、まあ、何も言わないでおきます。イストワール様が奥で待つてますから、そちらへ」

そう言つと、二人は歩き始めた。

…ヨロヨロ、と。

あとは、一国だけだな。
そう思つたときだった。

「ケ、ケイスー!？」

不意にそんな声が聞こえた。

「ノワちゃん?」

その声は、どう聞いてもノワちゃんのものだった。

「元気だった?」

「ああ、うん。俺はね。ノワちゃんは?」

「…うん、私も

それだけ言葉を交わすと、お互に無言になってしまった。

ノワちゃんの顔は真っ赤だけ、俺の顔も負けずに真っ赤なんだろうな。

「はあ。ボクは先に行かせてもらひよ。もうへつ

ケイはそう言つと、先に教会に入つていつてしまつた。
逃げたな、奴め。

「じゃ、じゃあ、入るつか

「う、うん。そうね」

な、なんか変な空氣だな。

そう思い、照れ隠しつこみとしたことをした。

「お嬢様、お手をどうぞ」

「はい／＼」

「うわ、何コレ。

自分で言つておいて何だが、すげい恥ずかしい。

俺達は顔をさらりと真っ赤にして、教会に入つていった。

「わい、本日はお集まり頂き、ありがとうございます」

いーすんさんのそんな言葉から、集会が始まった。

「早速ですが、皆さんすでに今の状況は把握していると思います
しこでしゃつか」

いーすんさんのその言葉にて、その場にいる全員が首を縦に振り、肯定の意を表す。

無論、俺も。

「ですので、今考えつる最強のパーティーディーと望みたいと考え
てこまか」

そつぱつて、いーすんさんは手元の紙に墨を落とす。

「私が考えているのは、4女神様および、ネプギアさん、ケイスさんの6人ですが。異議がある方は？」

いーすんさんのその発言に、ケイが反応し、手を挙げた。

「ひとつ、確認させてくれないか？なぜ、ケイスがそのメンバーに入っているんだい？」

「ケイさん、私は先ほど、『今考えうる最強のパーティー』と言いましたよね」

「ああ、そうだったね。それが何か？」

「であれば、女神に勝利したことのある方を入れるのは当然としますが、いかがですか？」

「ツ

うわ、いーすんさん、えげつなつ。

「他には…なにようですね。それでは、ネプテューヌさん、ノワールさん、ブランさん、ベールさん、ネプギアさん、ケイスさん」

「…………はい」「…………」

「辛い戦いになるかもしだせませんが、よろしくお願ひしますね」

「うんー。」

「ええ、もちろん」

「…できる限り」

「 もりのとですわ

「 はこつー。」

「 ああ

全員、それぞれの言葉で答えた。

だけど、心は一緒にはずだ。

打倒、マジHコンヌ！

そして、俺達6人はそのまま転移室へと向かつた。

side ロム

わざわざあわての部屋でネプギアちゃんと色々お話をした。

オレンジジュースや色んなお菓子を出してくれた。

ネプギアちゃんは、私の敵だけど…そこまで嫌いじゃなくなつた。

そうしたら今度はリムちゃんがむつとしてきて。

変なの。

「 …ねえ、リナちゃん」

「 何です、ロム様」

ミナちゃんがそう優しい声で答えてくれた。

「 ケイസさんとお姉ちゃんとネプギアちゃん、無事に帰つてくれるよ
ね？」

「 セウですね。わざわざおまかせしてもらひます、ロム様

「 うん。」

私はその言葉を信じて疑わなかつた。

s.i.d.e 口ム END

s.i.d.e イストワール

「それでは、今から皆さんをギョウカイ墓場へ転移します」

「後は、このスイッチを押すだけなのですが。
なのに、やけに憚られます。
そんなとき。

『おつけー、いーすん。いつでもいいよー』

そう、ネプテューヌさんの声が聞こえました。
いつもながら、間延びしている声。

この人は、こんな状況でも不安を一切感じないのでしょうか。

「畠さん、くれぐれも気をつけてくださいね」

そう言いながら、コンソールのスイッチを押す。

その後、部屋の中を映すモニタが紫色に染まっていく。
そして、色が正常に戻ったとき、そこには誰も残っていなかつた。
おそらく、転送が成功したのだろう。

「無事、畠さんが帰つてきますよつ」

私は何かにそつとぶやいた。

...
side イストワール
SAVE
END

第25話 4女神、集結（後書き）

「うわあ、書きたいこと全部入れたら、『そんなこと』になつた。

ケイス「うわあ。いつもの1・5倍くらい？」

まあ、そんな感じ。
けど、長さ的に削つたものもいくつもあるんだ。

ケイス「たとえば？」

ノツちやんの告白シーンとか。

ケイス「作者、何で削りやがつた！」

いや、書いていて、何回か砂糖を吐き飛ばになつたんで、その部分
全部削つた。

俺、恋愛モノ無理みたいだわ。

とこつことで。

それでは次回、「激突、マジコング」でまたお会いしましょう。

第26話 激突、マジコンヌ（前書き）

ギョウカイ墓場……。

マジコンヌのザ・ハードが待っていると思われる場所。

そこにネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ネプギア、ケイスの6人が足を踏み入れる。

だが、そこは想像を絶する場所だった。

第26話 激突、マジコンヌ

「ここが、ギョウカイ墓場……」

俺はそうつぶやいていた。

確かに、原作で見たことのあるような景色。打ち捨てられたゲーム機、カセット、CD…。そんなものがあたりに散乱していた。

「嫌な場所だね、やっぱり」

ネプテューヌも、いつものような霸気がない。心理的に、ここに来るのは嫌なんだろう。

「やうね。正直、長居はしたくないわ」

そう言いながら、ノワールはあたりを見渡す。まあ、彼女も同じなんだろう。

「…マジコンヌを倒したら、すぐに帰る」

ブランはそう言いながら、持っていた本を開く。
…ここまで来て、読書ですか…。

「夢のような場所ね、こんな空気さえなければ

ベールはあたりを見渡しながらそう言った。

確かに彼女にとつて天国かもな。薄汚れた空気が漂っていなければ。

「……」

ネプギアは一人、放心していた。

無理もない。まだ開眼したばかりの女神ハーデスだしな。

「ネプギア、大丈夫か？」

俺はちつとばかり心配になり、ネプギアにしきり声をかけた。

「…は、はい。なんか、怖」ところですね、ギョウカイ墓場つて

「ま、そうだな。所謂、死者の集まる場所だからな」

「お、脅かさないでくださいよお」

ネプギアは泣きそうになりながら、そう抗議をしてきた。
脅かしてはいけじゃないんだけどな、事実だし。

「さて、それじゃそろそろ行きましょうか」

ベールのその言葉に皆が頷き、全員がばらばらに歩き始めた。
ネプテューヌが先行し、ノワールとベールはあたりを警戒し、ブランは殿を務める。

なんだ。皆、なんやかんや言つて、チームワークいいじゃん。

そんな時、先行していたネプテューヌが俺達のところに戻ってきた。

「みんなー、なんか開けてる場所があつたよー」

俺達はネプテューヌの声に従い、その場所へ急いだ。

ネプテューヌが見つけた開けた場所。

それは、原作では4女神がマジック・ザ・ハードに敗れた場所だった。

こういう流れにだったのか。

そんなことを思つていると、向こうから人が歩いてきていた。

といふか、この状況で歩いてくる奴なんて、一人しか考えられない。

「やつと来たか、女神共」

そう言つと、こちらを見渡す。

そして、俺のところで視線が止まつた。

「ほつ、お前が一緒だつたとはな。面白い戦いになりそうだ」

「ねー、ケイス。あの人のこと知つてるの？…もしかして、元カノ
？趣味悪いなあ」

「ケイスつて、ああいうケバケバしいのが好きだつたんだ。メモし
とかなくちゃ」

「…正直、どうでもいい」

「だったら、二人にしてあげようではありますか」

「…ケイスさんの、不潔」

「だーつ。お前ら、そんなわけないだろうがよ。どう考へてもマジ
エコンヌの奴だろ、あいつ」

「どうしてこうなった！？」

「それじゃ、みんな。気を取り直して、行くよー。」

ネプテューヌのそんな掛け声で、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ネプギアは変身をする。

「「「「「変身つー」「」「」「」「」」

「アーンヴァル、こっちも行くぞ
「了解です、マスター！」

俺も、アーンヴァルにそつ言葉をかけ、アーンヴァルもそれに答えるようにラファールの召還を行う。

「召還陣開放、召還ラファール
〔ゲートオープソサヨン〕
〔コーザンイン〕
「融合合体！」

そして、ラファールに融合し、待機状態となつた。

次は、俺の番か。

「疾風よわれに力を与えん！疾風合体」
〔ラファーメンビネーション〕

ラファールは空中で分離し、俺はそれを纏う。
ラファール・ペガサスモード、合体完了。

そして俺は地面に降り立つ。

「話には聞いていたけど、それが貴方の新しい力なのね、ケイス

そうネプテューヌが聞いてくる。

そういうえば、ノワちゃん以外は初見だったな、この姿。

「ああ。これが俺の射撃モードだよ、ネプテューヌ」「射撃モード？貴方は…」

「ネプテューヌは何か言いたそうだつたが、それを遮り
「さて、敵さんは待つてくれないみたいですよ」

と一言だけ言った。

まあ、マジック・ザ・ハードが襲い掛かってきている緊急事態だつたしな。

「ケイスは下がつてて。ここは私たちが止めるわ。ベール、行ける？」

「誰にモノを言つてるのですか？もちろん大丈夫ですわ」

ガキイイインと音がし、マジック・ザ・ハードが振るつた鎌はノワールの剣で止められていた。

そして、ベールの槍が突き出されていたが、それはマジックハードの左手によつて掴まれ、止められていた。

「隙あり、うりやあああつ！」

ブランがそう叫びながら後ろから襲い掛かる。

それと同時に、ネプテューヌが正面から斬りかかる。

「はああああつ！」

そんな2人の連携攻撃に、マジック・ザ・ハードは鎌を振り回し凌いだ。

「ふん、女神とはその程度の存在か。これならば、私一人で充分だ

な

そつ言いつと、不敵な笑みを浮かべた。

「言わせておけばっ！」

ブランはそう言いながらマジック・ザ・ハードに襲い掛かった。だが、すべての攻撃は紙一重で避けられ、逆に攻撃が加えられていた。

「私たちも行くわよっ」

ネプテューヌがそつ言いつと、ノワールとベールもマジック・ザ・ハードに襲い掛けた。

だが結果はあまり変わらず、全員の攻撃は避けられたり背中の羽を上手く使い凌がっていた。

そして、鎌を横一文字に振られ、女神達が吹つ飛ばされていた。その後、マジック・ザ・ハードは俺のほうを向き、こう切り出した

「さて、貴様はいつ来るのだ？まさか怖気づいたか？」

「さて、ね」

俺はそつ言いつながらランチャーを構える。

そして、マジック・ザ・ハードは俺の方へ突っ込んできた。

「スラスター全開、後ろに下がる。アーンヴァル、ココレットで奴に牽制をよろしく」

『了解です、マスター』

俺はスラスターを吹かし、後ろに下がる。

それと同時にココレットが射出され、マジック・ザ・ハードに牽制を行う。

そして俺自身は、ランチャーを奴に向け、ぶつ放す。

「行けえつ！」

ランチャーから射出されたエネルギー弾は奴に当たったが、奴にはあまり効いていないようだつた。

「お前もその程度か。ならば、死ね」

そう言つて、また突つ込んでくる
今度はさつきよりも疾い！？

俺は、マジック・ザ・ハードの攻撃をランチャーで受けた。
元々攻撃を受けるように作られていなしランチャーは、ギシギシと
嫌な音を立てる。

『マスター、ランチャーの耐久力が持ちません。このままでは誘爆
を起こしかねません！』

アーンヴァルの言葉は聞こえているが、今はこれで手一杯だった。
だが、そんな時俺の元に援軍が現れた。

「隙だらけよつ！」

ノワールはそう言つて、マジック・ザ・ハードに横から斬りかかつた。

「マジック・ザ・ハードは、そのまま横に吹っ飛んでいった。

「大丈夫? ケイス

「サンキュー、ノワール。助かつた」

そんな俺達のところに、他の女神達も駆けつけてきた。

「さて、どうします? 形勢逆転ですわよ?」

「よオ、マジック、随分苦戦しているみてヒジャネヒカ」

不意にそんな声が、マジックが飛んでいった方向とは違うところから聞こえてきた。

ちょっと待て、この口調は…。

「ジャッジ、か。覗き見とは、随分イイ趣味してるじゃないか

「へへッ。随分いいカツコだなア、マジックよオ」

そう声が響いてきたかと思うと、ドオオオオオンッと上から四体が落ちてきた。

何で、ジャッジ・ザ・ハードがこの場面にいるんだ…?

「さて、俺にも戦わせるや、マジック

そう言つて、自身の得物であるハンマーを構えた。

「はアアアアアツ!」

「そう言いながら突っ込んできたかと思つと、俺達の少し前でハンマーを振りかぶり、

「ウリヤアアアアアアツ」

と俺達のところに振り下ろしてきた。

それにいち早く気づいたのはアランだつた。

「えええええええい！」

「そう言いながら彼女のハンマーを下から振り上げる。だが、そんなこともものともせず、ジャッジ・ザ・ハードのハンマーは俺達の元に振り下ろされるのだった。

「うわあああああつ」

気がつくと、全員が吹き飛ばされてしまっていた。

「みんな、あのジャッジって呼ばれてる奴は、俺一人で相手する。
マジックって呼ばれてる奴は、任せた」

「無理よ、ケイス。全員でアイツを先に倒しましょ？」

勇敢と無謀は邊りのよ
ケイヌ

危険ですね、そんなこと

ノワール、ブラン、ベールは俺を心配してそんな声を掛けてきた。
だがただ一人、ネプテューヌだけは違った。

「何か奥の手があるのね。貴方の得意な剣を、まだ使ってないからおかしいとは思つてたのよ」

さすが、ネプテューヌ。
相変わらず勘が冴えてるな。

「「「え？」」「

あ、そうか、この3人は、俺が剣で戦つてゐる見たことないや。

「ま、そういうこと。それじゃ行くぞ、ゴーパーンモード」

そう言つと、ラファールが一度俺の体から外れ、装備の組み換えが行われた。

より接近戦重視に、より速度重視に。

そして組み換えが終わったとき、ランチャーなどの銃器は格納され、変わりに剣が装備されていた。

さて、ここから反撃だ。

.....SAVE

第26話 激突、マジノコノメ（後書き）

戦闘シーンですが、ちゃんと書けてるかなあ。
ちと心配。

ケイス「だけど、ジャッジがここで出でてくるなんて予想外だぞ」「うん、俺も予想外。
書いてたら何故かこうなつてた。

あと、戦闘中なのにネプギアが空氣。

ケイス「あ、ホントだ。戦闘に参加してねえ」

一応理由は考へているんですが、それがこの戦闘終結までにかける
か心配だ。

といつことで。

それでは次回、「ケイスの本氣」でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621w/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 もう一人の協力者

2011年11月19日21時36分発行